NARUTO知識ほぼ0の忍による勘違い忍法帖

ふくふくまる

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＮＡＲＵＴＯの知識がほぼ無い状態で転生した少女。

今生の両親の恩義もあって言われるがままアカデミーに通うが、いずれちょうど良いタイミングで忍とは関係ない職種に就きたい。

しかしあれやこれやと進む中、何故か忍になってしまい、あらぬ勘違いをかけられることになっていく。

※自サイトにも載せております。

目次

プロローグ
第一話　忍がいる世界 …… 1
第二話　主人公との邂逅 …… 4
第三話　班決め …… 10
第四話　担当上忍 …… 14
第五話　サバイバル演習 …… 19
第六話　人たらしの娘（カカシ視点） …… 27
第七話　チームワーク（カカシ視点） …… 31
波の国編
第八話　新任務へ …… 37
第九話　最悪の依頼人 …… 42
第十話　鬼人再不斬 …… 48
第十一話　再不斬ＶＳ第七班 …… 57
第十二話　任務の続行 …… 61
第十三話　サクラの不安 …… 69
第十四話　森の中の出逢い（一部白視点） …… 76
第十五話　尋問 …… 83
第十六話　突破（ナルト視点） …… 88
第十七話　ガトーの襲撃 …… 94
第十八話　落とし前 …… 99
第十九話　タイミング …… 108
間章
第二十話　カカシの受難①（カカシ視点） …… 112
第二十一話　カカシの受難②（カカシ視点） …… 119

第二十二話　亡父の想い（一部三代目時点）――――125
中忍選抜試験編
第二十三話　束の間の平和――――133
第二十四話　新チーム――――138
第二十五話　今世の父について――――144
第二十六話　第七班として――――150

プロローグ
第一話　忍がいる世界

不知火ホタルはアカデミーでも評判の優等生であった。
個性的な忍の卵達の中でひどく大人びており、またそれをひけらかすことなく他の同級生達とうまく付き合っている。
教師の代わりに生徒同士の喧嘩の仲裁に入り、声を掛けるなどといった面倒見の良さもあった。
『不知火ホタルですか？アカデミーの成績も良いし、また穏やかな気性ですから問題行動を起こすようなこともなかったですね。ナルトやキバみたいな悪戯小僧もいましたが、恥ずかしい話、彼女のおかげで教室の雰囲気も良かったです』
アカデミーの教師が語る。
『……ただ、空気を読み過ぎるというか……。これは教師としての長年の勘ですが、全て計算尽くで行動をしているような印象もありましたね。あのうちはイタチだって子供らしからぬ聡明さがありましたが、周囲の生徒達との衝突は多かったんです。それを思うともしかしたら彼女は【そういった才能】を持っているのかもしれません』
よく言えば周囲を味方につける、悪く言えば傀儡にする才能。
しかし一見人畜無害そうな少女の、その根本的な性質を理解する前に不知火ホタルはアカデミーを卒業してしまった。

◇

何をふざけたことを言ってるんだと思われるかと思うが、私こと不知火ホタルには前世の記憶がある。
ぼんやりとでしか覚えていないが、こことは違う世界で生きてきた

ことは確かだった。
おまけに新しく生まれ落ちた世界は前世で流行っていた漫画の世界で、弟から「主人公のナルトの中に九尾がいて～」だとか「サスケは後々木の葉を出る」だとか聞いていたもののすっかすかな知識しかない。
何かこう……、ナルトの中に九尾が封印されていて、何やかんや忍がいっぱい出てきて、サスケ？って子が里を裏切るけど、最後はハッピーエンドになる、みたいなレベルだ。
そしてそんな自分の今生の両親も当たり前のように忍であった。
――ただこの両親、存外出来た人物で。
おおらかで少し抜けたところがある父と、優しくて面倒見の良い母。
血の繋がった両親に対してどこかよそよそしくしてしまう私に愛情をもって接してくれた。
普通、中身に成人した記憶を持っている子供が生まれたら気持ち悪いよね？
本当だったら普通の子が生まれてくるはずだったのに、転生した人間が入っているとか嫌だよね？
本人達には隠しているが、やっぱり一緒に暮らしているとボロが出てほんの少し他人行儀になってしまう。
しかしそんな私を朗らかに育ててくれる両親には感謝しかない。
そのため、本当は忍になるつもりはなかったけれど両親の勧め通りアカデミーに通い、幼い同級生達とうまく付き合いながら優等生然とした態度で授業を受けた。
『ホタルは本当によく出来た子ね。しっかりしているし物覚えも良いし……』
『でもな、ホタル。ちょっとくらい子供らしく羽目を外したって良いんだからな？ホタルはまだ下忍じゃなく、アカデミー生なんだから』
そう言ってくれる両親達は本当に優しい。
私がもし大人になって、転生する前の年齢に追いついて、中身と外見の乖離がなくなったら、遠慮なくいっぱい話したい。

今はまだ子供だから気味悪がられてしまうだろうけど、それが本当に待ち遠しかった。

けれどそんな彼らは私がアカデミー在学中、任務により亡くなってしまった。

私は結局、両親の前で『良い子』の仮面を剥がすことはなかった。

第二話　主人公との邂逅

両親が亡くなったからといって、私の猫被り生活は終わることはない。

いきなり【良い子ちゃん】の仮面を外せるほど器用でもなく、また両親への恩義から通っていたアカデミーを辞めるのは勿体なかった。

授業料をすでに払い終えているというのもあるが、今ここで退学してしまうとアカデミー卒業の学歴が付かないからだ。

この世界のチャクラを持っていない子達は基本的に学校に通っていない。身分の高い子息子女は家庭教師を雇い、一般的な子供達は周りの大人達から教えてもらう。

そしてそんな中、アカデミーは立派な教育機関。

忍術体術を中心に、それ以外の行儀やマナー、基礎的な勉学なども教わるのだ。忍にならなくとも、きちんとアカデミーを卒業した人間は就職に困ることはなかった。

アカデミーを卒業したからと言って忍になれるとは限らないと里の武器屋で働くアカデミー卒業者のおじさんに聞いたため、それは確かなのだろう。

きっと卒業試験の他に下忍になるための試験が設けられているに違いない。

武器屋のおじさんが「俺に才能さえあれば……！」と言っていたが……。嫌味でも何でもなくおじさんの生活はただ羨ましかった。

私もアカデミーの卒業資格を引っ提げて、忍になるための試験に落ち（というか私のような上っ面だけが分厚い人間に受かるはずないだろう）好条件でどこかの会社に就職したい、雇って欲しい。

そして私はその小賢しい目的を遂げるためにアカデミーに通い続け、この度無事に卒業することとなった。

◇

「よおホタル、アカデミー卒業、おめでとさん」
「ゲンマおじさん」
――アカデミーの卒業試験である分身の術を成功させ、担任のイルカ先生から額当てをもらった帰り。
思った以上に簡単だった試験と目的だったアカデミーの学歴を手に入れられて、るんるんの気持ちで帰宅していると後ろから声をかけられた。
そこには親戚のおじさんであるゲンマさんがおり、相変わらず細い千本をタバコのようにくわえていた。
「おじさん呼びはやめろよ。まだ俺は３０だぞ」
そう言って呆れるゲンマさんに私は小さく笑う。
ゲンマさんは私の父の歳の離れた弟であり、両親が亡くなった後時折顔を合わせては気遣ってくれる。
最初は一緒に暮らすかという話にもなったけれど、私の中身はすでに成人しているし、一人でも平気だと言って断った。
それに若い独身男性の家に子供がいたらゲンマさんも遊びづらいだろう。
「ゲンマさんは任務帰り？今から火影邸に行くの？」
「いいや、今日は非番でな。そこらへんふらふらしてただけだ」
ふうん、と思ったが、わざわざアカデミーの近くを散策するかな。彼の性格上、何か用事がない限り家で休んでいるか同僚のライドウさんと連んで出掛けているかのどちらかだ。
違和感を抱きながらも聞き返すことなく「そうなんだ」と言えば、ゲンマさんは苦笑しながら口を開く。
「どうだ。アカデミーの卒業祝いに飯でも食いに行くか」
ゲンマさんのその言葉を聞いて嬉しくなる。
それと同時に胃がキリキリするほどの罪悪感も湧き上がった。
全然忍になるつもりもないのにアカデミーの卒業祝いをしてもら

うのは申し訳ない。ゲンマさんはぶっきらぼうだが、基本的に面倒見が良く優しいのだ。私が彼の兄の娘だってこともあるが中々可愛がってもらっていると思う。

しかしここでアカデミーの卒業祝いを断ってしまっても、それはそれで角が立つだろう。

「いいの？ゲンマさんの気持ちは嬉しいけど、普段任務で忙しいし……。非番の時はゆっくりした方が良いんじゃない？」

「子供が気を使うんじゃねえよ。それに俺も腹が減ってるしな」

「そ、そう？それじゃあお言葉に甘えようかな……」

やんわりと断りを入れてみたものの、きっぱりと言われてしまったからには大人しくて卒業祝いをしてもらおう。

でもなあ、これで結局忍にならなかったら本当に悪いな……。

前世の記憶がある影響かなるべく痛いことも辛いこともやりたくない。

弟から聞いた話によると【ＮＡＲＵＴＯ】の世界って中々厳しいんでしょ？それだったらなるべく忍とは関係ないところで生きていきたい。

アカデミーまでは今生の両親の恩義もあって我慢できたけどその先は駄目だ。私に忍なんて到底やっていけると思えない。

「あ」

するとその時、視界の隅に金色の髪の少年がうつった。

ナルト君だ。この世界の主人公だ。

木の枝に括り付けられたブランコに座り、どんよりとした空気を背負って俯いている。噂によると彼は卒業試験に落ちたそうだ。

ナルト君とはアカデミー時代に少しだけ交流したことがある。

火影岩に落書きをした罰則で、イルカ先生に出された課題プリントを一人教室に居残って格闘していた。

その時に何だか放っておけなくなってしまい、あれやこれやと面倒を見たのだ。

平和で穏やかに過ごしたいのなら、あんまり主人公と関わるべきではないと思う。何がきっかけでトラブルに巻き込まれてしまうか分

からないから。
だけど私自身アカデミーでは非常に影が薄く、同級生達と付かず離れずの態度をとってうろうろしていたため、ちょっとくらい関わっても良いかなと思い声をかけた。
どうせアカデミーを卒業したら、私は忍にならずどこか適当なところに就職するんだ。
こんな霞のような奴と関わっても、ナルト君に何の影響もしないだろう。
ナルト君がこの先どんな風になっていくのか、前世の弟の話を適当にしか聞いていなかったため分からない。
けれどきっと、私のことなんてアカデミー時代にちょっと喋ったことがあるクラスメイトCくらいの印象に留まるはずだ。
「……」
だけどどうしようかな……。
見るからに落ち込んでいるナルト君に話しかけに行っても良いのだろうか。
「誰こいつ？あ、アカデミーの時にたまに勉強教えてきた奴か」みたいな感じに思われない？勉強教えたりするだけで対して仲の良くないクラスメイトが話しかけてきたら距離が近いと思われない？
それに……。
「どうした、ホタル」
「え、いや、その……」
ゲンマさんが訝しげに聞いてくる。
ナルト君は木の葉の里の大人から明らかに避けられていた。
アカデミー内とかではそういったことはなかったけれど、里の大通りに出ると色んな大人達が眉を顰めてナルト君を見つめるのだ。
前世の弟情報でナルト君の体には九尾が封印され、その影響で大人達から邪険にされていると聞いていたが、実際にそれを見ると辛すぎてしんどくなる。
ゲンマさんがナルト君に対してどう思っているか分からないけど……。

ブランコでしょぼくれている彼のことを知らないふりをしているのを見る限り関わりたくないのか、それか火影様から無用な接触はしないよう命じられているのかもしれない。
そんな大人であるゲンマさんの手前、ナルト君のもとに行って良いものだろうか。
でも、やっぱりこう、落ち込んでいる子を見ると前世の大人センサーからか放っておけないというか……。
ち、ちょっとくらいナルト君に話しかけても良いかな？
いや、大丈夫だよね？アカデミーのクラスメイトCがぱっと行って少し話すだけなんだもん。それに今の私はどこからどう見ても事情を知らない子供だ。
「ゲンマさん、アカデミーで一緒だった子がいるから、話しかけに行っても良いかな？ちょっとだけ待っててもらっても良い？」
そんな私に、ゲンマさんは少しだけ苦笑し「行ってこい」とだけ言った。

◇

「ナルト君、大丈夫？」
「……ん？ホタル？」
しょんぼりとしているナルト君に近寄って声を掛ければ、顔を上げて目をぱちぱちとさせた。
「体調悪そうにしてたから声掛けたんだ。大丈夫？家まで帰れそう？」
「え、あ、ええと、そ、そうなんだってばよ！俺ってば卒業試験張り切りすぎてちょーっと疲れちったんだ！心配してくれてありがとな！」
ナルト君は何というか……、少し意地っ張りな一面があるから馬鹿正直に「ナルト君、卒業試験もしかして落ちたの？大丈夫？落ち込んでるよね、元気出して！」と言ったら逆効果だろう。

彼自身もきっとそう思われたくないだろうから、わざと体調が悪いのかと聞く。
「そうなの？まあ、確かに緊張しちゃうよね。……ところでナルト君、君に良いものをあげよう」
そして上着のポケットの中から紙を取り出した。
「一楽のラーメン無料券！」
「えーー!!ありがとうってばよ！それに２枚も!?」
「うん。２枚あるからイルカ先生と行ってきたら？ナルト君、いつも先生のお世話になってるからたまには奢ってびっくりさせなよ。あれ、奢りっていうのかな、これ……」
結構前にもらった一楽の無料券を渡すと、ナルト君は嬉しそうに笑ってくれる。
良かった。一時的な慰めにしかならないけど、さっきの澱んでいた空気が吹き飛んだようで安堵する。
そうそう、ナルト君。イルカ先生と一楽行って、ラーメン食べて、元気を出すんだ。
卒業試験に合格した私がナルト君を慰めても何様？みたいな感じになるだろうから、イルカ先生にいっぱい話を聞いてもらいな。
放っておけなくて話しかけたものの、根本的な悩みを解決することは難しそうなので、他の人（イルカ先生）に任せる……。人としての器が小さ過ぎて自分でもどうなんだと思うが、これで良しとすることにしよう。
「じゃあ私、人を待たせてるから。ナルト君、またね」
「おう！元気出た！ありがとな！ホタル！」
そしてゲンマさんのもとに戻る。
これからどうなっていくかふんわりとしか分からないけど、やっぱり人の良いナルト君にはなるべく笑顔でいてもらいたい。
紙面の世界ではあるけれど、彼は現実に生きている１２歳の男の子なのだから。

第三話　班決め

アカデミーの卒業試験に合格した者には説明会が設けられる。
教室に着けばすでに試験合格者達が集まっており、私は隅の方の空いている席に座った。
そしてそのすぐ隣に座る女の子に声を掛ける。
「おはよう、ヒナタちゃん」
「ホ、ホタルちゃん」
黒髪のおかっぱ頭に淡い色の瞳をした清楚な雰囲気の女の子、元クラスメイトの日向ヒナタちゃん。あの名門日向一族の子であるがそれを鼻にかけず、むしろちょっと控えめな性格の心優しい良い子である。
アカデミーでは結構話す方で、二人一組の組手の授業の際にはよく一緒に組んでくれた。
「ヒナタちゃん、額当て首にかけてるんだ。可愛いね」
額当ての付け方によって個性は出るが、ヒナタちゃんの首にかけるスタイルはとても可愛い。それを言えば、照れたようにぽっと頬を赤らめた。
うーん、可愛い！（ちなみに私はというと適当に頭に巻いている）
周りを見渡すと前方の席にはナルト君がおり、何故かサスケ君やサクラちゃんといった子達と騒いでいるようだった。
卒業試験に落ちたはずのナルト君の存在に首を傾げたが、きっと私と別れた後に何かあったのだろう。
「今日の説明会、どんなこと話すのかな……」
するとヒナタちゃんが不安そうに呟いた。
「忍になるための心構えとかじゃない？あとは下忍になるための試験の説明とか……」
「下忍になるための試験？」
「多分だけど……、アカデミーの卒業試験の他にもう一つ試験があるんじゃないかな？アカデミーの卒業生なのに忍になってない人って

結構いるから、そういう試験があると思って……」
そう話せば途端にヒナタちゃんの顔が青くなる。
あ、あれ？
「わ、私、てっきりアカデミーの卒業試験に合格したら下忍になれるかと……！」
「え、ええ!?でも分かんないよ？私の考え過ぎかもしれないし！ごめん！変なこと言っちゃって！」
慌ててそう言うが、正直言って下忍昇格試験が無ければ困るのは私だ。
その試験に落ちて忍にならず、アカデミー卒業という学歴を引っ提げて就職する将来設計が崩れてしまう。
あれー？試験あるよね？大丈夫だよね？
しかし私の単なる想像に過ぎない。もしかしたら昇格試験は無いのかもしれないと思うと、ヒナタちゃんとは別の意味で不安で仕方なかった。

◇

それからやって来たイルカ先生に今後の予定を教わった。
今回合格した卒業生は２８名。通常スリーマンセルでチームを組むらしいが一人余るため、一グループのみフォーマンセルになるそうだ。
え、さっそくチーム作るの……？
てっきり下忍昇格試験（推定）を個人でやってからチームを作り下忍として活動していくと思っていた。
この段階でチームを作るとなると、その試験はチームで協力して行わなければならない試験である可能性が高い。
ということは、試験の種類によっては私一人が落ちたら連帯責任で他の子達も試験に落ちてしまうってこと？

「ど、どうしたの？ホタルちゃん、顔色が悪いよ？」
「だ、大丈夫だよ……うん、本当に大丈夫……」
全くもって大丈夫じゃないが、ヒナタちゃんに笑って答える。
昇格試験がなくても死、昇格試験があっても（チームの連帯責任が問われるものだったら）死。
私一人のせいで他のチームメイトが下忍になれなかったりするのは流石に最悪だ。

そしてそんな絶望する私をよそに説明会は進んでいく。
壇上に立つイルカ先生は次々と班分けを発表していった。
「えー、第七班。春野サクラ、うずまきナルト。それとうちはサスケ！」
前方に仲良く隣り合って座っているナルト君達がチームメイトの名前を聞いて一喜一憂している。
アカデミーで見ていたから何となく分かるが、ナルト君はサクラちゃんのことが好きで、サクラちゃんはサスケ君のことが好きなのである。
見事な三角関係と個性豊かなキャラクターで構成された第七班の騒がしさに、荒んでいた私の心も少しだけ冷静になった。
目の前にテンションの高い人がいると、逆にスンとなるあの感じだ。
「……それから、不知火ホタル！」
「……はい？」
最後に呼ばれた自分の名前に思わず首を傾げてしまう。
周りも４人目がいたことにざわめいていた。
「ホ、ホタル!?それだったらサスケを抜いてスリーマンセルが良いってばよ！」
「何言ってんの！ナルトが抜けてスリーマンセルよ！あ、でも女の子が増えたらサスケ君の取り合いになっちゃうかも……！」
「足手纏いは３人もいらねえ」
やばい。めっちゃ好き勝手言われてる。

私が第七班に入ったことで余計な混乱を招いている。
どうしたもんかと思っていると、イルカ先生が一喝した。
「第七班はフォーマンセルとして動いてもらう！……ホタル、まあ、あれだ。班のフォローよろしくな」
え、ええ……、そんなよろしくされましても……。はっきりと承諾することなく、とりあえず笑って頷いてみせたが非常に不安だ。
というかフォローってなんだろう。何をフォローするんだろう……。
悪戯小僧のナルト君と針鼠のようにツンツンしているサスケ君の間を取り持てということかな。いや、でもサクラちゃんいるじゃん……。あ、でもサクラちゃん、サスケ君のこと好きなんだよな……。面倒くさいな、この班。
そんなことをぼんやりと思っていると、隣に座るヒナタちゃんが小さな声でつぶやいた。
「いいなあ。ホタルちゃん……」
そういえばヒナタちゃんはナルト君のことが好きなんだっけ……。

第四話　担当上忍

班分けが終わり、午後からは担当上忍の紹介となった。
説明会の教室に上忍の方がやって来て各班の子達を連れて行く。ヒナタちゃんも綺麗な女性の上忍に呼ばれて、教室から出て行ってしまった。
ぽつりぽつりと人がいなくなり、最後に残ったのは第七班である私達だけ。いつまで経っても来ない担当上忍にみんなイライラしてきている。
……私達の先生、集合時間を間違えていたりしないだろうか。いや、でも忍同士がそんなポカミスするかな……。
けれど二時間以上待っても来ないのは流石におかしい。
とりあえずアカデミーの職員室にいるだろうイルカ先生に担当上忍が来ないことを伝えようと席を立った。
無いとは思うが、もしかしたら本当に集合時間の伝達ミスが起きているかもしれないし。
「ん？どうしたんだってばよ」
「先生が来るの、ちょっと遅すぎるじゃない？何かあったかもしれないから、職員室にいるイルカ先生に話を聞いてくるよ」
「あ、悪いわね……。私も行こうか？」
サクラちゃんがそう言ってくれるが、イルカ先生にちょっと聞いてくるだけなので一人でも大丈夫だ。
彼女はナルト君やサスケ君の話を抜きにすると、割と親切だししっかりしている。
代わりに担当上忍の先生と入れ違いになってしまったら待っていてほしいと伝え、私は教室を出た。

◇

担当上忍って誰なんだろ……。
アカデミーの廊下を歩きながらふと考える。
あの主人公であるナルト君の担当上忍なのだ。きっと個性的であるに違いない。
前世の弟の話を適当に聞いていたためナルト君やサスケ君のことしか分からない。あれ、でも何となくサクラちゃんは聞いたことがあるような……。あと、何だっけ。
カ……カ……カなんとかさん……。主要人物にそんなような名前な人がいるのをぼんやりと覚えていた。
するとその時、廊下の向かい側から誰か歩いてくるのが見えた。
銀髪で口元を隠した気怠そうな人だ。
しかしあんな先生、アカデミーにはいない。
もしかしたら第七班の担当上忍かもしれないと思い、目の前の人に声をかけた。
「すみません。第七班の担当上忍の方でしょうか？」
「……キミは？」
ここで名乗らないと失礼だろうなと思う気持ちと、見るからに怪しそうな人に名前を教えるのは何か嫌だという気持ちが相反する。
アカデミーにいるということは得体の知れた木の葉の忍であるのは確かだ。けれど怪しすぎる外見に戸惑ってしまう。
これ、罠じゃないよね？下忍になるなら知りもしない人にほいほい名前を教えるなとか後から怒られないよね？
どうしようかと元日本人らしく曖昧に微笑んでいると、タイミング良く廊下の角からイルカ先生が現れた。
「あれ、カカシ先生まだこちらにいらっしゃったんですか？教室で第七班の生徒達が待っていますよ。……ん？ホタルじゃないか。わざわざ迎えに来たのか？」
イルカ先生の言葉を聞いて、そこでようやく目の前の忍の身元が判明する。
うんうん、カカシ先生ね。やっぱり担当上忍だったのね。

怪しすぎて名乗るのを戸惑っていましたという態度を出さず（というか出したら失礼すぎる）誤魔化すようににっこり笑って口を開いた。
「はい。何か事情があると思って来てみたら、カカシ先生と鉢合わせたんです。カカシ先生、第七班に所属することになりました不知火ホタルです。どうぞよろしくお願いします」
「キミ中々良い性格してるね」
やっぱりあからさま過ぎたと思うが、ここは見逃してほしい。
「カカシ先生、ホタルはアカデミーでも優秀な生徒でしたよ。問題児ばかりの教室をまとめたり、時に教師の補佐もしてくれていたんです。きっと色々フォローしてくれます」
イルカ先生が善意１００％で言ってくれるが違うんだ。
別に問題児ばかりの教室をまとめていたわけでなく、単に小さい子達が騒がしくしているのを元大人として見逃せずちょっと注意しただけ。それに授業が遅れると放課後延長で授業したりするかもしれないのが面倒くさいと思ったのだ。
教師の補佐だってイルカ先生が大袈裟に話しているだけで、そんな大層なものではない。たまに子供達のテンション高い会話についていけなくて困っていたところ、通りかかった教師に次の授業の準備を買って出て逃げていただけである。
「そんなことないですよ」と否定しても「謙虚だなあ」とイルカ先生に笑われてしまう。うーん、勘違いです。

そして話もそこまでに、イルカ先生と別れて第七班のみんなが待っている教室へ行くことになった。
前を歩くカカシ先生を見る。
やっぱりちょっと失礼すぎたかな……。
「カカシ先生」
「ん？」
「あの、さっきはきちんと自己紹介しなくてすみませんでした」
するとカカシ先生は振り返る。

じっと見つめてくる先生にたじろいでいると、彼はさっきの私がしたようににっこりと目を細めて言い放った。
「ホタルのそれは計算かい？」
「……は？」
「ま、その内分かるか。さっきのことは気にしなくていーよ」
「はあ……」
……計算？いやいや、計算って何だ!?嫌味!?
ていうかこの先生、結構良い性格してるぞ!?

それから教室の扉を開けたカカシ先生の頭上に黒板消しがぽふんと落ちた。そしてイラッとした先生が「お前ら、嫌いだ」と宣言する。
わざとブービートラップに引っかかったのは、後程がつんと教育的指導をするため油断させようとしているのか、それとも単に性格が悪いのかのどちらかだろう。
これから起こりうるだろう第七班の将来に、私はひしひしと嫌な予感がした。

◇

見晴らしの良い場所に移動して、各々の自己紹介をすることになった。
「オレははたけカカシって名前だ。好き嫌いをお前らに教える気はない！将来の夢って言われてもなあ……。ま！趣味は色々だ」
結果名前しか分からないカカシ先生の紹介にずっこけそうになる。
続いて私達が口を開く。
ナルト君の自己紹介はほぼラーメンに関することだったが、将来の夢が【火影になる】ことで主人公らしく堂々とそれを宣言した。
サスケ君は何やら野望があるらしく、うちは一族の復活とある男を殺害するのが目的だそうだ。ここら辺前世の弟が言っていた「サスケ

は里を裏切る」発言に何か関わっていくのかもしれない。
　それからサクラちゃんは女の子らしくもじもじしながら自己紹介をする。ただし嫌いなものはナルト君だとはっきりと言った。ナルト君、どんまい……！
「じゃ、最後にホタル！」
「はい。ええと、もう知っているかと思うけど不知火ホタルです。好きなものは……」
　しかしそこではっと気付いてしまう。
　私、特にこれといって好きなものも嫌いなものもないかもしれない……。いや、倫理的にアウトなことは基本的に嫌いだけど、自己紹介でそれを言っても「は？何当たり前なこと言ってんの？」と思われるだけだ。
　ここは多少プライベートなことを話した方が無難だろう。でも特になあ……無いんだよなあ。無趣味だし将来の夢とかもまだ無いし……。そう思うとあまりにも中身が空っぽ過ぎて虚しくなってくる。
　いや、それでも嘘でも良いから当たり障りのないことを言っておこう。変な目で見られるよりかマシだ。
　体感０．２秒程悩み、私の口はすらすらと動き出す。
「好きなものは甘いもの、嫌いなものは特になくて、趣味は読書です。将来の夢はまだ無いから、これからじっくり決めていこうと思います」
　それらしいことを言ってみたが何だかぱっとしない自己紹介になってしまったな……。自分がいかにつまらない人間か分かったので今後は趣味とか増やしていきたい。
「よし！自己紹介はそこまでだ。明日から任務やるぞ」
　……え、任務？下忍昇格試験じゃなくて？いや、試験ないの!?
　ナルト君がそれを聞いて嬉しそうにしているが、反対に私は冷や汗が止まらなかった。

第五話　サバイバル演習

やはりというか、下忍昇格試験はあった。
あの後、カカシ先生の説明によって試験という名のサバイバル演習があることを知った。
下忍に合格できるのは全卒業生のおよそ三割程。
吐くほどきつい試験のため朝食を抜くように言われたが、一応レーション（携行食）とか準備しておいた方が良いかな。
しかしここで懸念が生まれる。
この段階でチームを組むということは、そのサバイバル演習は一人が脱落すると全員不合格になる一蓮托生型試験かもしれないのだ。
そしたら他のチームメイトに迷惑かけないよう頑張るしかないわけで、合格したら自動的に下忍になってしまう。
どうしよう……！いや、でもこの段階でチーム分けしたのは効率よく試験を進めるためという可能性もあった。なので一概にそうだとも断定できない。
そうして鬱々とした気持ちになりながらも、サバイバル演習の朝を迎えてしまった。

◇

「やー諸君、おはよう！」
「おっそーーーい!!」
随分と遅刻してやって来たカカシ先生にみんなが突っ込む。
また探しにいこうかとも思ったがカカシ先生がどこにいるか分からないし、もしかしたら遅刻癖のある人かもしれないと思い待機していた。
そしてカカシ先生はサバイバル演習の概要を説明し出す。

「ここにスズが3つある。これをオレから昼までに奪い取ることが課題だ。もし昼までにオレからスズを奪えなかった奴は昼メシ抜き！あの丸太に縛りつけた上に、目の前でオレが弁当を食うから」
朝メシ食うなってそういうことだったのね……。レーションを持っているため課題中に食べてしまった方が良いかもしれない。
スズが3つあるということは、必然的に一人は脱落する。
つまり、一人脱落したら連帯責任で不合格になるような一蓮托生型の試験でなかったことにほっと安堵した。
なあんだ。良かった。私は受かるつもりないから、スズを取るようなポーズをしているだけで良いのだ。
それに手加減してくれると思うが、元アカデミー生の私がたった一人でスズを取れるはずない。
……うん？たった一人で……？
何だか試験の真の目的に気付いてしまいそうになりながらも深く考えることをやめる。
いつの間にか話が進んでいたようで、そろそろ試験が始まりそうだ。
「じゃ、始めるぞ！……よーい、スタート!!!」
カカシ先生の声を合図に、私達は一斉に飛び出した。

◇

「どうしたもんかな……」
気絶しているサクラちゃんを前にため息を吐く。
先程カカシ先生からの幻術で何かとんでもないものを見てしまったらしいサクラちゃんは、あまりの衝撃で気を失っていた。
あれから身を隠しながら今までの様子を見ていたのだが……。
ナルト君が影分身を使って飛び掛かるものの、カカシ先生によって軽くいなされ現在木に吊るされている。そしてサクラちゃんは幻術

によって気絶させられ、現在サスケ君と先生が交戦中だ。
　それを見る限り、個人でカカシ先生からスズを取るビジョンが全く浮かばない。
「サクラちゃーん、起きてー……」
「……ううん、ホタル……？ハッ！サスケ君！サスケ君は無事なの!?」
「落ち着いて。さっき見ていたけどサクラちゃんはカカシ先生に幻術を見せられていたの。あとサスケ君は今先生と戦っているよ」
「え!?それじゃあ急いで助けにいかなきゃ！」
「まあ、待って待って」
　今にも飛び出して行きそうなサクラちゃんをなだめる。
　何で止めるのよ！と言いたげな彼女に口を開いた。
「私達、協力し合わない？」
「協力？」
「うん」
　私自身、この試験に受かるつもりはない。
　けれどこのままだと誰もスズを取れずに終わってしまうだろう。それだったら全員で協力し合ってスズを奪い、あとで誰を不合格にするか決めれば良い。
　私はそもそも受かる気がないため、他3人にスズを分配すれば丸く収まるはずだ。
　3人は下忍になれて良し、私は下忍にならずに済む。
　アカデミーに戻れと言われても今回の試験で身の程を知ったと言えば、卒業資格を持って辞めることができる……できる、よね？え、できるよね？
「個人の力でカカシ先生からスズを奪うなんて不可能よ。それなら皆で協力して挑んだ方が効率的だと思う。スズを誰に分配するかは後でじっくり決めれば良いんだから」
　とりあえず情緒が若干不安定なのを隠しながら言えば、サクラちゃんは「それもそうね……」とつぶやく。
「サクラちゃんはナルト君を呼んでくれる？サクラちゃんから言った

方がナルト君も喜んで協力してくれるでしょ。多分今頃集合場所の木に吊るされてる」
「じゃあサスケ君は？」
「サスケ君は私から伝えておく。あ、大丈夫だよ。私、サスケ君のこと狙ってないし、向こうもそんな気さらさらないでしょ」
「ええ、本当に……？」
　サクラちゃんが眉を寄せるが本当に大丈夫だと再度念押しする。中身成人済みの大人が１２歳の子供を恋愛感情で好きになることはないのだから。
「……確かに、アカデミー時代からホタルはサスケ君のこと興味なさそうだったわね。良いわ。ここはホタルに譲ってあげる！」
「話が早くて助かるよ。それにもしかしたらこれがサクラちゃんとサスケ君（＋私とナルト君）の初めての共同作業になるんじゃない？」
「きゃーー！もう何言ってんのよ！」
　か、可愛い～！きゃあきゃあ言ってる恋する乙女のサクラちゃん、可愛い～！
　最初はめっちゃ面倒くさい班に割り振られちゃったなと思ったけど意外と良いかもしれない。忍にならず、すぐにチームを辞めてしまう身であるが何だかほっこりしてしまった。
「それじゃあ、よろしくね」
「ええ、任せて！」
　そしてサクラちゃんのハンズアップに頷き、私達は二手に別れた。

　――カカシ先生とサスケ君が交戦していた場所に行けば、首から下を地面に埋めたサスケ君がいた。
　何とも間抜けな格好に苦笑しながら辺りの気配を窺う。
　うん、カカシ先生はいないみたいだね。罠も仕掛けてなさそうだ。
「サスケ君、とんでもない目にあってるね」
「ッ!?……お前か。何の用だ」
　屈辱的だろう現状にも関わらず、サスケ君がつんと言う。
　相手はまだまだ子供であるため全然怖くない。

「ちょっと提案があってね。サクラちゃんとも相談したんだけど私達4人でスズを取りに行かない？」
「何だと……？」
「カカシ先生の実力を見る限り、個人の力じゃ太刀打ちできないと思う。もちろんサスケ君が弱いと言っているわけじゃなくて、ただ先生が強すぎるってだけ。それだったら全員で行った方がまだ勝ち目はあるんじゃないかな」
「お前らと協力する気なんて無い。仲良しごっこなら他所でやれ。そもそもスズだって人数分ないんだぞ」
「スズは全部奪った後にどう分配するか決めれば良い。じゃんけんでも良いし、それこそ力尽くで奪い合っても有りだと思う。私達の中で一番強いのはサスケ君なんだから、どうとでもなるんじゃない？」
そして地中に埋まっているサスケ君を掘り起こす。
いつまでも身動きが取れないのは嫌だろう。
掘り起こされているサスケ君はどこか不服そうな顔をしているが大人しくしている。
私の言葉のメリットデメリットについて考えてくれていたら良いのだが、果たして素直に協力してくれるだろうか。
「……それに、サスケ君には野望があるんだよね？よく分からないけどその野望を果たしたいなら、なりふり構ってる場合じゃないと思うよ」
「……」
「ナルト君の影分身の術にアカデミーきっての秀才のサクラちゃんの頭脳。それにサスケ君の戦闘センスが加われば、カカシ先生からスズを奪えるんじゃないかな。……もちろん私も足を引っ張らないようにする」
役に立つか分からないがもちろん私も協力する。
黙り込むサスケ君に、後もう一声かなと口を開いた。
「もしかして、一人で試験に合格することに固執なんかしてないよね？利用できるものは何でも利用しなきゃ」
ど、どう……？これでもだめ？協力しない？

サクラちゃんにサスケ君のことを任された手前、やっぱり無理でした～なんてことは言えない。あんな嬉しそうにサスケ君との共同作業を楽しみにしていたのだ。
ここは私の顔を立てると思って承諾してほしい……！
はらはらと窺っているとサスケ君はしばらく考え込んだ後、不服そうに、そしてこれでもかというほど顔を顰めて言い放った。
「……仲良しごっこも協力する気もさらさら無い。お前らを利用するだけだ。誘導ぐらいはやれるだろ」
「ということは手を貸してくれるんだね。サスケ君がいれば百人力だよ」
とりあえず協力してくれるようなので安堵する。
するとサスケ君は忌々しそうに私を睨んできた。
「お前、アカデミーにいた時はうまく本性を隠していたようだな」
「本性？」
「胡散臭い奴だと思っていたが……」
「い、いやいやいや、全然そんなつもりない。え？まさか本気で言ってる？」
もしかして私の言った言葉、悪いように捉えられてる？
いやでも確かに思い返せば、煽っているようにも聞こえる。
サスケ君の説得は成功したものの人間関係にはヒビが入ってしまったかもしれない。
子供に軽蔑された目で見られるの結構きついな……！
何だか犠牲にしたものが大きすぎる気はしたが、気を取り直してサクラちゃん達が待っているだろう場所へ向かった。

◇

「やっぱり我慢ならないってばよ！な～んでオレがサスケと手を組まなきゃいけねーんだってば！」

「チッ、ウスラトンカチが……。誰がドベと手を組むかよ」
「何をーーー!!!」
「ナルト!あんたサスケ君に向かって失礼よ!」
うーん、やっぱりだめかもしれない。
目の前ではナルト君とサスケ君が互いにそっぽを向いている。
けれどこうなることは何となく予想していた。むしろみんなが集まってくれただけでも上々。ナルト君を呼んできたサクラちゃんに改めて感謝したい。
しかしお昼まであと少ししかないため、ここらでそろそろ話を進めなくてはならない。
「みんな来てくれてありがとう。とりあえず今はカカシ先生のスズを取ることに集中しよう。時間もないから5分で作戦を決めるよ。あと、みんなお腹が空いてない?人数分のレーションあるから、それを食べて腹ごしらえもしておこう」
朝食を抜くように言われたため、途中でお腹が空いた時用に持ってきていたレーションをみんなに配る。
「でもさ、どうやってカカシ先生からスズを取るんだってばよ」
「そこはさ……ほら……、ここにサクラちゃんという頭脳がいるわけだから何か良い案がないかと……」
「って私!?私は勉強ができるだけで作戦なんて……。ていうかホタル、あんたあれだけ言っておいて何も考えてなかったの!?」
「おっしゃる通りで……。ただサクラちゃんが作戦を考えて、すばしっこいナルト君が陽動撹乱して、決定力のあるサスケ君がトドメを、じゃなくてスズを取る感じでうまくいかないかなって」
「ホタルはどうするってばよ」
「私はとにかく足を引っ張らないよう援護するよ」
ナルト君とサクラちゃんが気の抜けたように苦笑する。サスケ君も呆れた目をして見ていた。
うんうん。言いたいことは色々あるけど、場が和んだ分良しとしよう。
弁当が用意されているということはおそらく午後もサバイバル演

習をするだろうが、一先ず午前の段階でカカシ先生にどこまでやれるか把握しておきたい。

そうして私達は作戦を話し合い、各々の役割を決定した。

あとはカカシ先生に挑むだけだ。

第六話　人たらしの娘（カカシ視点）

――時を遡って、ホタル達の班分け以前。
カカシは火影室に呼ばれ、この度第七班に所属することになった４名の書類を見ていた。
うずまきナルト
春野サクラ
うちはサスケ
不知火ホタル
基本的に一班スリーマンセルで組むのだが、卒業試験の合格者数によってその都度人数は変わっていく。
「九尾の人柱力にうちは一族の生き残り……。それに加えてフォーマンセルは荷が重いですね」
「何を言っておる。お前ならどうってことはないだろう」
「しかしこの面子でフォーマンセルにする必要はないのでは？」
ただでさえ問題を抱える生徒が２人もいるのだ。おまけに４人もの子供の面倒を見なくてはならないことにカカシは眉を寄せた。
「それなんじゃが……。本来ならば第七班はうずまきナルト、うちはサスケ、そして春野サクラのスリーマンセルにするつもりであった。じゃが、ここで不知火ホタルを入れてみるのも一興かと思っての」
「不知火ホタルを？」
アカデミー最下位のナルトに秀才のサクラ、そして最優秀成績者のサスケ。成績面でのバランスと問題児２人を監視するために編成されたチームであろう。
しかしここでホタルを入れるということは、それ以外の部分で彼女に何らかの役割が期待されているのかもしれない。
そこでふと不知火という姓に特別上忍の不知火ゲンマと、【人たらし】と呼ばれていた男を思い出した。
「もしかして彼女は、あの【不知火ホウカ】の娘ですか？」
――不知火ホウカ。

数年前に妻と共に任務で亡くなった忍で、面倒見が良く朗らかな人柄の男であった。反面、人心掌握術にも長けており、多数の潜入任務から三代目、そして四代目火影の補佐として他里の外交に顔を出す実力者でもあった。

ふざけて誰かが言った【人たらし】の通り、不知火ホウカは一見害のなさそうな顔でするりと懐に入っては意のままに操る。おまけにそれを気付かせず、相手を気持ちよく転がす様にとんだ狸がいたものだと当時幼いカカシは思っていた。

「そうじゃ。不知火ホタルはあやつの一人娘。アカデミーでの評価を見る限り、不知火ホタルにもホウカの性質が受け継がれている可能性が非常に高い」

なるほど。不知火ホタルにナルトとサスケを導く手助けをさせるつもりか。

「賭けすぎやしませんか？忍に年齢は関係ないとは言え、アカデミーを卒業したばかりでしょう。不知火ホウカは里に対する忠誠心があったため良かったですが、娘のホタルはまだガキです。どこで何に影響され、それがナルトやサスケ達にどれほど影響を及ぼすか……」

そしてその手綱を取るのがオレかとカカシは顔を顰める。

「不知火ホタルに面談といってカウンセリングを行った結果、幸い潜在的危険思想はなかった。毒になるか薬になるか一種の賭けじゃが、あの不知火ホウカの才能を正しく引き継いでいた場合、第七班の潜在能力は底上げされるじゃろう」

「はあ……」

「それに不知火ホタルは里の者達の覚えが良い。そこまでは期待しとらんが、後々ナルトと里の者達の調整役になってくれるかもしれんしの」

聞けばホタルは元来の面倒見の良さで時折里内の店の手伝いをしたり、バイトと称して子守や犬の世話といった仕事をしているらしい（ホタルからすれば後の就職活動の布石として働いていただけであるが、それは奇跡的に悟られていなかった）

幼い子供が礼儀正しく手伝いを買って出る様は、里内の者達から随

分と好意的に見られた。
あまりにも出来過ぎな不知火ホタルの印象に違和感を覚えつつも、彼女の存在が第七班にとって吉と出るか凶と出るか。カカシは溜息をつかずにはいられなかった。

そしてそのカカシの勘は正しく、アカデミーの渡り廊下で出会ったホタルは非常に【よく出来た子供】だった。
初対面のカカシに対し警戒心を抱くものの、穏やかな笑みを浮かべて感情を隠す様は、アカデミーでごく普通に過ごしてきたはずの少女にしては異様である。
また自己紹介をしなかったと言う理由で申し訳なさそうにする姿は、どこからどう見てもただの子供にしか見えなかった。
上っ面な笑みを浮かべてカカシを観察する姿と、普通の少女のように落ち込む姿。演じているのかどうか分からないが、ホタルのその二面性は今日明日で到底把握できるものではないと理解する。
――毒になるか、薬になるか。
火影の言葉が頭をよぎる。
そしてあの【人たらし】はとんでもないものを残したなと改めて思った。

◆

下忍昇格試験であるサバイバル演習にて。
もうすぐ日が真上に登りそうなのを見るに、制限時間の昼まであと少しだろう。
監視させていた分身で４人の子供達が作戦を立てているのは見ていた。
（もっとこう、荒れると思ったが想像以上にスムーズだな。ナルトとサスケ、サクラの性格と関係性を鑑みて拗れると思っていたが

……）

カカシの脳裏に焦げ茶色の髪をした少女が浮かぶ。

不知火ホタルの口八丁によって集められた彼らに苦笑した。

すでに試験の基準をクリアしているため、この段階で合格させても良い。

しかし現状彼らがどこまでやれるか気になった。

するとその時、こちらにやって来る気配に気付く。

（そろそろか）

そして次の瞬間、茂みの中から四つの人影が飛び出した。

第七話　チームワーク（カカシ視点）

影分身で分身した４人のナルトが飛び掛かってくる。
茂みの中から現れたそれをカカシはいなした。先程と同じ単調な攻撃。本を読んでいてもかわすことができる。
一人の足を引っ掛け首に手刀し、もう一人の頭を鷲掴んで放り投げる。
チームを組んでいるということは、もちろんこれだけで終わらないだろう。
カカシの予想した通り、続いて飛来してきたのは多数のクナイ。気配を探ればサクラのものだ。
サクラのクナイとナルトの攻撃を避け続ける。
するとその時、足元にワイヤーの線が引っかかった。
（――――誘導か！）
木々の間から現れた巨大な丸太を前に、後ろから気配を察知する。
見れば後ろにはサスケがおり火遁の印を結んでいた。
違和感を覚えながらもサスケの手を片手で拘束し、強制的に不発させる。
（なんだ？印を結ぶのが僅かに遅い。さっき見たサスケの速度と微妙にずれている）
しかしその瞬間、サスケはボフンと煙を立てホタルが現れた。
じゃあサスケはどこに、と思ったその時、迫りくる丸太が煙を立てて消えた。
そして中から虎の印を結び終えたサスケが現れる。
「これで終わりだ!!」
サスケの様子を見るに、先程の火遁で一回切りだと予想していた。
しかし二撃目を放とうとするタフさに驚く。
サスケの口から放たれる巨大な業火。
掴んでいたはずのホタルはすでにおらず、代わり身の術でも使ったのか拳大の石があるのみ。

顔面に向かう火遁の巨大な炎をカカシは跳躍して避けた。
ナルトとサクラの誘導に、ホタルのフェイク、そして最後のサスケ。想像していた以上のチームワークの良さにカカシは自然と笑みを浮かべた。
荒削りであるが伸び代は充分ある。
次の瞬間、カカシの跳躍した先の背後から野犬のような気配を感じた。
（ナルト!?サスケの火遁も誘導の内か！）
「だあああああああ!!!」
ナルトが叫びながらスズに手を伸ばす。
空中で身動きが取れない。
ナルトの手にスズが触れる。
――――ま、あと一歩ってとこだな。
カカシは宙で身を捩り、ナルトの首根っこを掴んで地面に叩き落とした。
そして時計のアラームがけたたましく鳴り響く。
タイムアップだ。

◆

「だあああ!!痛えーー!!でも惜しかったってばよ!!」
「良い線いったわ！次はもっとサスケ君のポテンシャルを引き出す作戦を立てるわよ！」
「火遁の印、指がつりそう。サスケ君の速度で結ぶの無理だよ」
集合場所に集まった４人が口々と言い合う。あのサスケも手応えがあったのか、どこか晴々とした表情をしていた。
カカシは彼らを眺めながら、うんうんと頷いた。
「よーし、お前らお疲れ。とりあえずスズは昼までに取れなかったから弁当は良いよな？腹も減ってなさそーだし」

ホタル以外の一同はぎくりと肩をすくめる。レーションをきっちり食べていたため問題はなさそうだ。
そしてそれを用意した本人（ホタル）は困ったように曖昧に微笑んでいる。
「まず何点か聞きたいことがある。４人で手を組むことを思い付いたのはホタルだよな？何故一人で挑戦しようとしなかった。これがもし個人の力量を測る試験だったらどうするつもりだ」
問い詰めるように聞けばナルトとサクラは顔を青くし、サスケは厳しい表情でカカシを見据える。
当のホタルは何か考え込んだように俯いた後、口を開いた。
「……この試験が個人の力量を測る試験だとは思いませんでした」
「何？」
「もしそういった試験でしたら、わざわざスズを奪い合うようなことはせず人数分用意すれば良いだけです。けれどスズの数は３つ。わざと互いの足を引っ張り合う状況下に追い込むということは、反対に協力して試験を行うことに意味があると思いました」
それに、とホタルは困った顔をして苦笑する。
「ナルト君やサスケ君の戦闘を見て、一人で先生からスズを奪うのは現実的ではないと思いました。それだったらみんなで協力し合った方が確実にスズを取れます」
そしてホタルは同じ班員であるナルト達を一人一人見ながら言う。
「ナルト君は影分身の術を出来ることが何より強みだし、素早さもガッツもあるから場を撹乱させることができる」
「サクラちゃんは罠の作り方や術の飛距離を瞬時に計算できる頭脳がある。作戦だってきっとアカデミーで読んだ教本を覚えていたから立てられた」
「サスケ君はオールマイティだから、どういった作戦に組み込んでもうまくやれると思う。それに単純に強い」
「――ちょっと上から目線で言っちゃったけど……。こういう力のあるメンバーが集まっているなら、カカシ先生からスズを取れると思ったんです」

そんなホタルの言葉にナルトは得意げにし、サクラは照れたように俯いている。サスケはホタルを訝しげに見ているが、悪い気はしないのか何も言わない。
（――――これがあの【人たらし】の娘か）
昨日今日で作られた急造チームをここまでまとめ上げる手腕。およそ十そこらの年齢とは思えない思慮深さに舌を巻いた。
長いこと里から迫害されてきたナルトは自身の力を認めてくれる他者に対して非常に弱い。サクラも、そしてプライドの高いサスケもここまで言われて満更でもなさそうだ。
「だが、時間切れだ。結局お前らはスズを取れなかった」
「弁当があるということは午後もやると思っていましたが……。でも実際は時間切れなんですね。私から言い出したことなので、みんなに本当に申し訳ないです」
素直に謝罪するホタルを前にナルト達は何も言えない。
実力を認め、さらに褒め称えてみせたホタルに強く批判できるほど子供達は非情ではなかった。
これを見越した上で先のメンバーへの賛辞を送ったのならば、彼女は相当な狸である。
「でもホタルのせいだけじゃ無いってばよ！」
「そ、そうよ！ホタルの案に乗っかったのは私達なんだし！」
「いや、でも本当にごめん……。そもそも午後からもやるって思い込んでいた私が悪かった。カカシ先生、何とかなりませんか？スズは３つあるわけだから、私以外のみんなを下忍に昇格してください」
「全員合格だ」
「は？」
カカシの言葉に全員が目を点にする。
一体何を言われたのか理解できない顔で、４人の子供達がカカシを凝視した。
「だから、全員合格だって」
その瞬間、ナルトは飛び上がり「何で!?何で!?」と詰め寄る。サクラは戸惑い、サスケは顔を顰めている。

それにカカシは苦笑しながら口を開いた。
「いいか?任務は今後班で行う!確かに忍者にとって卓越した個人技能は必要だ。……が、それ以上に重要視されるのはチームワークだ」
チームワークを乱す個人プレイは仲間に危機をもたらし、最悪仲間を殺すことに繋がる。
これまでサバイバル演習ではわざと揉めるように仕向け、それを理解しない愚か者達が何人も脱落した。
「お前らが初めてだ。今までの奴らは素直にオレの言うことを聞くだけのボンクラどもばかりだったからな」
特にホタルなんて携行食を持参する始末。
呆れたようにホタルを見たが、意外にもこの事態を想定していなかったのか目を丸くして驚いていた。
おそらくチームとしてスズを取り、誰か一人を脱落させるまでが試験だと考えていたようだ。まさか全員が合格出来るとは思ってもいなかったのだろう。
『――スズは3つあるわけだから、私以外のみんなを下忍に昇格してください』
もしスズを手に入れられたとして、自分が落ちるつもりだったのだろうか。
先程のホタルの言葉を思い出し、彼女がとんだ狸であるか天性のお人好しであるか、カカシにはまだ把握することができなかった。
気を取り直して、ぽかんとする4人に続ける。
「……忍者は裏の裏を読むべし。忍者の世界でルールや掟を破る奴はクズ呼ばわりされる。……けどな!仲間を大切にしない奴はそれ以上のクズだ」
そこまで話せば、ようやく実感できたのか各々の喜びを噛み締める。何故かホタルだけ茫然としているが、おそらく想定外のことが起きて動じているのかもしれない。
案外子供っぽいところもあるんだなと思いつつ、カカシは空気を変えるように言い放った。
「これにて演習終わり!全員合格!よーし、第七班は明日より任務開

始だ！」
「やったあああああってばよ！オレってば忍者！忍者!!」
ナルトは歓声をあげる。
サクラは嬉しそうに笑みをこぼす。
サスケは満足そうに頷く。
そしてホタルはまだ茫然としていた。
「おーい、ホタル。いつまで呆けているんだ」
「あ、いえ。あれ？私、合格？あれ？」
そんなホタルにカカシは苦笑する。
何だかその姿が年相応の少女のように見えた。

波の国編
第八話　新任務へ

あれ、私何でまだ忍やってるの……？

計画では下忍昇格試験に落ちて忍を辞めるはずだった。サバイバル演習でスズを取り、他三人に譲って辞めるはずだったんだ。

しかし何故か、合格してしまった。

「ホタル？どうしたのよ」

「……え？あ、ちょっと現実逃避してた……」

サクラちゃんの言葉に我に返り、辺りを見渡す。空は雲一つなく晴天で、演習場の森の木々がさわさわと揺れている。

たった今、迷い猫探しのDランク任務にてターゲットである猫の【トラ】をちょうど見つけて捕まえたところだ。

トラはナルト君の腕の中で暴れており必死にもがいている。脱走していたにも拘らず意外にも小綺麗なトラに、もしかしたら自由を謳歌しつつも近所の家々で可愛がってもらっていたのかもしれないと思った。

「こんのバカネコーーー！大人しくしろってばよ！」

平和だ。それを見て何だか笑ってしまった。

◇

何やかんやあって忍になったものの、私の生活は思っていたよりも平和であった。

新米下忍に割り振られる任務はほとんどがDランク任務。ペットの捜索に子守り、店の手伝いから農作業まで幅広くやるのだが、血生臭くないそれらの仕事に私はとても満足していた。

忍なんて危険な仕事を勤められる自信がなかったし、何より命が惜しい。
けれど任務内容がこうも穏やかなものであるのなら下忍も悪くない気がしてきた。忍を辞めるか、このまま一生下忍でいたい。
しかしもちろん、それに納得しない人もいる。
――ナルト君だ。

「オレってばもっとこう、スゲー任務がやりてーの！子守りも芋掘りもノーサンキューだってばよ！」
迷い猫のトラを依頼人に引き渡し、火影邸の一室にてナルト君が騒ぎ出す。
それを目の前に座る火影様は呆れ返り、その隣にいるイルカ先生は叱り飛ばした。
「お前はまだペーペーの新米だろうが！誰でも初めは簡単な任務から場数を踏んで繰り上がっていくんだ！」
「だってだって！この前からずっとしょぼい任務じゃん！」
確かにその通りだとサクラちゃんやサスケ君の顔がしょっぱいものとなる。私は全然満足してるんだけどな……。
ナルト君の癇癪をぼんやりと眺めながら、次はどんな任務が割り振られるか考える。
畑の農作業とかだったら良いなあ。大変だけど収穫した野菜が多ければ分けて貰えるのだ。食費が浮くし、何より採れたての野菜は美味しい。
「良いか？依頼はワシら上層部がその能力にあった忍者に任務として振り分ける。で、任務を成功すれば、依頼主から報奨金が入ってくるというわけじゃ」
ナルト君を諭すように懇切丁寧に任務について火影様が教えてくれる。
「とは言ってもお前らはまだ下忍になったばかり。Dランクがせいぜい良いとこじゃ」
「昨日の昼はとんこつだったから今日はミソだな」

「きけェェェイ!!!」
しかし火影様のありがたい言葉は届いておらず、ナルト君はそっぽを向く。カカシ先生が慌てて謝っているが、教師も大変だなと苦笑いしてしまった。
するとその時、ふと視線を感じる。
ん？誰だと思って見渡せば、何故かイルカ先生が私に向かってアイコンタクトをしていた。
私の顔をじっと見つめ、ナルト君を顎で差し、頷く。
イルカ先生の横を見れば、火影様までも私を見て頷いていた。
……まさか私がナルト君をどうにかしろと？
いやそれは担当上忍の役目でしょ、とカカシ先生に目を向けば、何故か彼もお手並み拝見といった様子で私を見ていた。
え、ええ？何で私？何で私がそういうのをやんなきゃいけないの？班員の問題行動を諌めるのは担当上忍の役割じゃないの？部下の私が上忍差し置いて注意したら角が立たない？そこら辺大丈夫？
そもそも初対面の時から思っていたが、カカシ先生と私は壊滅的にそりが合わない。
何故かカカシ先生は私のやること成すこと意味深に捉え、反応を見るかのようにわざとカンに触る物言いをしてくるのだ。
例えば家で作りすぎたクッキーをお裾分けと称して、第七班に配っていた。
本当はナルト君やサクラちゃん、サスケ君といった子供メンバーのみ手渡したかったのだが、それだとカカシ先生に申し訳ないかなと思い先生にも配ったのだ。
『……どういうつもり？』
しかしカカシ先生は真顔でそう言い放った。
『ちょっと先生！女の子のお菓子に対してそれはないわよ！』
『ああ、ごめんごめん。ありがとね、ホタル』
それに対してサクラちゃんがドン引きして怒っていたが、こうも曲解して受け止められるとカカシ先生に対しての信頼が地に落ちる。
どういうつもりも何もないけど……。もしかして嫌味？クッキー

焼いてる暇あるなら修行しろっていう。
他にも細々とした諍いはあるわけだが……。特に何も考えていないのにその都度疑われ、私も私で悔しいから愛想笑いして「そんなつもりは無いですよ」と言う。
そしてそこから何故か腹芸の応酬みたいな会話になってしまうのだ。
もー！一体何なの！面倒くさい！
別にさ、火影様やイルカ先生からアイコンタクトで「ナルトを何とかしろ」って言われるのは良いよ？火影様は里で一番偉い人だし、イルカ先生はアカデミー時代のよしみもあるし。
でもカカシ先生がそれをするのはイラっとする。カカシ先生が微妙に嫌いなのもあるけど、カチンときてしまうのだ。
――しかし彼は私の直属の上司。
そんな態度を表に出せるわけもなく、大人しく上司の言うことを聞くしかなかった。
「まあ、ナルト君。ここは……ええと、あれだ……」
だめだ。カカシ先生への怒りで頭が動かない。そんな私を珍しいものでも見るかのように先生が観察してくるが、見てる暇があればフォローしてほしい。あれ、チームワークって何だっけ……？
「ほらー！ホタルもしょぼい任務は嫌だって言ってるってばよ！」
「言ってないよ」
思わず突っ込んでしまう。
「オレってばもう、じいちゃん思ってるようなイタズラ小僧じゃねぇんだぞ！」
そしてナルト君はフン！とそっぽを向いた。
「おいおいホタル、いつもの口八丁はどうした」と言わんばかりのカカシ先生の視線が突き刺さる。勘弁してくれ。
しかしそんなナルト君の態度に火影様やイルカ先生がほんのわずかに笑みを浮かべた。
きっとあの悪戯小僧のナルト君が一丁前に言うようになって……と微笑ましくなっているのかもしれない。それに私も何だか微笑ま

しくなる。
けれど次の瞬間、火影様の口からCランク任務を言い渡された。まさかナルト君の我儘によって本当に任務をあてがわれるとは思わず、この時本気で彼を止めておけば良かったと死ぬほど後悔した。

第九話　最悪の依頼人

快晴の空の下、第七班は木の葉の里の巨大な門の前に立っていた。
この度Cランクの依頼主であるタズナさんを波の国まで送り届けることになったのだ。
そしてそんな中、ナルト君はどこか落ち着きがない。「しゅっぱーつ!!」と言ってはしゃぐ姿にサクラちゃんから呆れられているが、きっと初めての里外や護衛という忍らしい任務に気合いが入っているのだろう。
そんなナルト君に依頼主のタズナさんは不安そうだ。
「おい！本当にこんなガキで大丈夫なのかよ？」
「上忍の私がついております。そう心配いりませんよ」
タズナさんの不安も尤もだが、今回はCランク任務。タズナさんがもし大名だとか偉い人だったら命を狙われる可能性があるが、彼は一介の（凄腕の）橋づくり職人。
他里の忍から襲われる心配はないだろうし、もしあったとしてもギャングや盗賊といった武装集団くらいだ。
あれ、壮大なフラグを立てたかのような寒気がしたけど気のせいかな……。
それはさておき、私も波の国に行くのは初めてだ。父に連れられて砂隠れの里に行ったことはあるが、それ以外の場所がどうなっているのかとても気になる。可能かどうかは分からないが、忍がおらず治安が良ければぜひ移住したい。
「波の国ってどんなところなんだろう」
「何だ、嬢ちゃん。気になるか」
ぽつりとこぼせば、たまたまタズナさんの耳に入ったらしく聞き返してくれた。
「はい。波の国に行くのは初めてなので、どんな所か気になります」
「あんまり良いところじゃねえぞ。生まれ故郷だが、年中霧に包まれて辛気臭えんだ。……それに国自体が貧乏だから皆目が澱んでい

る」
故郷の自虐的な意味合いで言ったのだろうが、タズナさんの瞳がどこか悲しげに揺れている。何だか悪いことをしてしまったかのような気持ちになり罪悪感が湧き上がった。
「……ま！住めば都って言うしな！それに橋さえ完成すりゃ何とかなるってもんだ」
気を遣ってくれたのか空気を変えるかのようにあっけらかんと言ってくれる。
それを見てほっと安堵した。
――するとその時、ふと前方の地面に水溜りがあるのに気付く。
雨が降ってないのにおかしい。局所的な通り雨でも降ったのだろうか。その割には周囲があまり濡れていない。
嫌な予感がしてカカシ先生を見れば、先生もその不自然な水溜りを横目で確認していた。
ごく自然に見えるよう、咄嗟にタズナさんを遠ざける。
次の瞬間、水溜りから吹き出すように黒い影が二体現れた。
霧隠れの額当てをした不気味な忍達が、初めから狙っていたかのようにカカシ先生に襲いかかる。
そして一瞬にして強固な鎖で縛られた先生は、そのまま力づくで身体を引きちぎられた。
きっとカカシ先生のことだから変わり身でも使って無事だろう。しかしタズナさんやサクラちゃんは顔を真っ青にさせている。
「まずは一人目」
霧隠れの忍の目線がタズナさんに固定される。
こいつらのターゲットはタズナさんか！
そしてサスケ君が飛び出した。サスケ君が忍達の相手をしてくれている内に、こっちはこっちで何とかしなければならない。
「タズナさん、ちょっと」
「な、何じゃ？」
戸惑ったように狼狽えるタズナさん。
そんな彼を安心させようと微笑んでみるが、何故かサイコパスを見

るかのような目で見られてしまった。

◇

霧隠れの忍達はカカシ先生によって即座に拘束された。それを見てほっと一息をつく。

カカシ先生が襲撃者に対して果敢に挑んだサスケ君と必死にタズナさんを守ろうとしたサクラちゃんを褒める。

それにナルト君が悔しそうにしているが、それどころではないだろう。彼の手のひらに霧隠れの忍によって傷がつけられたため処置が必要だ。

「ホタル、そろそろ変化を解いて良いぞ」

「あ、はい」

カカシ先生からの許可をもらったため、私はタズナさんの姿から変化を解いた。

「え、ホタル!?」

サクラちゃんが戸惑ったように振り返る。ずっと背にして守っていたのがタズナさんではなく、タズナさんに変化した私で驚いたのだろう。

サスケ君もナルト君もぎょっとしたように私を見た。

「ど、どういうことよ!?」

「サスケ君が忍達と交戦している間に、タズナさんに変化していたの。それから身代わりの術でタズナさんと場所を交換したんだ」

「じゃあ、タズナさんは……?」

「タズナさんはちょっと離れたところで待機してもらってるよ。周囲に他の忍の気配が無かったから大丈夫かと思って」

それにもし周りに忍がいたとしても、サスケ君に任せてぎりぎりまで戦況を確認していたカカシ先生が瞬殺したに違いない。

霧隠れの忍達が近く、乱戦になりかけていたこの場にタズナさんを

居させるよりか安全だと思った。
　そのことをサクラちゃんに話せば、力が抜けたように脱力される。
　そして「もー！」と怒りながら私の体をポカポカと叩き出した。いや、もう、本当にごめんなさい。
「おーい、もう出てきても大丈夫か？」
「はい。タズナさん、もう出てきてくださって大丈夫です」
　少し離れた茂みから、葉っぱを至るところにつけたタズナさんが現れた。
「嬢ちゃんがいきなり首根っこ掴んで茂みに放り込んだ時はさすがにびっくりしたわい。しかも笑顔で」
「荒っぽくしてしまってすみません。それにタズナさんには安心してほしくて笑顔を作っていたんです」
「本当かそれ」
　タズナさんが怪訝そうな顔をする。
　もし私に影分身が出来ていたら、その分身をタズナさんの近くに待機させたかった。それが出来るのはナルト君であったのだが、敵が現れて茫然としていた彼にさせるのは難しいと判断したのだ。
「ホタルも良くやったな」
「いえ。……あの、ナルト君の傷を早く止血した方が良いんじゃないでしょうか？」
　正直タズナさんを茂みに放り込んでサクラちゃんに守られていただけの仕事なので褒められても困る。
　ナルト君の傷も心配なため話を変えれば、カカシ先生は首を振った。
「いや、こいつらの爪には毒が塗ってある。止血するよりも傷を開かせて毒抜きをさせるのが先だ。ナルト、あんまり動くな。毒が回る」
　そしてカカシ先生はタズナさんを一瞥する。
「タズナさん、少しお話があります」
　そう言って問い詰めようとする先生の声音は随分と低いものだった。

◇

カカシ先生とタズナさんの話を要約すると、どうやらこれはただのCランク任務ではなく、Bランク以上相当なものであるらしい。

他里の忍から狙われると分かっていて、木の葉の里にはCランク任務として依頼しただろうタズナさんに何とも言えない気持ちになる。

襲いかかってくるのがギャングや盗賊ならまだしも、忍となると下忍のペーペーである私達には荷が重かった。

サクラちゃんも同じことを思ったのか口を開く。

「この任務、私達にはまだ早いわ……。止めましょ！ナルトの傷口を開いて毒血を抜くにも麻酔がいるし……。里に帰って医者に見せないと……！」

全くもってその通りだ。しかしこのままではタズナさんも引き下がれないだろう。

ここで現状思いついた案はまずみんなで木の葉の里に帰る。タズナさんが里の金融機関でお金を借りる。再度Bランク以上で任務を依頼する、くらいだ。

タズナさんが借金をすることになるが命はお金に変えられない。

けれどここで借金して任務を再依頼しろと言うのは、人間性を疑われかねないため大人しく黙った。

もうこれ以上、サイコパスを見るかのような目で見られたくない。

「サクラはこう言っているが……。ちなみにホタルはどう思う？」

「サクラちゃんに全面的に同意ですね。それにこのまま任務を続行しても最悪タズナさん諸共やられる可能性だってあります。それなら一旦里に戻って、一度冷静になった方が良いと思いますよ。……タズナさんもきっと間違ってCランク任務として依頼しちゃっただけかもしれないですし」

ね？とこの場を穏便に済ませようと言ってみたが、何故かタズナさんは顔を真っ青にさせた。あ、あれー？

「ホタル、それは一周回って脅しになってるからな……。ま！とにかく二人の言う通り、この任務は荷が重いな！ナルトの治療ついでに里へ戻るか」
うんうん、同意同意。珍しくカカシ先生と意見が合う。
しかしその時、ナルト君が傷口に向かってクナイを突き刺した。
え、何やってんの……？……え!?何やってんの!?
「ナルト何やってんのよ！あんた！」
サクラちゃんが叫ぶ。全員がナルト君の行動に驚き、目を丸くした。
そして彼は傷口に血を滴らせながら、覚悟をもって言い切った。
「このクナイで、オレがおっちゃんを守る……！任務続行だ!!」
この時、私は久しぶりに思い出した。
この世界の主人公がナルト君であったことを。

第十話　鬼人再不斬

ナルト君の宣言により任務は続行することになってしまった。
タズナさんの話を聞くと、どうやら海運会社社長のガトーという男に目をつけられていたようで。波の国の海上交通・運搬を全て独占していたガトーにとって、橋を作っているタズナさんは邪魔な存在であり忍を使って命を狙っているらしい。
とりあえず任務はタズナさんを波の国まで護衛するというものに変更となったが、大富豪が忍を雇うのだ。私達みたいなペーペーの下忍ではなく中忍以上の忍が雇われているに違いない。
ええー…、本当にやるの？
ここは普通に里に帰って任務を正規のものに再依頼するか増援を呼ぶの二択じゃない？しかもナルト君には九尾が入っているんだよね？もしナルト君が任務中に戦死しちゃったら波の国との外交問題にならない？
……え？大丈夫？カカシ先生はめちゃくちゃ強いからナルト君を死なせるようなことにはならない？いや、そりゃそうかもしれないけどさー！
と、内心叫んでみるものの面と向かっては言えないため、みんなの後ろを歩くカカシ先生にこそこそと耳打ちする。
「正気ですか？私達のレベルと任務がどう見ても見合っていないと思います」
「ホタルの言うことも一理あるけどねえ。それじゃあ、タズナさんとナルトの説得やってみなよ。もしうまくいったら木の葉に帰ろうか」
よし、言ったな？
そして私はカカシ先生から言質をとり、意気揚々と前を歩くナルト君の隣に並んだ。
タズナさんは理詰めで説得すれば何とかなるが、問題なのはナルト君である。彼の人柄はとても好ましいけれど命がかかっている今、根性で突っ走られても困ってしまう。

「ん？どうしたってばよ」
ナルト君がいきなり隣に並ぶ私に不思議そうな顔をする。そんな彼に私はこれまでになくしおらしい表情を作って口を開いた。
「……ナルト君はさ、この任務で本当にタズナさんを守り切れると思う？」
「？」
「私はね、はっきり言ってそれは難しいと思う。タズナさんだけじゃなくて、ナルト君や他のみんなが死んじゃう可能性だってあるんだよ？……そう思うと、すごく怖い。さっきの襲撃だって、タズナさんには笑顔で対応したけど本当は逃げたくて仕方がなかったんだ」
それを聞いてナルト君はどこか気まずそうな顔をする。
彼に対しては理詰めで説得するよりも、感情に訴えた物言いをした方が納得してくれるだろう。人の良いナルト君のことだ。不安がるチームメイトの少女に同情してくれるはず。というか同情してくれなきゃ私が困る。
「ホタル……」
「ね？みんなで一旦里に帰ろう？……里に帰ったらきっとタズナさんを守ってくれる強い人達が任務を引き継いでくれるよ」
ナルト君の他にもサクラちゃんが心配そうな目で私を見つめてくる。正直自分や仲間の命が惜しい一心でしおらしく言ってみせたが、純粋な2人に対して罪悪感で胸がチクチクと痛んだ。本当にごめんね……！
そしてそれに反してカカシ先生とサスケ君の視線がつき刺さる。「お前そんな演技までして……」という彼らの心の声が聞こえてきたが、とりあえずそれを無視した。
今ならまだ木の葉の里に帰れるのだ。木の葉の里に帰って、タズナさんが任務の再依頼を出す。里の金融機関で金を貸してもらえば良い。
けれど、その時ほんのチクリと胸が痛んだ。
よくよく考えれば、里の金融機関が外国人であるタズナさんにお金を貸してくれる保証はどこにもない。そうなればタズナさんは任務

を再依頼することができず、護衛もつけない状況で一人で帰らなければならないのだ。
　もしかしたらカカシ先生は、それを見越した上でタズナさんの身を案じ波の国まで送り届けると言ったのだろうか。
　くるりと後ろを振り返り、先生の顔を見る。彼は私に向けてにっこりと笑ってみせた。
　するとその時、ナルト君が口を開く。
「ホタルの気持ちは分かったってばよ。怖いんだよな？」
「うんうん。そうなの」
「……でも大丈夫！ホタルのことも俺が守ってみせるってばよ！」
「うんうん……ん？」
　いや、そういうことじゃなくてだな……とナルト君の言葉を否定する前に、彼は全ての闇を照らすかのような眩しい笑顔で言い放った。
「いつもホタルには世話になってるから、今度は俺がホタルの役に立ちたいんだ」
「あ、ありがとう……？」
　「それに……」とナルト君が続ける。
「ホタルが良い奴で誰よりも優しいってこと、知ってるってばよ。タズナのおっちゃんのことだって本当は心配なんだよな？じゃなきゃ、怖いのにおっちゃんを安心させようと笑うはずない」
「まあ、そうだけど……」
　あ、あれ、様子がおかしいぞ。暗雲立ち込める話の展開に焦る。ナルト君の裏表のない言葉を前に圧倒される。
「ホタルが俺らのためにそう言ってくれるのは嬉しいってばよ。だけど、俺は一度決めたことは絶対に曲げない。タズナのおっちゃんも、それからホタルも守ってみせる！」
　この世界の主人公の、純度１００％の輝かんばかりの台詞。
　まだ１２歳の子供だというにも関わらず、場をひっくり返してしまえるほどの圧倒的なカリスマ性。私だけでなく、サクラちゃんもサスケ君も、そしてタズナさんも、力が湧きでるような彼の言葉に鼓舞さ

れてしまう。
そこで私は、身を持って痛感した。
私があれやこれやと計算して説得したところで、ナルト君は絶対に納得しないだろう。
というか無理だ。人は小手先な口八丁だけで動かない。どの時代、どの世界においても、ナルト君のような信念を持った人間の言葉が一番響く。
「そっか。ありがとう」と何とか礼を言いながら、よろよろと後ろを歩くカカシ先生のところまで後ずさった。
「――私、あんなナルト君に無理矢理木の葉の里に帰ろうだなんて言えません。カカシ先生が心を鬼にして言ってください」
「初手でナルトを説得したらああなるって分かんなかったの？」
いや、何で私が責められてる……？しかし約束は約束。波の国までの任務だ。波の国まで我慢したら何とかなるだろう。まあ、カカシ先生にも考えがあるみたいだし……。
先生に曖昧に笑みを浮かべて無理矢理自分を納得させてみたが、それでも私の心は晴れることはなかった。

◇

――それからしばらくして、第七班とタズナさんは舟に乗って波の国に向かっていた。
水面に雲のような霧が広がっており、波音が聞こえるだけで辺りは静まりかえっている。
街水道にて隠れながら丘に上がるルートで入国するわけだが、密入国にならないだろうかと不安になる。けれど状況が状況なため仕方がないし、深く考えたら駄目だと思い直した。
それから陸に辿り着き、舟の操縦をしてくれた男性とそこで別れる。タズナさんと一緒にいたら命を狙われるかもしれないのだ。早

く彼も遠くに逃げた方が良い。
そしてそこでふと思う。
そういえば橋の建設事業って誰が主体となって動いているんだろう。
橋の建設という大掛かりな工事をタズナさん個人だけで行えると思えない。どこかの企業がタズナさんに委託してる？と思ったが、国と国とを繋ぐ大掛かりなプロジェクトだ。企業どころじゃない気がする。
そもそもこの任務、おそらくタズナさんのポケットマネーによって依頼されているのだろう。橋建設のリーダー的なタズナさんが命を狙われているというのなら、その主体となっている団体が責任を持って依頼金を出してやるのが筋だ。
それだったらタズナさんも最初から任務ランクを偽ることはしなかったと思う。
「タズナさん」
「何だ。嬢ちゃん」
タズナさんが何故か要注意人物を見るかのような目で私を見てくる。失礼な人だな。
そして一体誰から橋の建設を依頼されたか聞こうとしたその時、ナルト君が大声をあげて手裏剣を茂みに飛ばした。
「そこかーーーッ!!!」
「何が？」
気配も何も感じない場所に手裏剣を投げつけたナルト君に思わず突っ込む。
「なんだネズミか……」とひと汗かいたかのような顔で格好つける彼に対して、サクラちゃんやカカシ先生が割とガチめに注意した。
うーん、このタイミングでタズナさんに聞くのはちょっと難しいかもしれない。何だかばたばたしているし。
それにナルト君は気合が入りまくっているのか、辺りをきょろきょろ見渡して所構わず手裏剣やクナイを飛ばしそうだ。
間違って当たることはないだろうがちょっと危険である。

「そこかーーーーッ!!!!」
そしてナルト君がまたも手裏剣を飛ばした。
しかし茂みの中にいたのは真っ白なユキウサギで泡を吹いて気絶している。よしよし、可哀想に……。
するとその時、ふと何か違和感を覚えた。
昔から嫌な予感とかは当たる方なので、ひしひしと冷や汗が流れ出る。
「――全員伏せろ!!」
そして次の瞬間、カカシ先生の指示が飛ぶ。
タズナさんの頭を押さえて地面に伏せれば、頭上に巨大な刀が飛来した。
等身ほどの大きさの、中華包丁のような刀。それが勢いよく木の幹に突き刺さり、その上にどこからともなく一人の男が佇んでいた。
「……霧隠れの里の抜忍、桃地再不斬君じゃないか」
い、嫌な予感当たったーー!

◇

こりゃもう駄目だ。終わった。
現れた再不斬によって第七班は壊滅的な被害を受けている。
唯一の対抗手段であったカカシ先生は水牢の術によって拘束され、残されたのは新米下忍の私達と依頼人のタズナさんだけ。とりあえずこの再不斬とかいう忍から勝てるビジョンが浮かばない。
再不斬の殺気に当てられて立ち尽くすサクラちゃんやサスケ君。ナルト君は先程奴に腹を蹴られて、苦しそうに地面に伏せている。
そして私はまだ、動けていた。
恐怖よりも、恐慌状態に陥る子供達と依頼人のタズナさんを前に、一大人としてこの場を何とかしなければならないという気持ちが湧き上がってしまったのだ。

……何で湧きあがっちゃうかな～！もう帰りたい！
でも後ろには子供達がおり、彼らが無惨に惨殺されるのだけは絶対に阻止したかった。
おまけに私は一度死んだことがある。前世で死んで、転生して、生きている。その経験により【死】という概念が私の中で麻痺している可能性があった。
「……ナルト君、私がここで再不斬を食い止めるから皆で逃げてくれない？」
「ホタル？」
一番近くにいるナルト君に囁けば、彼ははっと顔を上げる。聞こえていたのかサクラちゃんやサスケ君も言葉を詰まらせているようだった。
全員で逃げたとしてもきっとすぐ追いつかれるだろう。けれど誰か一人足止めすれば逃げ切れるかもしれないのだ。
本当は嫌だけど。もう死ぬほど嫌だけど。そして隙あらば逃げるつもりだけど。
「良い？追手から逃げる方法はアカデミーで習ったよね？追跡先を複数用意するの。ナルト君は影分身ができるから何とかできるよね」
「でも……！」
「大丈夫。ちょっと足止めするだけだから」
安心させるように笑ってみせるが、それでもナルト君は信じられない顔で私を見る。タズナさんの時といい、私が笑うと皆がドン引きするのは何故だろうか。
それに私に出来るのはほんのちょっとの足止めで、危なくなったら即座に離脱するつもりだ。水牢に閉じ込められているカカシ先生には自分で何とかしてほしい。
気を取り直して、ポシェットからクナイを取り出す。
「何だ。次の相手は小娘か」
再不斬がにやりと笑う。
ああ、もう本当に嫌だなあ。
何で私、こういうの放って置けないんだろう。

――――するとその時、私の肩をナルト君が掴んだ。
「……ホタル、もう大丈夫だってばよ」
さっきまでの震えはもう、ナルト君にはなかった。はっと振り向けば、彼は覚悟を決めた目で再不斬を見据えている。
「俺は一度決めたことは絶対に曲げない。ホタルは後ろには下がってくれ」
いつの間にかサクラちゃんやサスケ君の様子も落ち着いていた。サスケ君が私の前に進み出てナルト君の隣に立つ。
その時、はっとした。
『タズナのおっちゃんも、それからホタルも守ってみせる！』
ついさっき約束した言葉の通り、ナルト君はタズナさんや私を守ろうとしてくれている？
それに気付いた瞬間、冷や汗がどっと流れた。
私があの時軽率に言った言葉のせいで、ナルト君は死地に向かおうとしているのだ。
するとタズナさんが意を決したように言った。
「元はと言えばワシのまいたタネ。この期に及んで超命が惜しいなどと言わんぞ。……――――すまなかったな、お前ら。思う存分闘ってくれ」
そんなタズナさんの言葉に狼狽える。
ここは誰か一人を囮にして依頼人を逃すのが先決だ。しかし任務の優先度と依頼人でもあるタズナさんの言葉を天秤にかけ思わず固まってしまう。どうしよう。戦っても再不斬に勝てる見込みが……
――――。
しかし私の目の前に立つナルト君や、そしてサスケ君の姿を見た。とうに腹を括っている2人に、もう何も言うことができない。
――――ここは私も腹を括るしかないのかもしれない。
「ありがとう。でも私も戦うよ。人手は一人でも多い方が良いでしょ」
そう言えば、ナルト君は「けど……」と言い澱む。
しかしそれに私は首を振った。ナルト君が私との約束を守ろうと

してくれていることは分かるが、そのせいで死んでしまうのは耐えられない。
彼の真摯な態度に、私もそれ相応の態度で応えるべきだから。
「サクラちゃん、タズナさんをお願いできる？」
後ろに立つサクラちゃんに言えば彼女はクナイを構える。うん、やっぱりこの子はガッツがある。
そして私達第七班は、再不斬に対峙した。

第十一話　再不斬ＶＳ第七班

再不斬の弱点は現状ほぼない。カカシ先生並みの強さに波の国という地理的な優位性もあちらに分がある。霧に紛れてしまえば、私達は奴を感知することができないのだ。

けれど再不斬は圧倒的に私達を舐めてかかっている。それを利用する他ないだろう。

序盤に出てきた霧隠れの忍達にやったようにタズナさんに化けて、本物のタズナさんをどこか安全な場所に避難させるのも手だ。

けれどそれをするには不確定要素が多すぎる。あの時は周囲をカカシ先生が見張っていたため出来たことだが、先生はすでに拘束されているから。

おまけにここは波の国。他にも霧隠れの忍達が息を潜めて窺っている可能性だってあった。

作戦なんて練っている暇はない。ナルト君とサスケ君を見れば同じことを思ったのか頷いていた。

「……本当に成長しねえな。いつまでも忍者ごっこかよ。オレあよ、お前らくらいの歳の頃にゃ、もうこの手を血で紅く染めてんだよ」

私達の姿が滑稽に見えたのだろう。

再不斬は霧隠れの里にいた頃の自身の生い立ちとアカデミーの卒業試験で何百人もの同級生を殺害したことを語るが、奴がやばい奴だというのは百も承知だ。

「楽しかったなあ、あれは……」

再不斬がぞっとするような笑みで私達を見つめる。

川の水面に佇む本体の再不斬と水牢の中に拘束されるカカシ先生。そして私達の目の前には薄暗い笑みを浮かべる水分身の再不斬。

闘いが始まる。

◇

再不斬が一瞬姿を消したかと思うと、一番近くにいたサスケ君目掛けて斬り掛かろうとしていた。
瞬時にワイヤー付きのクナイを多数飛ばし、再不斬を拘束する。
「こんなん足止めにもなんねえよ!!」
ワイヤーを無造作に引きちぎり（耐久性の優れたものだったのだが何故引きちぎれる……？）狙いを私に定めた。
しかしその瞬間、あらかじめクナイに貼り付けていた起爆符が爆破される。
「ナルト君!!」
「おう！」
爆破に巻き込まれたとは言えおそらく無傷であろう。
けれど隙は生まれたはずだ。それを一瞬にして理解したナルト君が印を組む。
「影分身の術!!」
何十人もの影分身が再不斬の周りを囲み、一斉に襲い掛かる。だが、決定打にはならず体の軽いナルト君の分身達は投げ捨てられあっという間に殲滅された。
次はどうする？どう仕掛ける？
するとナルト君がリュックの中から巨大な風魔手裏剣を取り出した。
「サスケェ!!」
サスケ君に渡されたそれにナルト君の企みを理解する。
私達がサバイバル演習でやったことをやろうとしているのか！彼もそれを理解したのか薄く笑みを浮かべていた。
サスケ君が跳躍し風魔手裏剣を飛ばす。風を切るように放たれたそれを再不斬が刀で弾こうと構えたため、咄嗟に私は奴に飛び掛かった。
「チッうざってえな……！」
しかし呆気なく蹴飛ばされてしまった。ゴム毬のように吹き飛ば

されてしまい何だか恥ずかしい。私、よわーー！
だけど、それで良い。風魔手裏剣が叩き落とされないならそれで良かった。弓形に曲がる手裏剣は再不斬をぐんと通り過ぎ本体に向かって軌道を描く。
「なるほど。小娘は陽動で、本体を狙ってきたってわけか……！が、甘い!!」
本体の再不斬が片手で手裏剣を掴む。しかしその影からもう一つの手裏剣が現れた。影手裏剣の術だ。だがそれも再不斬によって避けられる。
「外れた！」
タズナさんが叫ぶ。と、同時に風魔手裏剣はボフンと煙を立てた。中からクナイを構えたナルト君が現れたのだ。
「ここだあああああ!!!!」
ナルト君がクナイを飛ばす。目標は本体の再不斬の腕。そして飛来したクナイによって再不斬が水牢から手を離した。
すると次の瞬間、カカシ先生を拘束していた巨大な水の玉は形を崩した。
カカシ先生がようやく解放されたのだ。

◇

「ナルト、作戦見事だったぞ。成長したな。お前ら……」
逆上した再不斬がナルト君に刀を振りかざしたが、それをカカシ先生は間一髪で止めた。血を流しながら片手で刃を押さえる先生は完全に切れている。
理性はあるだろうが、これから行われるだろう先生と再不斬の闘いを察知し急いでナルト君を回収しに行った。
「ナルト君、本当にお疲れ様。でもここにいたら巻き込まれるよ」
川からナルト君を引き上げ、慌ててサクラちゃん達の待つ場所まで

移動する。
闘いはすでに始まっていたのか、その瞬間川の方面から巨大な爆発音がした。振り返れば竜の形をした巨大な水柱が二柱現れ、凄まじい音を立てて衝突する。
膨大なチャクラを使った術の数々。写輪眼により確実に再不斬を追い詰めるカカシ先生。嵐のような攻防。
あまりにも衝撃的な光景に私達はただ呆然と立ち尽くした。
もう、これ、一体どうなるんだ。
「ねえ、これって忍術なの……？」
サクラちゃんが信じられないような表情をして呟く。

しかしそれは思わぬ来訪者によって幕を閉じることとなった。
どこからともなく現れた霧隠れの追い忍の少年が再不斬の首に千本を突き刺さし、奴は呆気なく死んでしまったのだ。

第十二話　任務の続行

色々とあったわけだが、無事にタズナさんの家に辿り着くことができた。
再不斬はあの追い忍の子によってやっつけられたし、こちらは誰一人死んでいない。依頼人のタズナさんだって精神的にかなり消耗したと思うが、傷一つなくぴんぴんしている。
これにて護衛は終了！依頼もこなせたしあとは木の葉に帰るだけ！……とはならなかった。
「カカシ先生、大丈夫ですか？あとどれくらいで動けそうです？」
「一週間かそこらかなあ」
タズナさんの自宅にて。
娘のツナミさんに用意してもらった一室を借りて、カカシ先生は布団の上で倒れていた。
再不斬との死闘と写輪眼の使用によって、チャクラ切れを起こした先生は動くことができない。一週間そこらで回復するとのことだが、つまりそれまで私達は木の葉の里に帰れないというわけだ。
……カカシ先生ーー!!確かに再不斬を相手にしてた時はとてつもなく頼りになったけど、どうして肝心な時にそうなっちゃうのー!!もう、帰ろうよ？何なら私、カカシ先生のことおぶるよ？変化の術で大男になったら余裕で持てるでしょ。私、頑張るから!!
しかしタズナさんがいる手前、それを言ってしまえば任務終了後即解散だなんて薄情すぎると思われかねない。第七班の良い子達にもそんな風に思われたくないため、私はまたしても黙るしかなかった。
まあ、再不斬を（お面の子が）やっつけた訳だから脅威なんて今のところないけど……。それにあの再不斬がやられたとなれば、ガトー側は用心して襲いかかってこないはずだ。多分。
「そうなんですね。あ、私、丸薬持ってますけど食べますか？多分チャクラ一気に回復しますよ」
「チャクラ増強の副作用って知ってる？大抵そういうのって副作用が

とんでもないんだけど」
　それでも諦めきれなくて遠回しにドーピングを勧めるが却下されてしまった。
　チャクラ増強系の丸薬はカカシ先生の言う通り、大抵副作用がとんでもない。丸薬を食べた直後はチャクラも回復してぴんぴんするが、それが切れてしまえば熱病に罹ったかのように魘され何も出来なくなるのだ。
　ちなみにこの丸薬は秋道チョウジ君というアカデミーの元クラスメイトからもらった。食べるのが好きとのことで焼肉食べ放題券を譲ったら、めちゃくちゃ感謝されて丸薬と交換することになったのである。
「え、えへへ！そうでしたっけ？先生には無理してほしくないですし、それなら食べない方が良いですね！」
　誤魔化すように笑ってみせたがカカシ先生の目が痛い。
「先生思いの良い子じゃないですか。果報者ですね！」
　ツナミさんが私達の会話に朗らかそうにする。私とカカシ先生は何も言えなくなった。
「……それよりホタル、お前、囮になろうとしただろ」
　先生がじとりと睨んでくる。
　確かに先生が水牢の術にかけられていた時、ナルト君達を逃がそうとして足止めを買って出た。それにナルト君が思い出したのか「そうだったってばよ！」と声を上げる。
「なあ、ホタル！あそこで一人残ろうってのは薄情すぎるってばよ！オレ達もいたのにさ！」
「ご、ごめん」
　あの時のことを思い出しては恥ずかしくなってしまう。自分でも無謀だったと思うし、結局ナルト君達が奮起して態勢を立て直したのだ。
「正直ホタルがあそこまで体を張るような奴だとは思わなかったが……。もう、するなよ」
「はい。次は気を付けます」

「返事は良いんだけどなあ」
素直に頷くものの、何故か胡散臭そうな顔で見られる。何というか、ここまで担当上忍に信頼されていない部下ってどうなんだろう。
「あー…と、それからお前らに言っておかなきゃならないことがある」
「何でしょう？」
「おそらく再不斬は生きている」
カカシ先生の言葉にぴしりと空気が凍る。
再不斬が生きている？いや、でも先生、奴が死んでいたのを確認していたよね？
しかしそこでふと思い当たる節があった。追い忍の少年が使っていた千本という武器。親戚のゲンマさんが常時口に咥えるほど殺傷力が低い武器（ゲンマさんのは咥え千本だが）を使って殺すのが不自然だった。
サスケ君も同じことを思ったのか「まさか……」と呟く。
「そのまさかだ。自分よりもかなり重いはずの再不斬の死体をわざわざ持って帰った。おまけに殺傷能力の低い千本を使用したことから導き出せるあの少年の目的は、再不斬を【殺しに来た】ではなく【助けに来た】とも取れる」
そんなカカシ先生の推測に待ったをかける。
「待ってください。もしかしたら後で死体から情報を引き出すため、最小限の傷しか付けないよう注意を払っていたのかもしれませんよ」
「……嬢ちゃんの言う通り、超考えすぎじゃないのか？それに追い忍は抜け忍を狩るもんじゃろ！」
タズナさんの言葉にうんうんと頷く。
しかしカカシ先生は再不斬が死んでいたとしても生きていたとしても念のために準備しなければならないと言った。
そしてその準備として私達第七班に修行を課すらしい。
「一度仮死状態になった人間が元の体になるまでかなりの時間がかかる。その間に修行をするが……、といってもオレが回復するまでだけだ。お前らだけじゃ勝てない相手に違いないからな」
ナルト君が武者震いをする。

サクラちゃんが不安そうにする。
サスケ君が鋭い目でカカシ先生を見据える。
そんな中、表には出さないが私は先生の決断に納得できなかった。

◇

その後、部屋にイナリという小さな男の子がやって来た。
『死にたくないなら早く帰った方が良いよ』
ガトーからの刺客を退けるため意気揚々とするナルト君に、水を差すように言った言葉。けれどあの子の言う通りだと思った。
再不斬を相手に出来るのはカカシ先生のみ。あの追い忍……いや、再不斬の仲間である少年でさえ私達が束になって敵う相手か分からない。いくら第七班が成長しているとはいえ勝てる見込みはほぼないのだ。
それに、本来ならば第七班の任務はもう終わっているはず。
タズナさんを自宅に送り届けるまでが私達の任務であった。カカシ先生が動けない今、一室貸してもらっているが波の国にある旅館や民宿を借りてそこを根城にすれば良い。
ガトー達の標的はあくまでタズナさんであるため、私達は狙われないだろう。そして折を見てカカシ先生のチャクラが回復次第、木の葉の里に帰還するのだ。
『元はと言えばワシのまいたタネ。この期に及んで超命が惜しいなどと言わんぞ。……――すまなかったな、お前ら。思う存分闘ってくれ』
再不斬と対峙した時に言い放った、命をかける覚悟を決めたタズナさんの言葉を思い出してしまう。
タズナさんにこれ以上、情を移す前に出て行った方が良い。彼を見捨てるという非情な方法が頭に浮かんでは胸が苦しくなる。
――そしてそれを理解しているはずなのに、再不斬を迎え撃つと

宣言したカカシ先生の意図を汲み取ることができなかった。

その日の夜。皆が寝静まった深夜に目を覚まし、私はカカシ先生のいる部屋に向かった。

おそらく足音で目を覚ましているだろう。

部屋の扉にノックをすれば、案の定すでに起きていたのか扉ががらりと開いた。松葉杖をもったカカシ先生が立っており、私の顔を見て「やっぱり来たか」と苦笑する。

「夜分遅くにすみません。でも、やっぱりっていうことは私の言いたいことが分かるんですね？」

「まあね。絶対ホタルは文句を言いに来ると思ったよ」

文句とは何だ。文句とは。

そして、とりあえず外で話そうと言うことになり、私は松葉杖をつくカカシ先生の後について行った。

◇

タズナさんの自宅は海に面している。

カカシ先生に連れられて庭に置かれた丸太のベンチに座ると、目の前に真っ黒な夜の海が広がっており辺りはしんと静まりかえっていた。

「……こんな遅い時間に来てしまってすみません。だけどみんながいるところでは話しづらいと思って」

まずこんな深夜に教師の泊まる部屋に訪れるという非常識な真似を行なったことに詫びを入れた。前世の基準であれば、子供とはいえ女が男性教師の部屋に一人で行くのは褒められたものではない。

きっとカカシ先生もそういったことに配慮してくれたのか、部屋に招かず開かれた空間である外に連れ出してくれたのだろう。

「大方ホタルが言いたいのは理解してるよ。第七班の任務は本来【タ

ズナさんを自宅に送り届ける】まで。だが何故任務が続行されるのか納得できないんだろ」
カカシ先生の言葉に頷く。
私のその疑問は人として薄情なものであった。タズナさんを見捨てろと言っているようなものなのだから。
けれど、第七班のメンバーの顔を思い出す。
ナルト君やサクラちゃん、サスケ君。
再不斬が生きており再度対峙する可能性があるのならば、私はタズナさんよりもナルト君達の身の安全をとる。
きっとＮＡＲＵＴＯのストーリーでは再不斬と再戦する展開があるのだろう。そこでおそらくみんなが成長して、強くなっていくのかもしれない。
けれどこれは現実だ。回避できる危機には出来るだけ避けた方が良い。
それにもしかしたら、誰かが死んでしまう可能性だって捨てきれなかった。あれだけ長く続く漫画で、こんな序盤に主人公達が死ぬとは思えないが何が起こるか分からない。
「私は自分でも酷いことを言ってると自覚しています。だけど、ナルト君達がいくら成長しているとは言え、あれだけ格上の相手に何も通用しない可能性だってある。今度こそ、みんなが死んでしまうかもしれない」
カカシ先生が水牢の術で拘束されていた時、ナルト君達は体を張って再不斬と対峙した。あれは奇跡的に上手くいっただけだ。本当だったら、全員死んでいたかもしれない。
しかしそれを言葉にするたびに命をかけて木の葉の里までやって来たタズナさんや、彼の家族であるツナミさん、イナリ君の顔が頭にちらつく。
するとその時、カカシ先生がぽつりと言った。
「……ホタル、すまなかったな。そんなことを言わせて」
顔を上げれば、先生が穏やかな表情をしていた。
いつも私達はギスギスとした会話ばかりしていたため、先生のそん

な顔を見るのは初めてだった。
「ホタルに話した通り、本来ならばタズナさんを送り届けるまでが任務だ。再不斬が生きているということを伏せて、ここから出れば良かったとも思う」
　自分が言ったことでもあるのに、それに頷くことができなかった。
「しかしそうした場合タズナさんは死ぬだろう。波の国はそのまま衰退し経済的にガトーの手中に収まるかもしれない。国家規模の話だ。遅かれ早かれそれを知ることになった時、ナルト達はどう思う」
「……一生、後悔することになりますね」
　最初のCランク任務で関わったタズナさんが再不斬によって死んだとなれば、人の良いあの子達は絶望するかもしれない。知らなかったとは言え、見捨てたようなものだから。
「ナルト達を無理矢理木の葉の里に連れ帰っても良い。忍における非情さを学ぶ良い機会にもなるしな。……だがそれをすれば、あいつらの今後の任務への向き合い方が大きく変わる」
　水を吸うように成長し、環境や大人達の態度から価値観を学んでいく十代前半の子供達。
　依頼人であったタズナさんをあれだけ守ったにも関わらず、再不斬によって殺される。
　この先用意される護衛任務でいくら依頼人を守っても結局自分の知らない場所で殺されるかもしれないと思った時、命をかけてその人を守ろうとすることが出来るのだろうか。
　そう考えると、ナルト君達にとってこの任務は非常に重い意味を持つ。
「忍には命をかけてでも何かを守らなければならない場面が度々起きる」
「……」
「何、死なせやしないよ。絶対に」
　私はずっと自分の価値観に沿ってものを考えてきた。
　けれどここにきて、改めてこの世界にある忍の常識や信条を理解していなかったと痛感する。私は忍は辞めたいけど、ナルト君達は続け

たい。
この先のことを見据え、命をかけてでも彼らは成長しなければならないのだ。
「……それは、私もですか？カカシ先生、私のこと苦手でしょう」
苦笑しながらそう聞けば、カカシ先生はいつもより優しい顔で笑ってくれた。
「ホタルも死なせないよ。ま、正直何考えているのか分からなくて困ってたけど、今話してみてようやく理解できた。案外普通の、仲間思いの子だったってわけだ」
先生の言葉が何だか可笑しくて、私も笑ってしまった。
そして「タズナさんを見捨てなくて良いんだ」と思った時、自分でも自覚していなかったけれど心の底から安堵した。

第十三話　サクラの不安

朝早く起きて、私はまずツナミさんのもとに向かった。
ツナミさんはすでに起きており、今から朝食を作り始めるのかエプロンをかけている。
「おはようございます。ツナミさん、お邪魔じゃなければ何かお手伝いをさせてください。一人暮らしをしていますので、一通りはできるはずです」
「あら、早いわね。おはよう。でも良いのよ？疲れているでしょう」
「いえ、動いていないと色々と落ち着かなくて……」
「そう？それだったら……、悪いけど庭の水やりをやってもらって良いかしら？」
「もちろんです。また終わりましたら声をかけますね」
ツナミさんにホースの場所を教えてもらい外に出る。
そして庭の植物に、気をつけながら水やりを始めた。

――――昨夜カカシ先生から任務続行の意図を聞いた後、私はあることに気付いてしまった。
任務続行ということはタズナさんの家に一週間滞在させてもらうのだ。
ここで家事をしているのは、おそらくシングルマザーであるツナミさん。つまりツナミさんからして見れば、４人の子供達と成人男性が家に押しかけてきたわけだ。
……きつい、よね？
いくら護衛してくれると言っても、いきなり5人もの人間がやって来るのは普通に嫌だよね？しかもその分食費も掛かるし家事の労力も増える。
それを考えた瞬間、私はぞっとし、ツナミさんに対してただひたすら申し訳なかった。
彼女の負担を少しでも減らすべく第七班である私達は最低限自分

達のことをし、出来る限り手伝いを引き受けた方が良いだろう。
しかし昨日今日で、いきなりみんなにそれを求めるのは酷な話。あとで第七班の子達にやんわりと伝えるつもりだが、とりあえず今は私だけでもこうして手伝いを引き受けることにしたわけだ。
いや、でもカカシ先生からみんなに言ってもらった方が良いんじゃ……。
しかし後に、先生からタズナさん宅の世話になるのなら手伝いをしろと言うお達しが出たため、それは杞憂に終わった。

◇

「――ではこれから修行を始める！」
森の中の空き地に集められた私達は、打倒再不斬のために修行をすることになった。
カカシ先生が言うに私達はチャクラをまだ使いこなせていないらしい。身体エネルギーと精神エネルギーを体内でうまく練り上げることによって、効率的な術の発動を行うことができるそうだ。
「で、今からお前らにやってもらうのは【木登り】だ」
「木登り？何で木登りが修行になるんだってばよ」
「ただの木登りじゃない。手を使わないで登るんだ。ま！見てろ」
そしてカカシ先生は印を組むと、近くにある木を垂直に歩き出した。何だかトリックアートみたいな光景だな……。
「と、まあ、こんな感じだ。チャクラを足の裏に集めて木の幹に吸着させる。チャクラはうまく使えばこんなことも出来る」
先生が言うに、この修行ではチャクラコントロールを身につけ、チャクラを持続させるスタミナをつけることが目的らしい。正直全くできる気がしないが、少しでも再不斬から生き延びれるよう頑張るしかない。
「んな修行、オレにとっちゃ朝飯前だってばよ！なんせオレってば今

一番伸びている男！」
「ごたくはいいから。お前ら早くどの木でもいいから登ってみろ」
カカシ先生が私達の前にクナイを投げつける。どこまで登れたかこれで木に印をつけろ、とのこと。
そして私達は一斉に木に向かって走り出した。

◇

「ごめんね、サクラちゃん。本当に助かるよ」
「いいのよ。別に」
木登りの修行はサクラちゃんが一番早く習得した。
そして私はというと、サクラちゃんにマンツーマンで教えてもらっていた。
ナルト君は込めるチャクラ量が少ないのか途中で木の幹から足が離れてしまうし、サスケ君は逆にチャクラ量が多く幹を破壊してしまう。
そして私もチャクラ量の調節がうまくいかず、それならサクラちゃんに初めからコツを教わった方が早いと手伝ってもらっているのだった。
サクラちゃんに逐一アドバイスをもらい、木登りをする。サクラちゃんも私に合わせて横の木を登っているのだが……、私にアドバイスしながら並走しているサクラちゃんが末恐ろしい。おそらくもう無意識の段階でチャクラをコントロール出来てしまっているのだろう。
「ほら、あの木の枝まで登るわよ！あそこでちょっと休憩しましょう！」
そしてサクラちゃんの指す木の枝まで何とか登り切り、そこで腰をかける。彼女も隣の木から飛び乗って、こちらにやって来た。
木の枝は太く丈夫そうであるため、子供2人が乗っても折れること

はないだろう。
「お疲れ様。ホタルってばやるじゃない。ちょっと教えただけでこんなにも登れたわ」
「いや、絶対にサクラちゃんのおかげだよ。私一人だったらここまで登れなかった」
下を見れば地上から１０メートル以上距離がある。そしてナルト君とサスケ君は四苦八苦しながら木に登っていた。
サクラちゃんのマンツーマンがなかったら、私も２人みたいになっていたに違いない。
「……でも、本当にすごいわよ。少しアドバイスしただけでコツを掴んだし……それに度胸もあるし」
するとサクラちゃんが横でぽつりとつぶやく。
膝を見つめ、どこか落ち込んでいるその様子に彼女が何か抱え込んでしまっていることを察した。
しばらくして、サクラちゃんは口を開く。
「ホタルは、カカシ先生が再不斬に捕まった時怖くなかったの？……私は再不斬の殺気に当てられて動けなかった。でもあの場でホタルは立ち向かおうとしたし、ナルトやサスケ君だって再不斬に挑んでカカシ先生を助けたわ」
「あれは……」
「私はただみんなを見ているだけだった」
それは、違うだろう。
サクラちゃんにタズナさんを守るよう指示したのは私だ。
それに正直あの場に再不斬以外の忍が潜み、隙を突いてタズナさんに襲いかかってくる可能性だってあった。そんな中でサクラちゃんは一人でタズナさんを守り切ってみせたのだ。
しかしそこでふと気付く。
もしかしたらサクラちゃんは怖いのかな。
初めての里外任務に、中忍レベルの忍達からの襲撃。そして鬼人再不斬。
またそういった状況で、同性であり同い年の私が平気そうに（内心

全然平気じゃない）しているのを見て、不安になっているのかもしれない。
　そりゃそうだよね。忍とは言え、サクラちゃんは正真正銘の１２歳の女の子なのだ。ナルト君やサスケ君は打倒再不斬達に向けて燃えているが普通は違う。
　そう思うと、隣にいる一人の女の子の不安をどうにかして取り除いてあげたいと思った。
　そして昨日のカカシ先生との会話を思い出す。
「……私に度胸なんてないよ。それに実はね、昨日カカシ先生に話したの。任務を中止にするべきだって」
「え？」
「私も不安だったの。相手はビンゴブックに載るような相手だったし。だからサクラちゃんが言うような度胸も全然なくて……。幻滅したよね。タズナさんを見捨てようって言ってるようなものだから」
　昨日の会話は第七班のメンバー達に話すつもりはなかったけれどサクラちゃんの心の負担が無くなるのなら、と話すことにした。
「でもカカシ先生が死なせないって言ってくれたし、今こうして再不斬達に対抗できるよう強くなる準備もしている。サクラちゃんと同じで私もすごく不安だけど……」
　これが少しでも気休めになってくれたら良い。
　そう思っているとサクラちゃんは私の顔をじっと見つめた後、自分に言い聞かせるように言った。
「……そうよね。怖くないはずなんて、無いのよね。ありがとう、ホタル。それから幻滅なんてしてないわ。ホタルが言わなかったら私がカカシ先生に言ってる」
「そうかな？」
「ええ。それにほんの少しかもしれないけど、私だって成長してる。木登りだって一番に出来たんだから！」
「そうそう。ちょっとずつでも、みんなちゃんと強くなっているよ」
　少しずつ元気を取り戻していくサクラちゃんにほっと安堵する。

良かった良かった。
「それから、私も色々考えてみたの。この修行でやれることはたくさんあるかもって」
「やれること？チャクラの持続だけじゃなくて？」
「ええ。例えば……ええと、チャクラを込めることで色々攻撃の幅も増えると思うの。敵を殴ったりするとか、そうしたら威力も上がるんじゃないかしら」
それを聞いて確かに、と納得する。私はそこまで考える余裕もなく、ただに木に登っているだけだった。
サクラちゃんが自分なりに出来ることを考えていたことに感心する。やっぱり頭良い子は違うな……。
そこでふと木の下で木登りを続けているナルト君とサスケ君の姿を見た。まだ彼らは苦戦しているようだった。
「良かったらあの2人にも教えない？ナルト君もサスケ君もそういうの好きそうだし。もちろん、木登りのコツとかもさ。私達にはサクラちゃんの力が必要だよ」
そう言えばサクラちゃんの強張っていた表情は緩み、少しだけ笑みを浮かべて頷いてくれた。

◇

――――時は流れて数日後。
修行はサクラちゃんからのアドバイスもあって順調だ。
サスケ君はサクラちゃんからアドバイスをされるのが恥ずかしいのか、コツを教えてもらう際そっぽを向いていた。けれど話はしっかりと聞いてはいたらしい。
ナルト君もサスケ君も、そして私も難なく木に登れるようになってきた。
そしてそんな最中、私達はタズナさんからガトーの行った所業を聞

く。
イナリ君のお父さんであるカイザさんの、ガトーによる公開処刑。
一企業の民間人が波の国に対してこのような横暴をできるのが不思議でならないが、この国は海に囲まれており閉鎖的だ。ＳＮＳとかあったら情報は巡り一発で炎上（というか逮捕）されるものの、この世界にはそんなものはない。
表向きガトーの会社は優良企業であるからにして、きっとガトー個人の権力が大きいと思うが……。

しかし不意にあることが思いついた。
今こうして私達は再不斬達を倒すために修行しているけれど、そもそも再不斬を倒す必要は無いのでは、と。
根本的な原因は再不斬ではなく、ガトーなのだ。
再不斬を何とかするのではなくガトーをどうにかした方が早いのではないだろうか。

第十四話　森の中の出逢い（一部白視点）

「カカシ先生、私達ってそもそも再不斬を相手にしなくても良いんじゃないでしょうか？」
「いきなりどうした？」
　タズナさん宅で夕飯を食べた後、再び修行に出掛けようとするナルト君とサスケ君を引き留めて私はカカシ先生に聞いた。
　ナルト君はいきなり話し出す私に対して「何言ってるんだってばよ」と言う顔をしている。そして食卓を囲む第七班のメンバーやタズナさん達（イナリ君はご飯を食べた後どこか行ってしまった）も不思議そうな顔をした。
「再不斬はガトーから雇われている忍ですよね？それなら雇い主であるガトーに対して何かしらのアプローチをすれば済む話なんじゃないかと」
「例えば？」
「例えば……」
　ガトーを暗殺するとか？
　と言おうとしたが口をつぐむ。
　再不斬が負傷している今、おそらくガトー周辺の守備は手薄だろう。それを見越して襲撃しても良いが、流石にガトーの暗殺は任務範囲外すぎるし経済界への打撃が大きすぎる。
「例えば……ガトーが再不斬に対してどういった契約をしているか分かりませんが、それを破棄させるような契約を新たに結ばせるとか……。幻術か何かで洗脳して契約破棄の旨が書かれた念書にサインさせたり、あとその際に波の国から手を引くような書類にもサインさせたらどうですか？」
「……」
「でも色々穴がありますよね。すみません……。それかガトーを脅して銀行預金を引き出すのはどうでしょうか？それを元手に再不斬にタズナさん達から手を引くよう再依頼するんです。……あ、でも再

不斬の気持ちがどう転ぶか分からないので賭けに違いないですよね」
自分で話を切り出したにも関わらず名案が浮かばない。それにガトーの居場所を探し出すのも難点である。
あくまでガトーを害するのが目的ではなく、ガトーと再不斬の間にある契約をどうにかすれば良いと思うのだが……、どうしたら良いんだろうなあ。
ナルト君達にとって対再不斬戦は成長できる機会なのかもしれない。
だけど、やっぱり、こう……。タズナさんを見捨てなくても良いのなら、こういうやり方したって別に良いんじゃないだろうか。タズナさんを【あらゆる脅威】から守る方法の一つとして。
そして再不斬と闘うのは最終手段だ。
「どうでしょう？あ、カカシ先生だけじゃなくて、みんなも何か良い方法があったら教えて……って、あれ？」
ガトーに対してのアプローチを聞くため顔を上げてみたが、何故か一同顔が引き攣っていた。あのナルト君やサクラちゃんでさえ見たことないような顔をして私を見ている。
「え、ちょっと、どうしたの？あれ？……あ、私変なこと言ってるんだよね。突っ込みどころ満載な……！」
そうだよね！こんなガバガバな計画立てたところで成功するとは限らないし！
ガトーを殺すよりも良心的で忍だったらこれくらいやっても良いかな？と思ったが、突っ込みどころ満載すぎてみんな呆れてしまっているのかもしれない。
恥ずかしすぎて顔から火が出そうだ。思わず横にいるナルト君に「ね！」と同意を求めるが、何故か目を逸らされてしまう。
するとカカシ先生が口を開いた。
「そういうことじゃないんだが……。ま、ガトーの居場所を探すのは今からだと難しいな！その間に再不斬が回復するだろうし」
「やっぱりそうですよね」
「それにおそらく再不斬は追い忍の追跡から逃れるために、ガトーの

もとにいるかもしれない。そう推測すると再不斬からガトーを裏切るような真似はしないよ」
よっぽどのことがない限りね、と先生が付け加える。
それに素直に頷けば、何故か先生は何とも言えない顔で私を見つめていた。
そんな目線にさらに恥ずかしくなり話を変える。
「ナルト君とサスケ君も引き留めちゃってごめんね。私の話はここまでだから、もう木登りの修行に行ってもらっても大丈夫だよ」
そう言えばナルト君達は遠い目をしながら頷く。うわ、めっちゃ引いてるよこれ。発言の阿呆さに引かれてしまうのは中々堪える。
カカシ先生やサスケ君はまだしも、ナルト君やサクラちゃん、おまけにタズナさんやツナミさんからも「こいつ……」みたいな顔で見られるのは非常にきつかった。
「ホタルのこと、ちょっと勘違いしてたかもしれないってばよ……」
「ごめんごめん。変なこと言って」
そうだよね。ナルト君の前では私【優等生】だったもんね。それがいきなり計画性のないこと話すものだから、反応に困ってしまったかもしれない。
ガトーを暗殺する云々まで言わなくて良かったと、心から安堵すると同時に、結局再不斬を相手にしなくてはならないことに肩を落とした。

◇

――――翌日の早朝。
ツナミさんよりも早く起きてしまったため、手伝いである庭の水やりを終えてから私は散歩に出掛けていた。
タズナさん宅から少し離れた森でぼんやり歩きながらふと思う。
乗りかかった船ということで色々と考えてみるものの中々名案は

浮かばないし、ここでちょっと考えたくらいの案ならとうの昔に波の国の人達がやっているはずだ。
いざガトーに会った時のために、一応タズナさんからタイプライターと紙をもらって波の国から撤退する旨が書かれた書類一式を用意したのだが……。何だかから回ってしまっているような気がしてならない。
「燃やしちゃおうかな、これ……」
懐から書類を取り出してペラペラ捲る。
念のためガトーが不慮の事故死をした場合のことも想定して書類を作成したが、果たしてこれが使われる時が来るのだろうか……。
するとその時、前方から誰かが歩いてくるのが見えた。
朝の散歩仲間かな?と思い目を凝らせば、そこには長い髪をした綺麗な少女がいる。私よりも少し年上の女の子。
……うん?……女の子?あれ、男の子な気がする……。何だろう。どこから見ても女の子なのに男の子にも見えるぞ……。いや、よく見れば男の子か!?
チョーカーを付けているため分かりづらいが、ほんの少し喉仏ができている。それと骨張った手先から彼が男性である可能性が浮き上がった。
そしてはっと一瞬息を呑んでしまったのも束の間。それを表に出すのは非常に失礼であり、異性でも同性でも結局はどちらでも良いと思い直して、私は慌てて愛想笑いを顔に浮かべる。
「おはようございます。朝早いですね」
書類一式を懐にしまいながら挨拶すると、その子は何故か訝しげな表情をした。
しかしその後すぐに微笑んで会釈してくれる。
何で一瞬、不審者を見るような顔をしたんだろう。
木の葉の忍がここら辺を彷徨っていたら、びっくりされてしまうため額当ては付けていない。もしかしたらちゃんと愛想笑いできていなかったとか……?
それかこんな朝早く見慣れない子供が森の中にいて不思議に思っ

ているのかもしれない。
「……君はここで見ない子ですね」
「はい。父の仕事で波の国に用事があったので、しばらく滞在しているんです」
「へえ……？父親の？」
「最近大きな橋が建設されていますよね？その仕事に携わっているんです」
　忍の任務として来ましたなんて答えても不審に思われるだけだろう。それらしいことを話せば、じっと私を見つめた後「そうですか」と頷いた。
「でも心配でしょう。あの橋は目を付けている人間が多いので」
　目の前の子が聞いてくる。
　それに私は困ったように笑いながら答えた。
「波の国に住んでいる人はご存知なんですね。……ガトーについてもやっぱり知っていらっしゃるんですか？」
「ここらでは有名な話ですからね。あなたのお父様もさぞ大変でしょう。身内のあなたももしかしたら狙われてしまうかもしれませんよ」
「あはは、そうなったら父と一緒にすぐに逃げます」
「……ふふ、どうだか」
　少しだけ笑ってくれるが、何だか奇妙な間が開いたのは気のせいだろうか。
　……やっぱり変な風に見られてるのかな？
　不審な人間だと思われたくないため、ここはもう少し子供っぽく振る舞おうと口を開いた。
「ガトーの居場所が分かれば良いんですけどね」
「おや、闇討ちですか？」
「違いますよ！お願いするんです。波の国から出ていってくださいって。ちゃんと契約書だって書いたんですから！」
　ど、どうかな？１２歳の女の子が少し背伸びするものの【お願い】という言葉を使っているせいで、どこか微笑ましくなってしまうこの感じ。

中身成人済みの自分がやるには非常に恥ずかしいが背に腹はかえられない。不審者だと思われないため必死に子供(ピエロ)を演じた。
けれど相手の眼光が余計鋭くなったような気がしてならない。あ、あれ？やっぱり駄目だった？
「ふふ。まあ、良いでしょう。化かし合いもここまでにしますか」
「ば、化かし合い……？」
「……あくまでもシラを切るんですね。確かにここで争っても仕方がない。大人しく退きますので、あなたも真っ直ぐ帰るんですよ」
何言ってんだこの子。そう思ったものの、その子はくすりと苦笑してその場から去ってしまった。
ええ、何ー…？本当にあの子何なの？

◆

タズナの護衛任務によりやって来た、木の葉隠れの忍達。その内の一人である少女と早朝の森で出会い、白は彼女との会話を思い出しては苦笑した。
白の姿を見た瞬間、はっとした表情をする少女。
しかしすぐさま上っ面な笑みを浮かべる様を見て、彼女は白が再不斬の仲間だと気付いたのだろう。そうでなければ自身を見て息を呑むほど驚く理由がない。
あの時、面を付けてはいたが変化の術は使っていなかった。白の背格好と纏う気配によって見抜かれたのかもしれない。
『おはようございます。朝早いですね』
『父の仕事で波の国に用事があったので、しばらく滞在しているんです』
『最近大きな橋が建設されていますよね？その仕事に携わっているんです』

そして彼女の口からつらつらと語られる嘘。互いの素性に気付いているにも関わらずしらばっくれる少女の面の厚さに辟易とした。

「……どうした、白」

ガトーに用意された隠れ家にて。ベッドに横たわる再不斬は、窓の外をぼんやりと見つめる白に投げかけた。それに白は「いえ」と首を振る。

「森で木の葉隠れのくノ一に会ったんです。あの焦げ茶色の髪の女の子です」

「……あの小娘か」

「僕の正体を知っていて尚シラを切られました。あの子、相当な食わせ者ですよ」

そしてくすりと小さく笑う。

あの下忍の子供達の中で随分と毛色の違う、少女の笑み。それが白の頭にべったりと貼り付いた。

第十五話　尋問

数日後、木登りの修行がひと段落し、カカシ先生も回復した。そして私達は今日をもってタズナさんの護衛任務に再度就くことになった。

「じゃ、ホタル。ナルトを頼むな」

「分かりました。お気を付けて」

私とナルト君を除く第七班はタズナさんの護衛のために橋へ行く。

私はというと、未だに寝こけているナルト君を起こす（また体が動かないほど疲弊していた場合無理矢理寝かせる）という使命を仰せつかり、タズナさん宅に残っていた。

「すみません、ツナミさん。すぐにナルト君を起こしてタズナさんの護衛に行きますから」

「良いのよ。ナルト君もずっと修行していて疲れちゃったんだわ」

ツナミさんが微笑ましそうに言う。

そして彼女のすぐ後ろにいるイナリ君に「騒がしくてごめんね」と言えば、そっぽを向かれてしまった。

その様子を見て、ふと昨夜のことを思い出す。

ガトーの恐ろしさを身をもって知るイナリ君が、くたくたになるまで修行を続けるナルト君に泣きながら声を荒げたのだ。

この国のことを何も知らないお前が出しゃばるな。お前に何が分かるんだ、と。

『お前みたいなバカはずっと泣いてろ！泣き虫ヤローが』

それに対してナルト君が言い放った言葉。そしてナルト君はそのまますぐに寝てしまい、イナリ君は家から飛び出してしまった。

そこで何か言えたら良かったのだが咄嗟に声をかけることができず（不覚……）こうして朝を迎えてしまったわけだ。

「イナリ君」

「な、何」

「昨日はごめんね。イナリ君の言う通り、余所者の私達が波の国の問

題にとやかく言うのは気分が良くなかったよね。……きっと、ナルト君も言い過ぎたと思っているから、彼が起きた時には無視しないでくれると嬉しいな」
そう言えば、イナリ君は気まずそうに俯く。ツナミさんが「こらっ」と叱るが、彼の心情を思うと素直に頷くことはできないだろう。
それじゃあ、あの寝坊助を無理矢理起こしに行きますか、と私は気持ちを切り替えた。

◇

「寝坊したってばよーーーー!!!!」
「よし、ナルト君。体調はどう?その様子なら動けるね。はい、服。向こうで着替えて。顔も洗って。あと忍具はここに置いとくから。それと朝食はツナミさんが軽くつまめるものを用意してくれているから、食べながらタズナさんのとこに行くよ」
「え、あ、わ、分かったってばよ!」
耳元で大声を上げたり肩をめちゃくちゃ揺さぶったりした結果、ようやくナルト君が起きてくれた。
そんな彼にあらかじめ準備をしていた諸々の用意を渡せば、ナルト君は目を白黒しながらも頷いた。
「ホタルってばオレのこと待っててくれたの?」
「うん、カカシ先生に言われてたしね。あと……」
タズナさんの所に行く前にイナリ君に一言謝っておいた方が良いんじゃない?
そう言おうとしたが口をつぐむ。
私とナルト君は(外見は)同い年なのだ。そんな同い年の子供の私が大人のように言っても素直に聞くとは思えない。
「イナリ君が昨日のこと、ちょっと気にしてる様子なんだよね……。どうしたら良いかな?」

「……オレ、ちょっと言い過ぎたと思う。イナリの奴にはオレから謝っとくってばよ！」
「本当？」
「おう！」
　これでナルト君とイナリ君の関係も何とかなりそうだ。私達は任務とは言え、タズナさん宅で世話になってる身だからね。共同生活するのなら人間関係は円滑にしておきたいし、互いに仲違いしたままだとナルト君もイナリ君も気まずいだろう。
　――するとその時、一階から瓦礫が崩れるような音とツナミさんの叫び声が響いた。

◇

　侍崩れのチンピラの強襲によって、タズナさん宅の壁にぽっかりと空いた。その横穴を見て溜め息を吐く。
　私達が一階に駆け下りれば、そこには二人組の輩に捕まったツナミさんとイナリ君の姿があったのだ。
　そしてナルト君と私でそいつらをボコボコにし、捕縛した後私は奴らの内一人に尋問していた。
「ここに来るってことはガトーの差し金だね。貴方達みたいな人も雇われてるってことはもっと多くの輩もいるってこと？まさかツナミさんだけじゃなくて街の人や橋関係の人達の所にも行って暴れてるの？」
「クソ餓鬼がッ！誰がテメエに教えるか！」
「早く答えないと一生刀を持てないような手にするよ」
　縄に縛られたチンピラの一人が苛ついたように私を睨む。ちなみにもう一人はすでに海に落としてきた。
　忍ではない、鉄砲玉のようなチンピラはおそらく単価が安い。ガトーほどの富豪ならば何人もの忍（抜け忍に頼るのも恐ろしいが…）

を雇うことは造作もないはずだ。
　しかし忍ではなく、こういった輩も雇っているということは奴が相当のケチであるか、それとも数に頼って荒くれ者どもを大量に雇っている可能性があった。
　しかし時間がない。
　おそらく今頃橋の方に再不斬が襲来しているだろう。早い所聞き出したかった。
「ちなみにもう一人の人が教えてくれたよ。ガトーが大量の人員を雇って何かするって。利き手じゃない方の手をクナイでぐしゃぐしゃにしたらすぐに吐いてくれた。今頃きっと逃げているでしょうね。あなたを裏切って、一人で遠くに」
　もちろん嘘である。しかし血(血糊)で汚れたクナイをかざせば、彼は可哀想なくらい顔を真っ青にさせた。
「アイツ……!!」
「でも早く教えてくれたら、すぐにでもあなたを解放する。今なら逃げたあの人に追いつけるんじゃないかな?」
　何でも良いから早く教えてくれーー!
　早く!早く!と内心急かしていると、その侍崩れのチンピラは忌々しそうにぼろぼろと吐いた。
　彼の話によるところ、ガトーは１００人以上の荒くれ者を雇っており、カカシ先生達との戦いで疲弊した再不斬諸共タズナさんを始末するつもりらしい。
　え、再不斬も?と思ったが、抜け忍の再不斬を霧隠れの忍から匿うのは随分と大変そうで早い所手を切りたいそうだ。
　とりあえず民間人（タズナさん達除く）に被害が及ぶような企てはないらしく、ほっと安堵する。
　けれど橋に１００人以上の荒くれ者どもが強襲しようとしてくるなら、すぐにでもみんなに伝えた方が良い。
「どうもありがとうございます。聞きたいことは聞けましたので、それじゃあ……」
「あッ!テメ……!!」

そう言って縄で縛ったままのチンピラを桟橋から海に落とす。
チンピラの処遇を考えた時、縄で縛ったまま気絶させても良かったが、いずれ覚醒して縄を解いてしまうかもしれなかった。また単純に海に落としたとしても泳いで再びツナミさん達に危害を加えるだろう。
そう考えると縛ったまま海に落として、この場から物理的に離れさせるのが得策だ。
良心は確かに痛む。けれどこの忍のいる世界はやらなきゃやられるのだ。
転生前のことを思うとあり得ないが、今世の父や母だってあっさりと死んでしまった。
それに、まあ、手は縛っているが足は自由にしている。幸い海の波は穏やかであるため体が沈むことはないだろう。それに流れ着いた先でもう一人のチンピラと再会し同士討ちをしてくれるかもしれない。
「――ナルト君、お待たせ。今の聞いたよね？急いでタズナさんの所へ行こう」
後ろに控えていたナルト君に声を掛ければ、彼はイナリ君と仲直りしたのか隣り合って立っていた。
「ホタル……。お前敵には容赦ねえってばよ」
「ナルトの兄ちゃん、この女怖いよ」
え、あ、あれ!?
私はそんなナルト君達の反応にぐさりと傷付いた。

第十六話　突破（ナルト視点）

第七班に不知火ホタルという少女がいる。
アカデミー時代からの付き合いで、授業についていけないナルトに勉強を教えたり、たまに修行にも付き合ってくれる面倒見の良い少女であった。
大人達から遠巻きにされ同級生達からは馬鹿にされても、彼女はまるで恩師のイルカのように気にかけてくれる。同い年の子供であるけれど、どこか大人びたホタルのことをナルトは姉のような気持ちで見ていた。
一人でいたらさりげなく声をかけてくれる、仲間思いな少女。
しかしタズナの護衛任務で垣間見せたホタルの二面性に、ナルトは彼女が優しいだけの少女ではなかったことにようやく気付いた。
第七班のメンバーや一度懐に入れた者にはとことん親切であるのだが、敵に対してじめじめとした陰湿さを見せる。ガトーの対策にツナミとイナリへ襲い掛かったチンピラどもへの容赦のなさ。
『怖がらせちゃってごめんね』
引き攣るナルトにホタルは申し訳なさそうに言った。
一般人に被害が及ぶ可能性があるならば、敵に対してどんなことでも行えてしまいそうなホタル。任務序盤に、不安そうな顔をして木の葉の里に帰ろうと言ったか弱い少女の姿はどこにもなかった。
そんな彼女の一面に驚きながらも、同時にナルトは自身の甘さを痛感する。こんな自分が、これから対峙する敵に対して非情な選択ができるのか。
何故、ホタルはそんな風に考えられるのだろう。
アカデミーに入学して、授業を受けて、同じタイミングで下忍になったというのに。
ホタルが仲間思いの優しい少女だということは、身をもって知っている。
けれどナルトはそんなホタルを絶対に怒らせてはいけないと誓う

とともに、彼女が何かを抱えていることを察した。
そしてそれを、いつか自分に打ち明けてくれたらと心から思った。

◆

橋にたどり着いたナルトとホタルは工事に使われる鉄骨の陰から戦況を覗いた。
カカシは再不斬と交戦しており、サクラはタズナを護衛している。
そしてサスケはというと冷気を発する多数の魔鏡に囲い込まれていた。魔鏡に映し出されたお面の少年が目にも止まらぬ速さで鋭い斬撃を放ち、サスケに襲いかかっている。
サクラが一瞬タズナの元から離れクナイを投げつけるが、お面の少年が魔鏡からぬるりと現れ易々とそれを掴み取った。
魔鏡に囲まれた傷だらけのサスケ。その鏡に映る幾人ものお面の少年の姿。
少年の術によって追い詰められるサスケに、ナルトは居ても立っても居られず飛び出そうとした。
しかしそれを、ホタルが背後からがしりと止める。
「何すんだってばよ!!早くしないとサスケが!!」
「……あの子、クナイを投げたら動きを止めた。ナルト君、耳を貸して」
そしてホタルは急かすナルトに作戦というにはお粗末な計画を伝える。
「――――いける？ナルト君」
「いけるってばよ！ホタルは？」
「私はカカシ先生のところに行ってガトーの思惑を伝えに行く。上手くいけば再不斬と休戦できるかもしれないから頑張るよ」
そう言って2人の忍は頷き合う。
そして彼らは鉄骨の陰から飛び出した。

「よ！助けに来たぞ！」
魔境に囲まれた空間にナルトが意気揚々と現れる。
それにサスケは目を丸くし「このウスラトンカチが！」と一喝した。
忍ならば、敵の術発動空間に正面切って乗り込む輩はまずいない。
しかしあっけらかんとお面の少年の空間内に入り込んだナルトにサスケは目眩がしそうだった。
けれど当のナルトはまあまあと、まるでホタルのようにサスケを宥め彼に耳打ちする。
ナルトがここに来る前にホタルの言った言葉。
お面の少年に警戒しながらそれを話せば、サスケはすっと表情を引き締めた。
「テメエみてえなドベと協力する気にはならねえが、やるしかねえようだな」
「ドベとは何だ!!」
ナルトはサスケの言葉に思わずぎゃあぎゃあと反論したが、すぐに目の前の四方八方囲む魔鏡と幾人ものお面の少年を見据えた。
ナルトだってサスケと協力するだなんて嫌だった。けれど任務をこなしていく内に、このいけ好かないライバルの実力を認めていったのも事実だ。
――それに、何の準備もせずにのこのことやってきたわけではない。
するとその時、魔鏡に映るお面の少年がそんなナルト達を見て口を開く。
「あなた達は今の状況を分かっているんですか？」
少年の静かな声が周りを囲む魔鏡に響いた。
「四方から放たれる斬撃に絶対に捕まらない敵。こんな状況でまさか勝てると？……出来るなら君達を殺したくないし、君達にボクを殺させたくない。けれど君達がこうして向かってくると言うなら、ボクは刃で心を殺して忍になりきる」
朗々と語る少年の言葉にナルト達は身構える。武者震いなのか肌

にぞわりと鳥肌が立った。
「ボクは大切な人を守りたい。その人の為に働き、その人の為に戦い、その人の夢を叶えたい」
その瞬間、ナルトの脳裏に早朝森で出会った美しい少年の姿を思い出した。
『――――あなたには大切な人がいますか？』
『人は、大切な何かを守りたいと思った時に本当に強くなれるものなんです』
それを聞いた時、ナルトは木の葉の里で世話になった恩師のイルカや第七班のメンバーの顔が思い浮かんだ。
そして衰退していく波の国に再び息吹を吹き込もうとするタズナや、誇り高く死んでいったイナリの父を思う。
お面の少年の言う大切な人や思いがナルトにも確かに存在した。
「それがボクの夢。その為ならボクは忍になりきる。あなた達を殺します」

◆

少年が言い終わるか否やのタイミングで、サスケは印を結び終えた。
――――火遁　鳳仙火の術!!
口から噴き出すのはいくつもの灼熱の火球で、手裏剣を忍ばせた無数のそれらは周囲を囲む魔鏡全面に放たれた。
しかしそれをお面の少年は高速でかわし、同時に2人に鋭い斬撃を喰らわす。
「無駄ですよ。先程も言いましたが火遁だけじゃボクの魔鏡を溶かすことはできない」
けれど、それが狙いだ。移動した後、わずかに出来る空白の間。ナルトの脳裏にホタルの言葉がよみがえった。

『時間がないから手短に話すよ。さっきサクラちゃんのクナイをお面の子が掴んだ時、攻撃は止んだでしょ？それと同時にあの子の体が鏡から現れた。その瞬間がチャンスだと思う』

そのチャンスが今訪れた。

――次の瞬間、魔鏡の外側から何本ものクナイが飛来する。

「一体どこから……！」

魔鏡に向かって放たれたそれを少年が掴む。

するとその時、外側で待機していた何人ものナルトの影分身がどこからともなく現れた。そして姿を出す少年の体を影分身達が即座に捕らえる。

「な!?」

『あらかじめ外で待機している影分身に捕まえさせる。そうすれば奴は移動することができないはずよ』

ホタルの声が頭を過ぎる。

本体は一人。魔鏡に映るのは幻像。本体の動きを止めさえすれば攻撃は止まるのだ。あらかじめ外で待機させていた影分身に隙を突いて少年を捕まえさせれば良いだけの話である。

しかし問題はこの後だった。

お面の少年を魔鏡から引き剥がすことができない。魔鏡の空間は未だナルト達を囲っている。

『ナルト君、木登りの修行の時にサクラちゃんが言ってたよね？チャクラを込めることで木に引っ付くだけじゃなくて攻撃にも活かせるんじゃないかって』

ホタルの言葉を思い出し、チャクラを拳に込める。隣を見ればサスケも印を組み、チャクラを拳に込めていた。

ナルトはその刹那、奇妙な気持ちになった。

アカデミー時代、あれだけ目の敵にしていた奴とこうして共闘している。同じ班員であり、仲間であるから。一人ぼっちだった小さい頃、あれだけ焦がれていた仲間の存在がいつの間にか出来ていたのだ。

同時にあの頃の一人だった幼い自分が救われたような心地がした。

サスケや他の班員がどう思っているかは分からないが、そう思うと自然に力が込み上がる。感じたことのない高揚が湧き出た。
今はまだホタルのように冷静で、仲間のために敵に対して非情な振る舞いを取ることができるか分からない。少年が言ったように殺すとか殺さないとか覚悟はできていないのかもしれない。
けれどナルトは、ホタルと同じく仲間のために自分の持ちうる全てをもって、この状況を打破したいという気持ちが胸を埋め尽した。
その瞬間、ナルトの中にある膨大なチャクラが溢れ出るような感覚がした。
しかし頭は冴え、真っ直ぐに魔鏡の壁を捉える。
「行くぞ！サスケ！」
「指図するな！」
そしてナルトの赤いチャクラとサスケの青いチャクラを纏った拳が振り下ろされる。
凄まじい音を立てて、彼らは魔鏡を打ち破った。

第十七話　ガトーの襲撃

「お忙しいところ大変申し訳ありません。カカシ先生、現在ガトーが大勢の手下を引き連れて橋にやって来ているそうです。おまけにカカシ先生との闘いで疲弊した再不斬をタズナさん諸共始末すると聞きました」

「……は？」

どうしよう、どのタイミングでカカシ先生のところに行こう!?

そう思っていたところ、やっとチャンスが舞い降りた。

ガトーの企てをすぐさまカカシ先生に伝えたかったが、急に周囲が濃霧に包まれてしまった。

再不斬とカカシ先生が交戦しているのは音や霧向こうに浮かび上がる影によって何となく分かる。しかしそのまま彼らの戦いに突っ込めば、私は巻き込まれて死ぬだろう。

そう思いどうしようかとタイミングを窺っていると、その霧がうっすらと徐々に晴れてきた。

もしかしたら決着が着いたのか？と恐る恐る近寄り目を凝らして見てみれば、中からたくさんの忍犬達に拘束された再不斬と対峙するカカシ先生の姿が現れる。

今しかない！

そして慌てて先生のもとへ駆け寄り、冒頭の言葉を言ったわけである。

「ホタル、珍しく空気が読めてないぞ」

「すみません。あえて読まなかったのですが……、じゃなくて大変なんです。さっきも言いましたが、ガトーがたくさんの手下といっしょにこっちにやって来ているんです。……　再不斬も始末するって！再不斬も！始末するんですって！」

「落ちつけ落ちつけ」

ガトーが再不斬諸共始末しようとしていることを、わざと本人にも

聞こえるよう大声で言い放つ。
私達と戦ってる場合じゃないですよと思いながら、ちらりと再不斬を見れば彼は訝しげな表情をしていた。
「それは確かなのか？」
「はい。ツナミさんを人質にしようとしたガトーの手先から聞き出しました」
すると多くの忍犬に噛みつかれ、血塗れの姿で拘束される再不斬が睨んできた。
「おい、小娘。適当なこと吹かすな。これはガキの遊びじゃねえんだぞ」
適当なことを吹かすためにわざわざこんな戦場に飛び込むわけないでしょ！そう思ったがふと不安になる。
……あのチンピラが言ってたことって本当なのかな。再不斬にそう言われると急に自信がなくなってきた。
「ガトーの手先から教わりましたが……。ただこんな信憑性もないことを、カカシ先生の攻撃の手を止めて話すくらい私は真剣です」
情報の真偽は定かではないが、とりあえずふざけていないということを伝える。
そしてカカシ先生はというと眉間に皺を寄せて考え込んでいる様子だった。
「……どうします？再不斬と一時休戦してガトーに備えるか、それか今ここで確実に再不斬を始末するか」
ただ一時休戦したとしても再不斬が私達と一緒に共闘してくれる確率は低い。というか私達を置いてすぐさま逃げるはずだ。まあ、前者の方が互いにこれ以上チャクラを消費しなくて済むが……。
ポーチの中を探り、チャクラ増強剤の丸薬があることを確認する。
もしあのチンピラの言う通り、ガトーの企みが本当ならば１００人以上もの敵を相手取るのは難しいだろう。カカシ先生は再不斬との戦いで疲弊しているし、私達部下４人だけで大勢のチンピラを蹴散らすのは現実的ではない。
しかしチャクラ増強剤の丸薬が手元にあるのだ。それをカカシ先

生に飲ませればまだ勝機はある。
完全に人任せであるが、一番可能な手段だろう。
……それにしても再不斬も不運な人だ。
今こうしてカカシ先生によって命を握られ、雇い主のガトーから裏切られる。すでに前金が払われてるなら良いが、後払いか分割払いであるのなら踏んだり蹴ったりだろう。
「小娘、その目は何だ……」
「す、すみません。目を閉じます」
再不斬がぎらりと睨んでくるのに耐えられず目を逸らした。

――するとその時、ガチャガチャと刃が擦れ合うような音がどこからともなく聞こえてきた。
荒々しい大勢の足音に喧騒。かすかに白む霧向こうから、何かの大群が押し寄せて来る気配がした。
「おーおー、派手にやられて。がっかりだよ。再不斬……」
先頭に立つのは黒いスーツを着た初老の男。その背後には大小様々な武器を持った大勢の荒くれ者どもが並んでいた。
そして集団の中にツナミさんを人質にしようとした侍崩れのチンピラ達の姿もおり、私は咄嗟に手で顔を隠す。
「そこのガキ!!よくも俺達を騙しやがったな!?相棒は裏切ってなんかなかったぞ!!」
どうやら彼らはあれから合流したらしい。
逃げ切った先の同士討ちを狙っていたのだが、2人の絆は確かなものだったようだ。
「嬢ちゃんが部下から情報を引き出したのか。こいつらの落とし前は働き次第で考えようと思ってな」
ああ、やばい。完全に目を付けられている。おまけにカカシ先生からの「お前本当に何したの?」という視線もめちゃくちゃ痛かった。
「嬢ちゃんが俺の企みを再不斬に話すと思い早めに来てみたが……。どうやらその通りだったようだな。ここで逃げられでもしたら、後々お前は報復しに来るだろう。それなら他流忍者同士の討ち合いで

弱った今、数で攻め殺す。……お前に金を支払う真似もしなくて済む、良い手だと思わないか？」
　ガトーの言葉に再不斬は唸る。
「テメエ、最初からそのつもりだったんだな？」
「クク……、そんな分かりきったことを聞くな」
　そしてガトーの後ろに控えるチンピラどもが下卑た笑い声をあげる。大勢の男達の声が橋に響き渡った。
　私が情報を得たから早めに来たという聞き捨てならない台詞が吐かれたのは気のせいではないだろう。や、やばい。これ、私のせいになるのか？いや、でもガトー達は遅かれ早かれ襲撃しに来る予定だったし……。
　いつの間にか再不斬を拘束していた忍犬達は消えていた。血塗れの姿で立ち尽くす彼はガトーを鋭い眼光で睨んでいる。
「カカシ、戦いはここまでだ。オレにタズナを狙う理由がなくなった以上、お前らと闘う理由もなくなったわけだ」
「ああ……」
「白！まだ動けるならこっちに来い！」
　するとその時、どこからともなくお面の少年が再不斬の横に現れた。いや、お面はすでに付けておらず、顔が晒されていた。
　あれ、この子どこかで見たことがあるような……。
「話は聞いていたか？」
「はい。……あの外道が。忍を裏切っておいて只で済むと思っているようですね」
　ちらりと背後を見れば霧はとうに晴れ、彼の出した魔鏡は消滅していた。ナルト君達は無事なようで、こちらにやって来る。
　ここからどうします？とカカシ先生の顔を窺えば、先生は首を縦に振った。
　どうやら話の展開的に再不斬と白と呼ばれる少年がガトーやチンピラどもを何とかしてくれるそうだ。落とし前というやつだろうか。
　いや、でも傷だらけの彼らだけで何とかなるのかなと思ったその時、「ナルトの兄ちゃん！」と背後から声がした。

見ればイナリ君と波の国の島民達が各々武器を構えて立っている。
「イナリ!!」
「へへ、ヒーローってば遅れて登場するもんだからね!」
手負の再不斬に白という少年。そして波の国の島民達。
するとナルト君が印を組んだ。
「オレ達も加勢するってばよ!」
その瞬間、ナルト君の影分身が現れる。そしてカカシ先生も印を組んで影分身の術を発動させた。
そうだよね。島民の人達が関わるのなら話は別だ。民間人である彼らに危害が加わるのなら加勢することも辞さない。
手負の再不斬だけかと思っていたガトー側は、よりにもよって島民達や私達も相手取らなければならないことに顔が引き攣る。
それが何だかあまりにも哀れであった。

第十八話　落とし前

あれからガトーは再不斬によって殺された。彼の雇っていたチンピラどもも白や第七班が倒すと、次から次へと船に乗って逃げて行く。

事態は収束し、現在橋の上には喜び合う島民達とナルト君達、そしてどこか不機嫌そうな再不斬と白がいた。ちなみに彼らに戦意はないようだ。

するとその時、再不斬の隣に立っていた白、いや白さんが私のところへやって来た。

「はい、どうぞ。ガトーを仕留める直前、書いてもらいましたよ。といっても血判ですが」

「あ、ありがとうございます……」

白さんから渡された書類一式に顔が引き攣る。

というのも、ガトー達に立ち向かおうとした時、何故か白さんが私に声を掛けてきたのだ。

『お久しぶりですね。ところであなた、波の国の利権に関する念書を作ったんですよね？ガトーを始末する前にサインさせときますよ』

え、何でそんなこと知ってるの？

この子怖すぎでしょ……と思いながら一応持っている書類一式を懐から出せば、彼はにっこりと笑って受け取った。そして再不斬がガトーにトドメを刺す直前、無理矢理サインさせたらしい。

「どうしてコレのことを？」

「おや、またしらばっくれる気ですか？ボクに話してくれたじゃないですか」

白さんがくすくす笑う。そんな彼の顔を見て、私はハッと思い出した。

そうだ。彼は早朝の森で会話した、あの子だ。

そこでようやく彼の言った言葉が繋がる。

あの時、私は子供のふりをして契約書を作ったと言ってみせた。そ

れを白さんは信じたのだろう。何であんな戯言のような言葉を信じたのかは分からないが……。
「ボク達はここにいる理由がありませんから、もう去ります。あなた達はどうするつもりで？……あなたも依頼人に騙された口でしょう。落とし前をどう付けるんですか？」
　すると白さんが静かにつぶやく。
　ガトーの血判がついた書類に目を通しながら、思わず固まってしまった。
「それは、どういう意味ですか？」
「抜け忍からの護衛任務だと言うのに、あなた達みたいなひよっこがやって来たんです。大方あの橋職人の老人に騙されたんだと一目見て分かりましたよ」
「……」
「ボク達はきちんとガトーに落とし前をつけました。あなた達はどうするんです？」
　そんな白さんの言葉にうまく返せず、向こう側で島民達と泣いて喜ぶタズナさんの姿を見た。
　確かに彼の言う通りだ。私達第七班はタズナさんの虚偽の任務を引き受けたけれど、木の葉の里はそれで納得するだろうか。タズナさんは私達だけでなく、大きく言えば里自体も騙したことになるのだから。
　里はタズナさんに対してどういった処分を下すのだろう。
　放置か、それとも制裁か。
「……まあ、ボクの知ったことではないですけどね」
　白さんがじっと私を見つめながら言う。
　そして彼は再不斬のもとに行き、２人はそのまま橋の上から去って行った。

◇

――その日の夜、喜び合う島民達によってタズナさんの自宅の付近で祝勝会が開かれた。
オレンジ色に灯る提灯が吊るされ、ツナミさんや島の女衆によって用意された料理が並べられる。
ナルト君はイナリ君と楽しげに話しており、サクラちゃんはサスケ君に甲斐甲斐しく料理をよそっている。
そしてカカシ先生は、歓談する島民達の少し離れたところでタズナさんと一緒にいた。
何か大事な話をしているかもしれないと後で声をかけようかと思ったが、先生と目が合い手招きされる。
人の合間をぬって彼らのもとに行けば、先生が口を開いた。
「ホタル、波の国についてガトーにサインさせた念書はどこにある？」
私は懐から書類一式を取り出す。
カカシ先生はそれをぱらぱらと捲って確認した後「うん、ちゃんと書いてあるね」と言ってタズナさんに渡した。
「うちの班員が用意したものですが契約書として効力はあるでしょう。ガトーを半ば脅した形でサインしましたが、それを知る者は誰もいない。もしガトーの会社から何か言われたらこれを見せれば何とかなるかもしれません」
「まあ、あちらさんもガトーが死んだ波の国には関わりたくないでしょうが」と先生が苦笑する。
「ありがとう……！お前達には感謝しかない！……それとお前達を騙してここまで巻き込んでしまい、本当に申し訳なかった！」
頭を下げるタズナさんに、思わずカカシ先生の顔を窺ってしまう。白さんから言われた言葉が頭をよぎった。
『……あなたも依頼人に騙された口でしょう。落とし前をどう付けるんですか？』
私達第七班は良い。しかし里はこれに対してどうするのか。
おそらくここでカカシ先生は私達部下やタズナさんに、里から受けるかもしれない処遇について言わないだろう。

何も知らないまま、裏で全てが終わるかもしれない。
「どうした？ホタル」
「いえ、その……」
カカシ先生が呆然とする私に声をかける。タズナさんも不思議そうな顔をして見つめていた。
どうしよう。このままで本当に良いんだろうか。
里がタズナさんに制裁を下すのかは分からないけれど、そんな可能性に目を瞑ってこの国から去っても良いのか。
冷や汗がじわりと額に流れる。いつの間にか口が自然と動いていた。
「……タズナさんはずっと私達を騙していたことを気にしていたんですよね。本来ならばBランクかAランク相当の任務を偽って申請したことに」
こんなことに首を突っ込んだら、絶対に面倒くさくなるのは間違いない。
けれどここまで関わってしまったのだ。見過ごすことはできなかった。
「タズナさん、私達は別に良いんです。望んでこの任務を引き受けたから。でも木の葉の里がどう思うか」
タズナさんが意外にも取り乱すことなくそれを聞く。私に言われるまでもなく本人の中で覚悟していたのかもしれない。
そしてカカシ先生は話し出す私を止めることなく、何故か興味深そうに見つめていた。……止めないと言うことは、このまま続けても良いのだと勝手に解釈する。
「タズナさんが今できることは木の葉の里の面子を潰さないよう【正当なBランク以上の報酬金を支払い、それとともに相応の賠償金を正式な形で払う】ことが必要なんじゃないでしょうか」
そう言えばタズナさんの顔が曇る。
「……そうじゃな。それが超良いと分かっておる。しかしワシには金がないんだ」
「それは理解しています。だけどタズナさんではなく【波の国】側でな

らそれを用意することができるんじゃないですか？」
「波の国側？」
「……これは私の勝手な想像ですが、この橋の事業の大元は波の国の大名からの依頼なんじゃないでしょうか？こんな国家規模のプロジェクトを個人や企業だけで行えるとは思えません」
推測だが、波の国の大名に依頼されてタズナさんは橋を作っていたのだろう。
そしてガトーの嫌がらせに対しタズナさんは木の葉の里に護衛任務を依頼した。タズナさんの独断か、それとも波の国に却下されたのかは分からないが。
それを話せばタズナさんは頷く。
「ガトーに暗殺されかけていることを大名に言おうと思っておった。だが、衰退する国家に乏しい資金繰り。そんな中であのお方には『大丈夫だ』と言うしか出来なかったんだ」
「じゃあ、自分で何とかしようと……」
「ああ、この老ぼれの命一つで事が収まるなら良いと思ってな。……だが、橋はあと少しで完成する！意地汚いのは重々承知しているが、それまでどうか待っていてほしい！橋が完成したらどうにでもしてくれ！」
頭を下げるタズナさんに立ち尽くしてしまう。
タズナさんが命懸けで木の葉の里に来たことは知っていたが、彼が最初から命を捨てる前提で動いていたことに言葉が出なかった。
けれど、話が逸れてしまいそうだったのを慌てて軌道修正する。
「……話を戻しますが、タズナさん個人が里側に賠償金諸々を払うのではなく、波の国側がそれを払ったらどうでしょうか？」
「そんな不躾なこと、あのお方に言えるわけ……！」
「……冷静に考えてみてください」
そもそもガトーによる嫌がらせがあったにも関わらず、何もしようとしなかった大名側がトップとして責任を放棄しているのだ。
確かにタズナさんが「大丈夫」だと言ってしまったのが問題だが、高齢であり国想いの男が言った空元気な言葉を鵜呑みにし、ろくに調べ

もしなかったあちら側にも問題はある。
それにタズナさんが木の葉の里に依頼を出したことによって、結果的にガトーまで始末できたことは大きい。
暴論であるが、そう考えれば全て丸く収まったと言える。Bランク以上の依頼金＋賠償金を国家間で正式な形で支払う羽目になったが、ガトーは始末できたし、こっちには念書まであるのだ。
またタズナさん側もその念書を盾にしながら波の国に交渉すれば、何とかなるかもしれない。
「ただ……　――――」
懸念事項が多々ある。
「――――……これをすることによって、タズナさんが波の国からどう思われるかが問題です。やり方にもよると思いますが、自分の代わりに国が金を出せと言っているようなものだし、国民からの反発も起こるかもしれない」
あくまで【相談】や【嘆願】という形で同情を買えば、大名が一人の哀れな橋職人に慈悲という手を差し伸べた【美談】として収まるかもしれない。
だけど、もしうまくいかなかったら……。
「提案した手前こういうことを言うのは卑怯なんですが、それを思うと強く薦めることはできません」
あれだけ国のために尽くしてきたのに、波の国で干されてしまう。そして木の葉の里から制裁を受け死んでしまう。
そんな悲惨な可能性に心がひどく痛んだ。けれど他の提案がうまく思い付かず、歯痒い。
するとその時、タズナさんはぽつりとつぶやいた。
「……嬢ちゃんはどうしてそこまで考えてくれるんだ？」
「そりゃあ、護衛任務とは言えタズナさん達にはお世話になりましたから……」
一宿一飯、いや七宿七飯の恩があるのだ。そう考えると彼の手助けくらいしたくもなる。
それにタズナさんが酷い目に遭うことによってツナミさんやイナ

リ君、ナルト君達の悲しむ顔を見たくない。
そう言えば、タズナさんは私を穏やかな目で見つめた。
「……最初はガキ臭くねえとんだ嬢ちゃんがいたもんだと思った。嬉しくも楽しくもねえのに笑って、大人顔負けの考えを思い付く。忍のガキってのはこういうもんかと思ったが他の小僧らを見て違うと分かった」
一体どうしたんだろう。それに何だかものすごい勢いで失礼なことを言われている気がする。
「……だが、嬢ちゃんが味方に対して超親切なことも知っておる。それに想像していた以上に義理堅いんだな」
タズナさんが苦笑する。
「嬢ちゃんがそこまでワシのために考えてくれたんだ。どこまでできるか分からんが、恥も外聞も捨てて老人の戯言だと大名様に頭を下げてみるか」
そして彼はからりと笑った。
「何、もしうまくいかなくても嬢ちゃんの責任じゃない。死ぬ覚悟はあっても、ツナミやイナリ、そしてこの国を見届けたいという心残りがある。生き意地汚いが……、わずかな可能性があるのなら、最後に一つ賭けてみようと思ってな」
それに対して私は胸が詰まるような思いがした。
家族や国を見届けたいという気持ちはもちろん、第七班である私への義理を込めて了承してくれたのかもしれない。
そう思うとタズナさんには心から生きてほしいと思う。
するとその時、今まで黙っていたカカシ先生が口を開いた。
「ホタル、出来るだけタズナさんをサポートしてやりな」
その言葉にカカシ先生からの許可が出たのだと頷く。もちろん言い出しっぺの私も協力するつもりだ。
しかしそこではっとする。
「あ、でも私がこの問題に介入したらまずいんじゃないでしょうか？私みたいな下忍が国際問題に首を突っ込むだなんて……、その事実が流出すれば他里になめられるんじゃないですか？」

「確かにそうだが……」
よく思い付くね、とカカシ先生が呆れたように言う。
それにタズナさんは首を振った。
「この問題に嬢ちゃんを矢面に出すような真似はせん。まあ、ほんのちょっとアドバイスをしてくれたら超有難いが……」
恥ずかしそうに言うタズナさん。そんな彼を見て、何というか「放っておけない」と人に思わせる不思議な雰囲気があるような気がした。
カカシ先生を見れば、頷いてくれる。
「もちろんです。私がどこまで関わって良いのか分かりませんが、出来る限りお手伝いさせてください」
「ホタルが木の葉の里の下忍として目立つ行動をするようでしたら、私の方から止めますよ」
私と先生がそう言うと、タズナさんは改まった様子で頭を下げた。
どこまで出来るか分からないし、どのような結果になるか嫌な想像ばかりが頭を過ぎる。
けれど全てがうまくいった時、他国他里が見る中、木の葉の里が弱小国家の波の国に対してどのような対応をとるか度量が試される。そのため非現実的な額の賠償金を求められることはないだろう。
「あの、私が言うのもなんですが、本当に良いんですか？私のアドバイスなんて子供の思い付きですし……」
「ははは！本当に今更じゃのう！」
中身は成人を超えているが見た目はどこからどう見ても子供なのだ。自分で言うのもおかしいが、こんな子供の言葉によく付き合ってくれると思う。
しかしタズナさんが笑い飛ばしてくれたため、私は本当に良いのかなと思いながらも安堵した。
「……蛙の子は蛙ってやつか」
カカシ先生が横で意味の分からないことを言ってる。
そうして私はあくまでタズナさんに助言をするという立場に立ち、

タズナさんや島民代表の大勢の大人達によって波の国との交渉が始まることとなった。

第十九話　タイミング

それから2週間後。
完成間近の橋の近くで第七班とタズナさん率いる波の国の人達が集まっていた。
橋の建設の大部分は終わり、波の国との交渉も終えることができたため、私達は木の葉の里に帰ることになったのだ。
ナルト君達は橋の工事を積極的に手伝っていたのか、波の国の人達と仲良くなったらしい。大勢の人に囲まれて別れを惜しまれている。
一方私はというと、波の国との交渉の心労からか顔色を悪くしていたため「大丈夫か？」と心配されていた。
な、何だこれ、めちゃくちゃ締まらないぞ……。
「嬢ちゃん、大丈夫か？……本当に世話になったな」
「大丈夫ですよ。それに私は準備をしただけで実行したのはタズナさん達ですから」
タズナさんがこちらにやって来て礼を言ってくる。
私がやったことと言えば、波の国から撤退する旨が書かれたガトーの念書と国家プロジェクトであるにも関わらず資金繰りが芳しくないという名目でサポートが不足していたことを交渉材料に、木の葉の里への賠償金諸々を支払う義務が国政側にあるという指摘（暴論）を婉曲的に伝える術をタズナさん達に教えただけであった。
そして波の国との直接的な交渉は全てタズナさんや島民代表の大人達に任せたわけである。
「まだ詳細は詰められていないが、大名様は木の葉の里に正式な形で賠償金を払うと約束してくれた。その念書をどうか火影に届けてほしい」
「もちろんです。……もし、それでもタズナさんに何らかの制裁が加えられてしまったら申し訳ありません」
「なあに、一度諦めた命だ。ガトーは始末できたし橋もほぼ完成しておる。もう思い残すことはない」

そうしてタズナさんがあっけらかんと笑う。
タズナさんや島の大人達から話を聞くに、大名から「何故もっと早く相談しなかった！」とこっぴどく叱られたらしい。
結局私が色々考えた交渉案よりも、大名の温情とタズナさんの【人に放っておけない】と思わせる人柄によって事がうまく運んだような気がする。
タズナさんに支払われるはずだった報奨金はカットされたが、それでも彼は晴れやかな顔をしていた。
するとカカシ先生が私達第七班を呼ぶ。
「おーい、お前ら。そろそろ行くぞ。……それじゃ、色々ありましたがお世話になりました」
「タズナのおっちゃん！みんな！また波の国に遊びに来るってばよ！」
ナルト君が元気に言う。
それにナルト君と仲良くしていたイナリ君が涙ぐんだ。
「イナリィ、お前ってば寂しいんだろー！泣いたって良いんだってばよぉ！」
「泣くもんか！ナルトの兄ちゃんこそ泣いたって良いぞ！」
言い合いながらも2人して泣く少年達に苦笑する。
こうして私達は任務を終え、木の葉の里に帰還した。

後日、私宛にタズナさんから手紙が来た。
波の国と木の葉の間に正式な契約が結ばれたらしい。どうやらタズナさんへの制裁もなかったようでほっと安堵する。
そしてあの橋は【ナルト大橋】と名付けられたそうだ。「嬢ちゃんには随分世話になったが、ナルトの小僧にも世話になったし、その、イナリの喜ぶ顔が見たくてな……」と申し訳なさそうに書いてあったのが何だか和む。
孫を溺愛するお爺ちゃんみたいでとても微笑ましかった。

◇

「まーた、飼い猫探し！俺達ってば波の国で大活躍したのに、なーんでこんなショボい任務をやんなきゃいけないんだってばよ！」

波の国から帰還後、第七班は以前のようなのんびりとした任務をこなしていた。

通算何度目かの脱走となる飼い猫トラを捕まえて、ナルト君がぎゃあぎゃあと叫んでいる。

平和だ。ずっとこんな日常が良い。

「先生、この後お話したいことがあるので少しお時間いただけますか？」

トラを捕獲しているナルト君に、前を歩くサクラちゃんとサスケ君。彼らを後ろから眺めながら、カカシ先生に小さな声で言う。

「ん？良いぞ。俺もホタルに話しときたいことがあるしな」

カカシ先生の話しておきたいこと……？何だか嫌な予感がするが私もどうしても伝えたいことがあった。

そう、今日をもって私は忍を辞めるつもりでいる。

ずっと前から辞めたい辞めたいと思っており中々タイミングが掴めずにいたが……。任務が落ち着いている今、このタイミングで辞めるのが最良だと判断した。

というのも、やっぱり私に忍は向いていない。

痛いのも辛いのも嫌だし、死ぬのも嫌。

それにここは忍の世界であり、人間は元々残酷な生き物だからやらなきゃやられる。

両親の死やアカデミーの教育、また忍という業界の噂から【敵を殺す】ということについて割り切って考えないといけないが、そういうのは正直言ってもう勘弁したい。

そして懐にしまった退職届を確認し、私はカカシ先生の後について行った。

間章
第二十話　カカシの受難①（カカシ視点）

時を遡って数日前、カカシは三代目火影によって火影邸に呼ばれていた。
おそらく波の国での護衛任務についてだろう。
依頼人による任務ランク虚偽に大富豪ガトーの暗躍。霧隠れの抜け忍再不斬との交戦からナルトの九尾のチャクラの漏出。果ては波の国と木の葉の里の外交問題まで。
Cランクどころではない任務内容にカカシは報告するのも一苦労だった。
「この度は波の国への護衛任務、ご苦労じゃったな。つい先日、波の国の使者との会談が終わった。これで里の面子も守られたというわけだ」
今回の件において波の国と橋職人であるタズナの双方の認識の過ちで起こったことであり、それに巻き込まれた木の葉の里に詫びとして賠償金が支払われるという結末になった。
波の国という経済的に逼迫する国への制裁がいかなものになるか周辺国が見守る中、現状すでに衰退している国家に対し天文学的な値の額を提示できるわけでもなく、木の葉の里は可能な範囲での請求に留まるに至った。
「それとは別に、今日は第七班の内一名について相談しようと思ってな」
「……それは【不知火ホタル】についてですか？」
「――左様」
三代目の言葉に「やはりそうか」と思う。
親戚であるゲンマ特別上忍と同じ焦げ茶色の髪に、穏やかそうな相貌。
一見どこにでもいそうな少女が波の国で見せた所業の数々は、アカ

デミーを卒業したばかりの下忍とは思えないものばかりであった。
「アカデミー時代から片鱗は見せておったが……。まさか、ここまでじゃったとはのう」
　ガトーへの制裁方法の提案内容に、波の国との交渉をタズナに仕向けた手腕。他にもあるが、彼女の思考と任務に対する姿勢はサスケとは違う方向で下忍のレベルから逸脱していた。
「ご意見番の2人が誉めておったぞ。あの【人たらし】が帰ってきたとな。木の葉の里には今、口一つで諸外国や他里を繋げられる者はほぼおらん。交渉役は何人かいるが、ホウカのような【里の顔】として振る舞える逸材は中々おらんのだ」
　シカクやイノイチといった強者達も確かにいる。しかし彼らは木の葉の名家の当主であり、おいそれと里外に出れる身分ではなかった。
　それもあってホウカは様々な外交の場に顔を出していたのだが……。彼のように身軽で、忍特有の血の匂いを感じさせない男は中々いない。
　どんな所に置いてもホウカは馴染み、朗らかな顔をして場の空気を掌握してみせた。
　カカシが任務報告の際、ホタルについて話すたびにご意見番のホムラとコハルの眼光は鋭く光っていったのを覚えている。
「不知火ホウカの後釜として育てることを、ご意見番は強く望んでおる」
「……でしょうね。実際アイツにはその適性がある。それに人を動かすのが上手いんですよ」
　何故か人に命令するのに慣れている上、それを感じさせない言い回しができる。ホウカと同じ天性の素質だった。
「――しかし、それをダンゾウが渋っておってのう」
「ダンゾウ様が？」
「ダンゾウは不知火ホタルを手元に置きたいそうだ」
　ダンゾウのことはカカシも知っている。タカ派の男であり三代目とは度々対立する忍だ。

ダンゾウがホタルを手元に置きたがっていると聞き、カカシの脳裏に【根】という組織が過った。表面上は既に解体されているが、おそらく秘密裏に活動を続けている。
狂信的な部下のいるダンゾウの派閥を再度潰すのは難しいと考えており、三代目も黙認せざるを得ないのが現状だった。
おそらくダンゾウはホタルを【根】に引き入れたいのだろう。
確かにホタルなら【根】でもやっていける。敵に対して非情な手段を思い付く彼女ならば馴染むだろうし、あの気難しいダンゾウの意を汲むことさえ造作もないだろう。
しかし……――。
「……お主は担当上忍としてこれをどう見る。【里の顔】になるならば、諸外国や他里からの心証が悪くては話にならん。悪評になるような噂は芽でも摘まなければならないため暗部に身を置くことは難しい」
「……」
「逆にダンゾウの下に置くならば、不知火ホタルは自身の性質に加え暗殺技術を身に付けるだろう。ホウカの才能とそれを掛け合わせた時、とんでもない忍が生まれるかもしれん」
三代目が唸るように言う。
この話にカカシの決定権はないだろう。ホタルをどう扱うかは里が決めるからだ。
けれど、そこでふと思い出す。
波の国にて、皆が寝静まった深夜。
ホタルは一人、仲間の生存を第一に考えて上司であるカカシに直談判した。このまま任務を続けるとみんなが死んでしまうかもしれない、と。
タズナを見捨てるという決断に心苦しみながらも吐露した彼女の姿と、自身の亡き親友の姿が重なった。
仲間を大切にし続けた心優しい少年の想いがホタルの中にもあるような気がしてならないのだ。
「……――後者は、ホタルの気質的に向いていないと思いますよ」

「それはどういう意味だ？」
「ホタルはあの年頃の子供にしては、非常に割り切った考えができます。他者から見れば冷酷なまでに。……しかし彼女の根本には常に【仲間の命】がある。善良な人間の命を守るために、自分を犠牲にしてまで敵を下そうとする」
カカシから見たホタルは食わせ者以外の何者でもない。
ガトーを洗脳しようと提案するし、勝手に利権に関する書類を作るし、イビキ顔負けのやり方で敵を尋問する（この件についてカカシはナルトから話を聞いた）
しかしその根本には、必ずと言っていいほどタズナやナルト達の命がかかっていた。
「不知火ホタルは甘過ぎます。情報と仲間の命を賭けた時、おそらく真っ先に仲間の命を取る。きっとこれは、あいつがダンゾウ様の部下になり様々な技術を身に付けたとしても変わらないでしょう」
そこら辺ホタルならうまくやれる気もするが……。カカシはあえてそれを口にすることはしなかった。
「忍として致命的な欠点です。それをあの方も許しはしないでしょう。……ですが、もちろん里の意向に従います。私もホタルも『やれ』と言われればやります」
そう締めくくれば、何故か三代目は微笑を浮かべていた。
里の長としての厳しい顔はなりを潜め、どこか遠い場所を見つめているようだった。
「……――面白いのう」
その言葉にカカシは眉を寄せる。
「仲間の命、か。カカシ、お前は不知火ホウカと話したことがあったか？」
「いえ、一度も……」
「そうか。……ホウカが何故潜入や外交ばかりしておったと思う？」
「それが不知火ホウカの天性の素質だったからじゃないでしょうか？」

そう答えれば三代目は楽しげに笑った。
「もちろんそれもあるが……。あやつはなあ、呑みの席で言っておったが、目の前で誰かの命が消える状況を作りたくない、そうならないよう必死に動いていただけだったそうじゃ」
仲間が敵と交戦して死ぬ。情報と天秤にかけて仲間を見捨てる。
そういった悲惨な現場が増えることのないよう、行く先々の諸外国や他里で話をつけ戦闘を回避してきた。
仲間の命を第一に考える娘のホタルと父親のホウカ。
そんな2人の目に見えない強い信条に、カカシも思わず笑ってしまう。
何という、血の濃さ。まるで生写しではないか。
「不知火ホタルの処遇はさておき、一度ワシも話してみるかのう。何より興味深い。あのホウカの忘れ形見と何を話すことになるのか。火影のワシさえも手玉に取られてしまうかもしれん」
不知火親子は罪深いの、と三代目が愉快そうに話す。
何やかんや手玉に取られた身として、耳は痛かったが悪い気はしなかった。
ホタルの処遇がどうなるかは分からないが、大事な第七班の部下である彼女の行く先が薄暗いものにならないかもしれないと思うと少しばかり安堵した。

◇

――それから数日後。
飼い猫探しのDランク任務はいつも通り平和に終わり、カカシはホタルから話があると呼ばれていた。
カカシも後日三代目から面談があるとホタルに伝えたかったため、ちょうど良い。
森の中にある開けた演習場にて、話が長くなるかもしれないと2人

は丸太のベンチに座った。
それにカカシは再び波の国の夜のことを思い出す。あの時もこうやって並んで話した。
大抵ホタルがカカシと2人きりで話したい内容と言えば、第七班のメンバーについてだ。
ホタルは何故か第七班の子供達を、まるで親が子に愛情を注ぐかのように可愛がっており、ナルトやサクラには優しく、サスケには反抗期の息子を見るような目で見守っている。
そしてカカシが雑に扱ったり目の前でイチャパラを読もうとすると「思春期の子供達の前で何をしている……？」という目で訴えた。たまにちくちくと注意されたりすることもあり、お前は何歳だと突っ込みたくなる。
「で、用は何だ？第七班のこと？」
ナルトの任務ランクを上げてほしいという癇癪のことか、繊細なサクラの心のケアか、サスケの協調性のなさか。
しかしホタルはそれに首を振った。
そして自身の懐から一枚の封筒を取り出す。ホタルは封筒を両手で丁寧に添えカカシに差し出した。
【退職届】
白い封筒に達筆な文字で書かれたそれ。あのコピー忍者と呼ばれるカカシでさえ理解するのに時間がかかった。
ホタルがそんなカカシに深々と頭を下げる。
「突然で恐縮ですが、退職することにいたしました。短い間でしたが、カカシ先生や第七班のメンバーには成長させてもらい大変感謝しています。実際に任務を通して様々な経験をさせていただきましたが……。何分力不足を痛感することが多く、自分にはもっと別の道があるのではと思うようになりました」
「……」
「つきましては、退職の段取りについて相談させてください」
すらすらと語られるホタルの言葉。転職を一度経験したことがあるようなその口ぶりに、カカシは咄嗟に目眩がした。

「……まじで言ってる？」
「まじで言ってます」
ホタルは薄く微笑んでいるが、瞳は真剣そのものであった。
カカシはこの時、何時間掛けてでもホタルを説得する覚悟を決めた。

第二十一話　カカシの受難②（カカシ視点）

カカシは天を仰ぎたくなった。
今ここでホタルが辞職した場合、三代目よりもダンゾウが放っておかないだろう。
噂によれば、ダンゾウは忍を引退した者に脅しをかけて根に引き入れると聞く。ダンゾウの魔の手が伸びるのは間違いなかった。
カカシは一先ず息を整え、ホタルが差し出している退職届を無視する。彼女は「何故受け取らない……？」と首を傾げているが見ないふりをした。
「まあ、落ち着いて話そうか。もう少し詳しく教えてくれないか？忍を辞めようと思った理由を」
そしてあくまで真摯な態度を取ることにする。
波の国でそうした方が彼女は本音で話してくれると気付いたからだ。だからこそナルトやサクラ、そしてサスケといった素直な子供達に対して殊更親切であったのかもしれない。
するとホタルはじっとカカシを見つめた後（何だか値踏みされている気もするが……）ぽつりぽつりと話し出した。
「……そうですね。ずっと違和感を抱えていたのですが、どうも私には争いごとが苦手でして。波の国では敵と対峙するたびに戸惑ってしまいました」
戸惑って、いた……？
カカシは一瞬ホタルが何を言っているか理解できなかったが飲み込んだ。
「それで？」
「自分には忍は向いていないと思いました。争いごとが嫌なのもそうですが……。例えば仲間の命を見捨てるような状況になった場合、私は絶対に見捨てることができません」
図らずしもカカシが三代目に言ったホタルの欠点を彼女自ら自覚し言い放つ。

しかし確かに忍として致命的だが、それを補える程の才能があった。というかホタルなら、あの手この手でそうならないよう仕向けることが可能だろう。父親の不知火ホウカのように。
「そういった弱点がある限り、今まで通り忍としてやっていくのは難しいと思います」
「……そうか」
ホタルの言葉を一通り聞き、カカシは考え込む。
さて、ここからどうするか。
ホタルには今2つの選択肢がある。
忍を辞めるか辞めないかではない。父親の後継になるかダンゾウの下に身を置くか、だ。
ホタルの将来を考えるとこのまま忍を続け、三代目の目の届く範囲にいた方が安全だろう。
しかし上層部の意向を先に話してはならない。カカシはジレンマに陥りそうになりながらも口を開いた。
「ホタル、お前の言いたいことは分かった。忍といっても一人の人間だからな。そう思うのもよく分かる」
「はあ」
「少し時間を置いて考えてみたらどうだ?今はそう思っているだけで、きっとしばらくすればおさまるかもしれない」
とりあえず時間を置くことを提案してみる。
しかしその瞬間、ホタルの目の色が変わった。おそらく気付いたのだろう。カカシがホタルの退職を止めようとしていることに。
「……私は任務よりも仲間を取るかもしれません。そんな自分を忍として続けさせても良いのでしょうか?」
「忍といっても色々あるさ。外任務に出ない奴もいるし、アカデミーの教師になる奴だっている。ホタルもそういった忍を目指せば良いよ」
そこでホタルの眉間に皺が寄る。
カカシに違和感を抱いているのかもしれない。
「カカシ先生は何か私に隠してることが……。いえ、何でもありま

せん」
ホタルが何か言いかけるが口をつぐむ。
いつもと様子がおかしいカカシに首を傾げるとともに、もしかしたら彼が複雑な立場にいるのかもしれないと察したようだ。
「それにホタルならそういった状況にしない力があると思う。……まあ、俺もお前には個人的に退職してほしいとは思わないかな」
「部下が退職したら査定に響きますもんね」
「そうじゃないよ」
そう突っ込めばホタルはくすりと笑った。
そして彼女は続ける。
「……けど、もう決めたんです。忍を辞めようって。カカシ先生には大変お世話になりましたが、こんな結果になってしまって申し訳ありません」
「ホタル……」
「それから相談なのですが、忍はどうしたら辞められるのでしょうか？手続き等色々教えてほしいのですが……」
ホタルはしおらしく言ってみせた後、無理矢理話を戻そうとする。
なるほど、辞める意思は固そうだ。彼女に対して情に訴えた物言いをしても無理だということを理解する。
そもそもカカシがいくら親切に話したとしても胡散臭気に見られるのはよくあることだった。
「ホタル、ここからは腹を割って話そうか」
やれやれと思いながらホタルに向き直る。それにホタルも姿勢を正した。
「まず一度忍になったら簡単には辞められない。辞めるんじゃなく引退するんだ」
怪我や高齢により忍を続けられなくなった者、結婚出産を機に引退した者、または心身の疲労によって上司からの配慮で引退を勧められた者（この場合休職扱いになることもある）
そういった事情がなければ忍は簡単には引退することはできない。

懇切丁寧にそれを教えてやれば、ホタルは呆然とした後「は、はい！」と焦ったように手を挙げた。
「ですが里には元忍でお店を開いている方がいらっしゃいますよね？呉服屋とか忍具屋とか」
「あれは元忍じゃなくて、家業か副業で店を開いている兼業忍だ。時に忍として任務に駆り出されることもある」
そう答えればホタルはぽかんとする。
そして次の瞬間顔を伏せた。よく見れば悔しそうにうめいている。
「で、でもそういった説明はアカデミーでされませんでした！説明義務を放棄しています！」
「忍の世界じゃ聞かなかった奴が悪いよ」
「ぐうう……！」
そんな彼女の様子をまじまじと見つめる。今にも地面に寝っ転がって二歳児のように暴れ出しそうだ。
普段振り回されっぱなしのカカシは何だか感慨深い気持ちになる。珍しいものを見たものだ。
「良いか？怪我もしてない、まだ子供だから結婚の予定もない、心身ともにピンピンしているお前を辞めさせることは不可能だ」
「良くないです。人権は無いんですか？」
「ジンケン……？そりゃ何だ」
「い、いえ。……じゃあ、私は忍を辞められないってことですか？」
「そうだ」
そう言えばホタルはがっくりと力尽きたように項垂れた。ぼそぼそと「怪我……？結婚……？健康……？」とこぼしているが大丈夫か。
直属の上司であるカカシがホタルのメンタルに配慮して忍を続けるのは無理だと判断した場合、辞職することもできるにはできる。
しかしそれを話すと、余計説得に時間がかかりそうだと思い口にしなかった。
「ちなみに何故忍がそう簡単に辞められないのか分かるか？」
「……下忍に昇格し任務を請け負った時点で木の葉の里内部の情報を少なからず持っているからですか？」

「よく分かってるじゃないか」
カカシの話を聞いて推測したのだろう。大方合っているため頷いて見せれば、ホタルはさらに落ち込んだ。
「大体、アカデミーで忍になる上での心構えを散々教え込まれただろう。当時はまだ理解し切れていなかったかもしれないが、それを聞いてなお忍になろうとしたのはホタルの判断だ」
「……おっしゃる通りです」
「自分の判断に責任を持て」
そこまで言われていよいよホタルは再起不能というような風貌で俯いてしまった。どこかばつの悪そうな、申し訳なさそうな顔をしているあたり、自分の軽率な行いに反省しているのかもしれない。
しかしこうして見るとアカデミーの教育もホタルみたいな奴にとっては詐欺のようにも思えるだろう。そういう奴が他にもいるかは分からないが。
「……悪いな。厳しいこと言って」
「いえ、カカシ先生の言うことは尤もですから……。私も申し訳ありませんでした」
いつも飄々としている彼女がしゅんと落ち込んでいる姿にため息を吐く。
こういった話は新米下忍にするものではないのだが少々熱くなってしまった。
「まあ、誰にどの任務を振り分けるかは上層部によって決まる。一度三代目に相談してみるのも手だぞ」
「三代目……？」
「ああ、三代目がホタルと話したがっていたからな。あ、辞める云々の相談はやめておけよ。謀反の意思があると思われかねない」
そんなカカシの言葉にホタルはゆるゆると頷く。
もっとカカシを言いくるめようとしてくるかと思ったが、意外にもホタルが素直だったことに驚いた。何時間でもかける覚悟でいたものの拍子抜けする。
もしかするとホタルは想像していた以上に、責任や規律といったも

のに弱いのかもしれない。

第二十二話　亡父の想い（一部三代目時点）

――甘かった。

今生の両親の死やアカデミーの教育から、ここがどういう世界か理解していたつもりだった。けれど私はまだ前世の常識に引っ張られて考えていたのだ。

やらなきゃやられる。人の命が比較的軽いこの世界では忍は死ぬまで里の財産として考えられて管理される。

そんなこと少し考えれば分かることなのに……。

「タイミング、完全に間違えたよなあ……」

雲一つない晴天の空の下。

両親の名前の彫られた慰霊碑を掃除しながら思わず呟いてしまう。

退職届を出すタイミングを完全に間違えた。私はアカデミー在学時点で忍になることを（そもそもなろうとしていなかったが）辞めるべきだったんだ。

でもさあ、やっぱり正気じゃないでしょ！ここ！

よく考えてみたらアカデミーの教育なんて洗脳だし（実際洗脳されかけた）忍なんて奴隷契約も良いとこじゃん！

あー…、アカデミーの時点で辞めるんだった。今生の両親に良い顔したくて優等生振ってたけど、なりふり構わず辞めるべきだった。普通に就職できると思ってたけど、そんなんじゃなかった。

ふと、このまま忍を続けたらどうなるのだろうという不安が過ぎる。

痛いこと辛いことの連続。死ぬ危険性のある任務に充てがわれて仲間や自分の命が危機に晒される。

そして良心の呵責も感じることなく同種殺しへの抵抗感が無くなった時、私はどうなるのだろう。

そう思うと心の底からぞっとした。考えたくもない。

こうなったら一生下忍のままでいたい。

今回の波の国の任務は例外的なものだ。実際の下忍の任務で前線

に出されることはまずないだろう。給料は低いけれど幸い副業可だし。

――それにしたって、どうして勘違いしてしまったんだろう。

カカシ先生はああ言ったけど忍を辞めて民間人に戻ったという人は少なくない。兼業の人もいると思うが、実際に辞めたと言う人達も確かに存在するのだ。

そう言った人達全員に、事情はあれど心身を害するような何かがあったのかと思うとこの業界の薄暗さを感じてしまう。

その時ふと、ナルト君の顔が頭に浮かんだ。

小さい頃、物心がつく前だと思われていた私は近所の人達の噂話を聞いていた。

九尾の襲撃事件

たくさんの死者

人柱力となった赤ん坊

大人達にのみ下された箝口令

大人達の噂と前世のわずかな情報ででしか推測できない。

けれど、もしかしたらその九尾の事件によって、数多くの忍が辞めていったんじゃないだろうか。心は壊れて、表立って理由を話すこともできず……――。

◆

里内を一通り見通せる遠見の水晶にて。

不知火ホタルが慰霊碑の前で立っているのを三代目火影――猿飛ヒルゼンが確認する。

暗部の報告によると彼女は日課である里の店々の手伝いをせず、最近は一人でぼんやりと考え込んでいることが多いらしい。

ヒルゼンは控えていた暗部の者に声かけ、火影室から風のように消

えた。

「久しぶりじゃのう。不知火ホウカの娘――ホタルよ」

慰霊碑の前でぼんやりと立ち尽くすホタルにヒルゼンが後ろから声をかける。

すると彼女は肩をびくりとさせて勢いよく振り返った。

「火影様!?」

「よいよい、楽にしておれ」

呆然とするホタルにヒルゼンは苦笑する。彼女はそれにゆるゆると頷きながら「お久しぶりです」と会釈した。

「カカシからすでに話は聞いておるか?」

「はい。火影様から話があると……」

「なあに、ただの世間話じゃ。ホウカの娘が下忍になって幾月。お主の近況が気になってのう」

そう言えば肩の力が抜けたのか、ホタルは少しだけ微笑む。

こうしてヒルゼンとホタルが直接的に会話するのは二度目だ。

一度目は不知火夫婦の葬儀の日。

【人たらし】である不知火ホウカと彼の右腕だった妻のミツは、雲隠れの忍によって殺された。

――彼らが殺害される数年前。

雲隠れによって画策された日向一族長子の誘拐事件とその際に日向家当主が雲隠れの忍頭を始末した件で、木の葉隠れと雲隠れは緊張状態に陥っていた。

しかしそれを諌めたのが単身雲隠れに向かった不知火ホウカであり、雷の国と火の国の大名との間に新たに結ばれた経済条約と自身の命を盾に交渉してみせたのだ。

供もつけず単身でやって来たホウカを当時の雷影はえらく気に入り、それから数年かけて対話を続けていたのだが……――。

雲隠れの里での会談帰りに、不知火夫婦は強硬派である雲隠れの忍によって殺害された。

遺体は谷の奥底に捨てたらしく見つかることはなかった。再度木の葉隠れと雲隠れが緊張状態に陥ったが、何年もかけてホウカが繋いだ講和への道を叩き潰すわけにはいかず、また彼の意思に反するとして戦争は回避されたのである。
あれからもう幾年。
葬儀の際、身内であるゲンマに連れられ、茫然と立ち尽くしていた幼い子供の姿はどこにもない。
娘のホタルは下忍となり、第七班のメンバーに囲まれながら伸び伸びと（少々自由過ぎるが……）任務を全うするようになった。
「カカシから話は聞いたぞ。波の国の一件は天晴れであった。木の葉の面子を潰さず他国との強いパイプが出来た」
「いえ、私は提案しただけで実行したのは波の国の人達ですよ。あの人達が頑張ってくれたからこそです」
「謙虚じゃのう」
「本当のことです。……あの一件は、依頼人の方の人柄や波の国の大名様の温情があって上手くいったことですから」
ヒルゼンの言葉にホタルが困ったように苦笑する。
ホタルをホウカの後継として育成する。しかし先の一件で強烈な才能を見せつけたものの、今後【里の顔】として正しく育つかは分からない。
ヒルゼンは、ここでホタルを見極めようと思っていた。
「最近はどうだ？何か悩みや困ったことはないか？」
そう尋ねれば彼女はしばらく考え込んだ後「いえ。大変なこともありますが、皆に支えてもらいながら何とかやっています」と首を振る。
表情は穏やかであるが、こちらを探っているような瞳でヒルゼンを見つめていた。
「班の者達はどうだ」
「カカシ先生のことはとても頼りにしております。チームメイトの子達もしっかりしていますし、班員に恵まれていると思いますね」
「あの悪戯小僧のナルトもか？」
「はい、あのナルト君もです」

ホタルの言葉にヒルゼンは口元を綻ばす。
しかし、ここからが本題だ。
「少々お主に聞きたいことがあってな。波の国についてだ。何故お主は依頼人に波の国と交渉をするよう仕向けた」
「……それは」
「木の葉が任務ランクを虚偽申告した依頼人に制裁を与えるかと思ったか？……今回もし波の国からの賠償はなくとも、里側の忍が重症および死亡しなかったため咎めはしないつもりであった。あくまで、表向きはな」
裏で波の国を揺するくらいのことはしただろう。さすれば依頼人は波の国からの何らかの制裁を受け、木の葉隠れは波の国周辺から警戒されていたはずだ。
そして事情を知らぬ他国他里からは小馬鹿にされていたかもしれない。ホタルがもし動かなければ、そういった筋書きを辿っていた。
「何故あのようなことをした。責めているわけではないが、見て見ぬ振りもできたはずだ」
波の国とのパイプを繋ぐことによって上層部への評価を欲したのではないか。自分の利益に繋がるよう動いたのではないか。
一下忍に対し、過剰なまでの警戒かもしれない。しかしヒルゼンの脳裏にこれまで木の葉の里を裏切った忍達の顔が思い浮かんだ。
昔は彼らもアカデミーを卒業し一人の下忍として過ごしていたのだ。まだ何ものにも染まっていないこの時期に、何かしてやれていたらと後悔せずにはいられなかった。
ヒルゼンの言葉にホタルはしばらく考え込む。
すると彼女は困ったように苦笑した後、ぽつりとつぶやいた。
「依頼人のタズナさんからもそう聞かれました。『嬢ちゃんは何でそこまで考えるのか』って。……私はただ、放っておけなかっただけなんです」
ホタルが続ける。
「火影様が何を思っていらっしゃるかは分かりかねますが、血の流れない手段があるならばと【提案】をしただけです。本当にそれだけで、

私個人の力は何もありません。仕向けたとか、そんな大層なものではありませんよ」
「本当にそれだけか？」
「それだけ……？」
ヒルゼンの言葉にホタルはきょとんと首を傾げる。
どこからどう見ても波の国の橋職人に同情した心優しき少女にしか見えない。これが演技であれば相当な狸だ。
するとその時、ホタルは口を開いた。
「……もしかしたら火影様、すでに気付いてらっしゃるのではないでしょうか？……私が忍に対して甘いことを考えていたことを」
「甘い、とは？」
「今回私が行った行動は明らかに任務から逸脱したものです。それを私はただ『放っておけない』という理由だけで動いてしまいました。……この甘さが忍としては致命的なんですよね」
想定とは違う方向から飛んできたホタルの言葉に、ヒルゼンは一瞬呆けてしまった。
何故かホタルは気まずそうな顔をし、焦った様子で言い繕っている。
わざと話を逸らしたか。
しかしやはり、どう見ても彼女が本音で話しているようにしか見えない（ホタルとしてはヒルゼンに忍としての甘さを指摘されるかもしれないと思い、叱られる前に先に話しただけであった）
そして目の前の少女は不安そうな瞳で、無言のヒルゼンに首を傾げている。
「火影様？」
当初、ヒルゼンはホタルに何かしらの裏があると思っていた。
ホウカの娘だからと言って彼のような高潔な心意気を持っているかは分からない。カカシの目が節穴だと言わないが、話を聞く限り彼女は権謀術数に長けている。
けれど目の前の少女が嘘偽りもなくそう話しているのを、数多の忍を見てきたヒルゼンは理解できてしまった。

――不知火ホタルは本気で不安を抱え、吐露している。
ふとヒルゼンは彼女の身内であるゲンマとの会話を思い出した。ホタルと面談をする前に、彼からも話を聞いていたのだ。
『ホタルは一見腹黒そうにも見えますが、気を使い過ぎているだけの普通の子供ですよ。勘違いされやすいですが根本的にあいつは善意のみで動きます』
それは身内であるゲンマにしか見せない一面なのかもしれない。しかし彼女の本質でもあるのだろう。
計算高さを感じるものの、根本には人としてあるべき優しさをしっかりと持ち合わせている。周囲を自分の意のままに操ろうとする意思は決してなさそうだ。
しばらく考え込み、ふうと大きく息を吐く。
そしてヒルゼンはじっと見つめるホタルに口を開いた。
「……お主のことを少々誤解しておったようじゃな。お主の行った行為は、何というか、少々腹が黒くてのう……」
「腹が、黒く……？」
「しかしお主がそうでないと理解した。どこまでもホウカに似ておるな」
やはりダンゾウの下に置くのは気質的に向いていないかもしれない。根の諜報部ならやれないこともないが、情報と仲間の命を天秤にかけた時、任務を放棄するような甘さも見受けられる。
それならば不知火ホウカのような道を歩ませた方がまだ、忍として使えるだろう。
それにまだアカデミーを出たばかりの下忍だ。後々忍としての心構えを教え込むとしよう。
「疑われて幻滅でもしたか。どうせホウカからワシのことは好好爺とでも聞いておったんじゃろう」
ヒルゼンが小さく笑う。
新米下忍に対してあらぬ疑いをかけていたのだ。本人は理解しきれていないようだが、ヒルゼンの醸し出す物々しい空気はさぞ恐ろしかっただろう。

ちなみに当のホタルはというと力が抜けたように脱力していた。
彼女からして見れば叱られると身構えていたものの何故か見逃してもらえたのだ。そしてそれを、ヒルゼンはもちろん知る由もない。
腹が黒いと色々言われたものの、三代目火影のその柔らかい表情を見てホタルは嵐が去ったことを理解する。
双方のすれ違いはあれど、互いに良い形で話が終着しようとしていることに違いなかった。
そしてホタルはヒルゼンの言葉に笑みを浮かべた。
「父は火影様のことをとても気の良いお人だと話されていました。優しくて太陽のようなお方だと」
それをヒルゼンは眩しく思いながら聞く。
「火影という立場にいるならば、もちろんお優しいだけではないということも理解しております。けれど父がああも頑なにそう話すということは、私達子供にはそんな風に火影様を見てほしいという願いもあったのではと思うんです」
ホタルはくすりと笑って続けた。
「火影様が私に対して色々と思うことがあるかもしれません。しかし父の話をしてくれた火影様の姿も本当の姿だと思うので、疑われたり腹が黒いと言われただけで幻滅なんてしたりしません」
そう言い終えたホタルにヒルゼンはふと懐かしい気持ちになる。
この二世の実力はどうか、ホウカ並の働きができるかはまだ不明である。心のどこかで彼女に期待し過ぎているというのも否めなかった。
しかしホタルの行くその先に、かつての部下であった不知火ホウカがいる気がしてならない。
亡き父の血が色濃く残る娘のホタルがこの先どのような忍になるのか、ヒルゼンは年甲斐もなく興味が湧いた。

中忍選抜試験編

第二十三話　束の間の平和

「ホタル、お前には事前に話しておくけど中忍選抜試験どうしたい？」
「中忍選抜試験……？」
　波の国の任務を終えて早数日。カカシ先生に呼ばれて演習場にやって来たところ先の言葉を言われた。
　個別に呼ばれたため、てっきり先日の退職騒動について改めてお叱りを受けるのかと思っていた。しかし予想とは違うことを出されて呆気に取られてしまう。
　この時期になると中忍選抜試験が開かれるのは知っていた。開催地は毎年変わるが、民間人の観戦もできる本戦（個人戦）には一度ゲンマさんに連れられて観に行ったことがある。
　私のようなやる気のない下っ端下忍には到底縁のない話だと思っていたものの、一体カカシ先生は私個人に何を話したいんだろう。
　演習場に横たわる丸太に並んで腰をかけながら、おそるおそるカカシ先生の話を聞く。
「近々他里合同の中忍試験が行われるが、俺はお前ら第七班全員を推薦した」
「ぜ、全員？……それは、部下の私が判断するものではないですが少し早くないでしょうか？」
　そんなカカシ先生の言葉に咄嗟に待ったをかける。
　ていうか、第七班のどこの何を見てそう判断したのか。中忍という役職は一小隊の隊長相応の力量レベルが求められるはず。もしかして今後の中忍試験に慣れさせるという目的込みで言っているのだろうか。
　私の怪訝そうな表情にカカシ先生が溜息を吐いた。
「俺はお前達の成長を鑑みてこの結論に至ったよ。ホタルの言いたいことは分からなくもないが……というか、意外と顔に出やすいんだ

から気を付けなさい」
「す、すみません」
「それから話を戻すけど、ホタルはこの中忍試験どうしたい？」
カカシ先生の真っ黒な片目が私を捉える。その瞬間、何とも言えない嫌な予感がした。
この返答によっては今後の私の身の振り方が大きく変わるような気がしてならない。
「ええと、その前に何点か確認したいのですが……この中忍試験は個人受験でしょうか？それとも班ごとの受験になります？班ごとの受験でしたら、第七班はフォーマンセルなのでどのような措置がとられますか？」
「……中忍試験は基本的にスリーマンセルの班で受ける。そのため公平を期して数余りの班には班員を一名、数の少ない班に組み込んで参加させるんだ」
「それは、数合わせで編成した班が不利になりますね」
「そうでもないよ。大体班員が足りないチームは中忍試験に合格した者が一抜けした班だからベテランも多い」
その言葉に「なるほど」と納得した。
となれば私達第七班が受験する場合、誰か一人は他の班に移動しなくてはならないのか。
ちなみにフォーマンセルの班員一人が試験を辞退する場合はどうなるかと聞けば、スリーマンセル参加厳守という形を取っているためそれは不問とのことらしい。
「それからフォーマンセルで別班に移動する班員は協調性のある者が選ばれる」
「……」
「な！ホタル」
「……そうなんですかあ。えへへ！」
にっこりと笑いながら何故か同意を求めてくるカカシ先生に私も引き攣りながら笑ってやり過ごそうとする。やめてくれ。そんな顔で私を見ないでくれ。

そもそも私は一生下忍のままでいたいんだと思っていると、先生はにっこりと笑った。
「それは置いといて前に忍を辞めたいって言っていたよな？そう思うと今回の中忍試験はホタルにとってはどうなんだろうと思ってさ」
優しい……。しかし優しいけれど、そこはかとなく裏がありそうで怖いのも事実。こういう時に優しい人が一番やばいと自分の勘が叫んでいた。
しかしカカシ先生にはこれまでの恩義もある。
波の国や退職騒動でのフォローをしてくれたカカシ先生の推薦を蹴ることは非常に申し訳ないが、中忍試験には絶対に何があっても受けたくないという気持ちもあるのだ。
「ホタル、正直に答えてくれ。中忍試験を受けたいか？」
カカシ先生がまっすぐ言う。
どうしよう。先生の恩義と自分の気持ちが天秤にかかりぐらぐらと揺れてしまう。
（辞退したいけど、カカシ先生の推薦を断るのは申し訳ないな。でも下忍のままのんびり任務をこなしたいし、そもそも中忍試験なんて受かるはずもないと思うし……）
しかしそこでふと思う。
まず、こんな気持ちで中忍試験に受けることこそ失礼ではないかと。
「ちなみに、私の不参加によってスリーマンセルが成立できない班とかあったりしますか？」
「それについてはこっちでどうとでもなるから、ホタルは気にしなくていいよ」
「……分かりました。でしたら私、中忍試験受けません」
そうきっぱりと言えば、まるで最初から分かっていたかのようにカカシ先生がからりと笑った。
「ま、そうだろうな！」
「申し訳ありません。せっかく推薦していただいたのに……」
「いや、気にするな」

や、優しい！退職騒動で相談に乗ってくれた時も思ったのだが、最近カカシ先生が未だかつてないほど優しい気がする。
しかしその直後、先生はがらりと雰囲気を変えて言い放った。
「――――で、だ。ここからが本題だ」
「へ？」
その言葉にぴたりと体が硬直する。
「ナルト達が中忍試験を受ける間、ホタルには任務を受けてもらう」
ナルト君達が中忍試験を受けるのは決定事項なのかと思いながらも目を丸くする。
「任務とは？」
「潜入だ。詳細は俺の口から言えないが、近々火影様より召集されるだろう」
「……分かりました」
何だ。そっちが本命だったのか。
そんなカカシ先生に対して思わず苦笑してしまう。
きっとこの人は最初から私が中忍試験を受験しないと分かっていて潜入任務を用意していたのだろう。私も上司からの任務には応えなくてはならないし、流石に忍である以上逆らおうとも思わないため良いのだが……。
「……」
けれど、以前の退職相談のこともあってカカシ先生からあまり信頼されなくなってしまったなと気付いてしまった。考えすぎかもしれないが、中忍試験を受験しない私の罪悪感に託けて任務拒否できないよう話を進めたのかもしれない。
「どうした？ホタル」
「いえ、何でもないですよ」
少しだけ落ち込むもののこうなったのは自分が悪い。もし私がカカシ先生の立場だったら、一度退職しようとした部下に対し全面的に信じるのは難しいだろう。
「カカシ先生」
「ん？何だ？」

「……その、私は一度退職しようとした忍ですが、任務を受けるからには精一杯やろうと思います。カカシ先生には色々と気を使わせてしまって申し訳ありません」
何だか居た堪れなくなってそう言えば、カカシ先生は何故かしばらく考え込んだ後ぐしゃぐしゃと私の頭を撫でた。
「カ、カカシ先生？」
驚いて目を白黒させているとカカシ先生が「うんうん」と頷いている。
「いやあ、感慨深くてな。ホタルも随分素直になったと思って」
「はあ」
「初対面の頃はめちゃくちゃ猫被っていただろう」
「見るからに怪しかったものでつい……」
「言うようになったな」
くしゃくしゃになった髪を直しながら、くすりと笑ってしまった。すると先生が「まー、あれだ」とどこか参った様子で言う。
「ホタルが思ってるようなことは思ってないよ。お前のことだから必要以上に色々考えてるんだろうけど」
そんなカカシ先生に何と返したら良いか分からず、とりあえず頷いた。何だか余計気を遣わせちゃったようで申し訳ない。
「今回の任務、ホタルならやれると思うが気を張ってやれよ」
「はい」
どんな任務であるかはまだ分からないけれどやるしかない。おそらく中忍試験を受けるだろうナルト君達と別れる間、任務内容の他にどういった人達と組むのか気になった。

第二十四話　新チーム

どうしてこんなことになったのだろう。
隣に立つ二人を見る。一人はどこか浮世離れした雰囲気を持つ色白の少年――サイ君と、もう一人は長い黒髪の美しい女性――ユウさんだ。
「ホタル、そのぼうとした面を何とかしてくれないかな。ブスに拍車がかかっているよ」
「サイ君、厳しすぎない？」
ここが日本だったらあらゆる方面から大バッシングを受けるだろう。さも当然ですと言わんばかりの顔をするサイ君に、最年長のユウさんが「女の子にそんなことを言っちゃ駄目よ」とめちゃくちゃ当たり前なことを言う。
そんな二人を横目にふと空を見上げる。
何でこうなったんだろう。潜入するといっても、まさか中忍試験に潜入するだなんて。

時を遡って数時間前。
火影室に呼ばれた私を待ち構えていたのは、火影様にご意見番、そして顎に傷のある御老人（相談役だろうか）だった。
そんな錚々たる面子に嫌な予感がする。明らかに一下忍に対して一任務を伝える面子じゃない。
冷や汗をだらだら流しながら部屋の中に入れば、火影様が静かに口を開いた。
「今回、お主には中忍試験を内部から監視してもらう」
その言葉に思わず首を傾げる。
監視するとはどういうことかと思っていると、火影様はいつもの好々爺然とした姿とは打って変わって厳しい表情で話し出した。
「木の葉内部に他里のスパイが潜んでいるという情報を得た。他里の

交流の多い中忍試験で連中の尻尾を掴めるかもしれん」
「スパイ、ですか？」
「そうだ。また他里の下忍や引率の上忍達が何を仕出かすか。それをお主達には受験生として内部から監視してもらう」
なるほど。確かに元から受験する気のない私は合否に縛られて動けなくなることはないし、現役の下忍という立場から中忍試験に潜入しても違和感はないだろう。
しかし納得したけれど、気持ちの方は全く追いついていなかった。
（いくら何でもこの間下忍になったばかりの私には荷が重すぎるよね？木の葉隠れの下忍として身を隠している他里の忍を私一人でどうこうできるはずがないし……）
けれどその時、火影様との会話にふと引っ掛かりを覚えた。
お主、達？
「ホタルにはこの両名と班を組んで中忍試験に参加してもらう」
すると次の瞬間、ボフンという音をたてて煙の中から二人の人物が現れた。
二人とも白塗りの動物の面を付けているため顔は分からないが、体付きからして一人は少年で、もう一人は長い黒髪の女性だろう。
「二人とも暗部の出だ。彼らとホタル自身のやるべきことをしっかりと見定め行動するように」
暗部との任務にスパイの洗い出し、また他里の忍達の監視。中忍試験がどういったものかは今のところ把握できないが、試験官だけでなくこうして内部から探らなくてはならないところにきな臭さを感じる。
そして火影様から『私自身のやるべきこと』と言われ、きっと本物の下忍である私は二人の隠れ蓑となって、彼らの情報収集のサポートをすることを望まれているのだと理解した。
ふと両隣に立つ二人を見つめる。
暗部という特殊な忍であるため、何か起こった場合自分は切り捨てられやしないかと不安になってしまう。
けれど上層部が揃っている手前、渋々頷くしかなかった。

そしてこの不安はもっと別方向で振り切ることに、この時の私は知る由もない。

◇

「ホタルももっと怒りなさい。こいつが付け上がるだけよ」
「年下と言い争おうとする貴女に言われたくありません」
「言い争おうって言ってるんじゃないわ。チーム行動をするのならそれなりに協調性を持った振る舞いをしろってことよ。そちらの先生に習わなかったのかしら？」
「そういう貴女は随分と甘いですね。それはそちらの方針ですか？」
中忍試験の潜入任務でチームを組むことになった暗部の両名は、演習場の一角に場所を移すとお面を取って自己紹介をしてくれた。
私と歳がそう変わらない色白の少年がサイ君で、美貌の若い女性がユウさん。
そしてサイ君とユウさんだが、何故かこの二人、あまり仲が良くなかった。二人とも互いに良い感情を持っておらず度々こうして言い合いを始めるのだ。
……これ、どういう人選なんだろう。チームを組むからには能力や性格に応じて編成を行っているとは思うんだけど、明らかにそれ以外の何かが含まれている気がしなくもない。
サイ君の明け透けで失礼な物言いにユウさんが呆れて怒っているのもあるのだが、それ以前に何かある気がした。
（ていうか、そちらって何だろ。二人とも同じ暗部出身なんだよね？暗部の中にある隊が違うってこと？）
しかしよく分からないまま暗部についてどうこう聞くのはあまりにも怖すぎる。そのまま二人の様子を黙って見ていると、ユウさんがはあと溜め息を吐いた。
「とりあえず、私達が中忍試験に参加するのは第二次のサバイバル試

験まで。本戦予選と本戦までに他里の忍達が怪しい動きをしていないか監視して、木の葉内部にいるスパイを炙り出すわよ」
彼女の言葉に頷く。ちらりと横目でサイ君を見れば、任務に対しては何の文句もないのか彼も素直に頷いていた。
「質問があるんですが……試験と呼ぶにはおそらく担当の試験官がいらっしゃいますよね？この任務について試験官は把握されているのでしょうか？」
「情報が漏れないよう特別上忍達とごく一部の上忍達しか伝達されていないわ」
聞けば中忍試験の試験官は特別上忍と中忍達で行われており、更に秘密裏に暗部の幾人かが他方から監視するらしい。
そして中忍試験への潜入について何点か詰め、日が傾き始めた頃に解散となった。
中忍試験に推薦された下忍達の詳細と、試験官である中忍や特別上忍の把握。それから第二次試験の試験会場である死の森の地理などを頭に叩き込まなければならない。
（これ、サクラちゃんだったら聞いただけで覚えられるんだろうなあ……）
気が遠くなりそうだが、とりあえず任務を請け負ったからには出来る限りやるしかなかった。
どんよりと気が滅入っていると、いつの間にかサイ君の姿がない。帰ってしまったのだろう。演習場に残されたユウさんと二人きりになり、何故かじっと私を見つめてくる彼女にへらりと苦笑いを浮かべた。
この任務において私がやれることはかなり少ない。サイ君とユウさんが円滑に動けるよう私が率先して他の下忍達と交流するのだが、足手まといになる気がしてならない。
隊のリーダー的な存在であるユウさんに一先ずそのことを伝えようとした時、彼女は先に口を開いた。
「あなたのこと、ずっと前から知ってたわ」
ユウさんの言葉に「え？」と聞き返してしまう。すると彼女はくす

りと笑った。
「ホタルの担当上忍にはたけカカシって人がいるでしょう？その人、私の先輩なの」
「そうだったんですね」
「あなたのことを色々聞いたわ」
色々って何だろう……。
カカシ先生には迷惑をかけっぱなしであるため、面倒くさい生徒くらいに思われているだろう。それに表面上は仲良くやっているものの、カカシ先生と私は根本的に気が合わない。
「先輩から話を聞いて、ホタルがこの任務につく上で足りないものがあるのが分かったわ。それが何かあなた自身分かっているかしら？」
そんなもの逆にあり過ぎて困る。
「色々あると思いますが、やっぱり忍としての技量がまだ足りないのは自覚しています。今回の試験では一次試験のペーパーテストと二次の死の森へのサバイバル試験がありますよね？ペーパーテストはまだしも、他下忍を監視しながら死の森を通過するのは……」
それを言えばユウさんも頷いた。
「そうね。今の実力じゃ不安が残る。だから中忍試験が始まるまでみっちり修行をすることにしたわ」
「へ？」
「毎日体作りと忍術の練習はしているみたいだけど、それじゃあ足りないわね。持久力もそうだけど三日三晩、休息なしで動けるようにするためのチャクラの効率的な使い方。それから……」
そしてユウさんが私の体をぺたぺたと触る。「本当はカカシ先輩やゲンマさん辺りに頼みたかったんだけど二人とも忙しい身だから」と言って二の腕や腹のあたりを突くユウさんに固まるしかない。
心なしか急にいきいきとし出す彼女に戸惑ってしまった。あ、あれ？もっとクールな人だと思っていたけど、こういう感じなのかな。
「あ、明日から特訓ですか？」
「いいえ。今から特訓よ」
嫌な予感がひりひりとして仕方がない。不敵な笑みを浮かべるユ

ウさんの瞳に闘志が見え隠れしていて、思わずたじろいでしまったが「逃げるなよ?」とでも言うようにユウさんがにっこり笑って私の右腕を掴む。

もしかしたら大人しく中忍試験を受けた方がまだましだったかもしれない。

するとその時、彼女はふと表情を変えた。

「それから、あのサイって子には気を付けなさい」

「……サイ君ですか?まあ、少し変わっているとは思いますが……」

しかしそこではっと止まる。ユウさんがひどく真剣な表情をするものだから、そんな表面的なことを言っているのではないと察した。

そして彼女はそれ以上は言えないのか「それじゃあ行くわよ!」と言って駆け出した。

第二十五話　今世の父について

ユウさんとの修行が始まってしばらく。中忍試験まで後少しということから、第七班の任務以外全ての時間を特訓に費やすことになった。

ユウさん曰く今以上のチャクラコントロールの向上とシンプルな体力作り、またアカデミーで習わない諸々の技術など目下必要とのことで、彼女がいない間も用意されたカリキュラムをこなすのに忙しい。

差し迫った時間内で焦燥感に駆られるがこれをサボると死亡率が上がるため、死ぬ気でやらなければならなかった。

演習場に流れている川の水面を冷や汗を流しながら駆け上がる。木登りの修行の延長線上であるため何とかコツを掴むことができたが、止まるとユウさんからのクナイが飛来するため気を緩めることができない。

するとその時、足元の水面から水飛沫とともに手が伸びた。ユウさんだ。それを躱し印を結んだ瞬間、背後からクナイが飛んできた。

変わり身の術で丸太に突き刺さったそれを通り抜け、ゴールに向けて川の上流へ目指す。

「まだちょっと甘いわねえ」

しかし水面から現れたユウさんが猛スピードで背後から追いかけてくる。そして私の腕を掴んできたが、腕は蜃気楼のようにゆらりと歪んで宙に溶けた。

「幻術ね！」

嬉しそうにするユウさんが怖い。

あと少し。そしてあと少しでゴールだと思った矢先に、ユウさんが一瞬にして目の前に現れた。

背後で幻術に引っかかったのは影分身か！

そう思ったのも束の間、私はぺしんとおでこを叩かれそのままバランスを崩して川の水面に突っ伏した。

「――――チャクラコントロールもまずまずだし、水面歩行しながら印を展開する余裕も出てきたわね」
「はい」
「ホタルからは何かある？」
「最後の影分身ですが、やっぱりチャクラ量が多くないと習得は難しいでしょうか？」
「影分身はチャクラを等分させて実体を作る術よ。たとえ今ホタルがそれを習得したとしても、それで戦うことは限りなく難しいわ。ま、あれば便利よね」
　川の水で濡れ鼠状態になりつつユウさんの講評を聞く。ナルト君や先程のユウさんの見て影分身があればできることは増えそうだと思ったが……。
「ユウさんは先天的にチャクラ量が多いんですね」
「ええ、まあね」
「……お、覚えておいて損はないので、せめて印だけでも教えてほしかったり……」
「しょうがないわね。ホタルがものに出来るか分からないけど」
　下忍のままでいたいというのに、先の任務をこなすために強くなる。何か変な感じだなと思いながらも、生き残るためにはやらなければならなかった。

◇

　数日後、定食屋のカツ定食を頬張りながら、目の前にいる叔父のゲンマさんを見つめる。
　私の身体年齢がまだ未成年ということもあって、彼は月に一度食事がてら様子を見に来てくれるのだ。
　不知火家特有の焦げ茶色の髪くらいしか似ていない身内を前に、私

は連日ユウさんによって行われる修行に疲れ切っていた。第七班の任務やこうした身内との用事以外の全ての時間を費やしているため、こうして体は休まっても精神的にへとへとである。
　そして今回、ゲンマさんを前に中忍試験の潜入任務について聞きたくて仕方がなかった。
（ゲンマさんも試験官の一人なんだよね。ユウさんが特別上忍とごく一部の上忍は知っているって言ってたけど、ゲンマさんもそれを把握しているのかな）
　しかし、定食屋は閑散としていて私達しかいないが、こんな場所ではあれこれ聞くのは流石に憚られた。
「さっきからどうしたんだよ」
「あ……ああ、ごめんね。ええと、私達ってあんまり似てないなあって」
　とりあえずふと思い付いたことを言えば、ゲンマさんが「そりゃそこまで似ないだろ」と返す。
「そもそも兄貴と俺が似ていないからな。それにホタルは母親のミツさん似だろ」
　確かに数年前に亡くなった今世の父と弟のゲンマさんは顔から性格まであまり似ていない。今世の父は柔和そうで愛嬌のある顔立ちをしていたが、ゲンマさんは目鼻立ちが整っている。生前の父が「ゲンマは良いなあ」と羨ましがっていたのを思い出した。
　そして私はというと今世の母（ゲンマさんの言う『ミツさん』）にそっくりであるため、彼の言葉に頷くしかない。
　するとゲンマさんはしばらく考え込んだ後、口を開く。
「ホタルは兄貴達のことをどこまで知っている？」
　いいや、全く。何も知らない。
　今世の両親は早く亡くなってしまったこともあるけれど、私に対して仕事内容を語る人ではなかったのだ。
　忍だからこそ幼いアカデミー生の我が子にぺらぺらと話すなんてあり得ないのだが……話したとしても「シカクの息子めちゃくちゃ賢いぞ……」だとか「みたらしさんはああ見えて面倒見が良いから困っ

たら頼りなさい」だとか世間話しか聞いたことがない。
素直に首を横に振ればゲンマさんは「だよな」と言って呆れた目をする。
「あ、でも」
けれど一度だけ父に頼まれて仕事について行ったことがあった。
風の国と火の国の大名が砂の里で会合を開く際、その大名の子息達の世話係兼遊び相手として歳の近い忍の子供達がお呼ばれすることになったのだ。
そして選ばれたのは私で。歳の近い下忍の子供も候補として挙がったが、父の娘である私が同行することに決まったらしい。
「――その時に父さんが大名に挟まれてたり、無茶振りされたり、忍の人達に指示を出してたりしていたから中間管理職みたいな感じかと思っていたんだけど……」
「間違ってはないな」
大名の子達の遊び相手になる傍ら、せかせかと働いていた父を思い出す。そう言えば何故かゲンマさんは何とも言えない顔をした。
「まあ、あれだ。兄貴はよく他里との調整役をやっていてな。木の葉には対外的な政殿を引き受ける『外務班』ってのがあって、そこの室長でもあったんだ」
「……全然知らなかった」
「そうは見えなかったからな」
今世の父は、転生して変に大人びた私に対して気味悪がることなく育ててくれた非常に出来た人物だ。しかし何というか、少しばかり抜けたところがあって、よく母から甲斐甲斐しく面倒をみてもらっていたのを覚えている。
そんな人が察するに重要なポジションに就いていたとは想像ができなかった。
「それに、兄貴はホタルが下忍になるまで話すつもりはないと言っていた」
けれど、そうなる前に亡くなってしまった。
雲隠れの忍の襲撃に遭ったことは知っていたが、もしかするとそん

な父の背景もあって狙われたのだろうか。
「――――話は変わるが、今回の任務はそういったことも含まれてお前が選出されたんだ」
ゲンマさんの言葉にはっとする。
詳細は語られていないものの、今回私が受け持つ中忍試験の潜入について言っているのが分かった。
それと同時にたったそんなことで、とも思ってしまう。
私が下忍であり元々受験する気がなかった身だからこそであるが、『血筋』に対してそこまで期待する里に気味の悪さも感じた。
(本当に私の住んでた場所と感覚が違うんだよね……。元の世界でも世襲とかはあったけど、何か違うような)
波の国でカカシ先生と話した時に同じようなことを感じたのを思い出す。
「……すごく買い被り過ぎだと思うけど、引き受けたからには一生懸命やるつもりだよ」
「無理はするなよ」
「うん、ありがとう」
今回の任務は暗部とともにこなすけれど、命の危険がある。ナルト君達が参加する中忍試験も、内容を聞く限り生死に関わる試験が用意されている。
とても優しい人達だけれど、ふと忍としての厳しさが垣間見えてしまいここが異世界であることを実感する。
けれどそれも、少しずつ慣れてきてしまった。

◇

(あ、雨隠れの忍だ)
ゲンマさんと別れ、帰路につく。
その道中にすれ違う他里の額当てをした忍達に、あとほんの数日で

中忍試験が始まるのを嫌でも実感した。
カカシ先生はナルト君達に受験させようとしているけど、どうなんだろう。ユウさんから試験内容を聞いたのだが、第二次試験には『死の森』のサバイバルが待っている。
ナルト君やサクラちゃん、サスケ君が命懸けで成長する代わりに酷い目に遭うのかもしれない。
――――他里の忍達の陰謀や、火影様が言う木の葉の里に潜むスパイによって。
「……」
まだそうとは決まったわけではないけれど、ひしひしと嫌な予感を感じる。おまけにユウさんからサイ君には気を付けろと忠告された。
何だろう。色んな思惑があり過ぎる。
一先ず気持ちを切り替えて、中忍試験の潜入に向けて準備をするしかない。参加下忍や試験官達の情報の把握、それだけでなく死の森へ入るのだから相応の用意も必要だろう。
するとその時、ふと大きな瓢箪を背負った赤髪の少年とすれ違った。ちらりと一瞬見えた額当てで彼が砂隠れの忍だと分かる。
目の周りがクマでおおわれた不健康そうな子に心配するものの、そのどこかで見覚えのある顔に不思議に思った。

第二十六話　第七班として

数日後、遅刻するカカシ先生を待つ最中、第七班の私達は橋の下を流れる川で水面歩行の修行を行っていた。
ユウさんに水面歩行の術を教わって以来、カカシ先生の待ち時間を利用して、第七班の皆と修行していたのだ。
「どうしてこんなこと思い付いたのよ？木登りの応用で水の上を歩くだなんて……」
「ちょっと知り合いに教えてもらってね」
川原に腰を下ろしながら尋ねてくるサクラちゃんにそう答えれば、彼女は「ふうん」と頷く。
水面歩行の術を皆に教えて数日、サクラちゃんはすぐに覚えサスケ君もコツを掴んであっという間に歩けるようになった。しかし何故かナルト君だけいつまで経っても習得できない。
川の水面にはすでに習得したサスケ君とぶくぶくと沈んでいくナルト君の姿があった。そんなナルト君を仕方がなさそうにサスケ君が救出している。
「木登りが出来るから水面歩行もいけると思うんだけど……」
「ナルトが不器用なだけなんじゃない？」
それにサクラちゃんはくすくすと笑った。
「……――」
「ん？どうしたのよ？」
「……ううん、何でもない」
水面に沈むナルト君に呆れた様子で手を貸すサスケ君。そしてどこか楽しげに笑うサクラちゃん。
そんな彼らの様子を見て、たった今、カカシ先生やユウさんの気持ちが分かった気がした。
皆はまだ、自分達が中忍試験に推薦されたことを知らない。中忍試験がどんなものかは決して教えられないが、この子達が少しでも強くなって怪我をしないでほしいと思う。

カカシ先生が私達の修行を見たり、ユウさんが私を強くしようとするのには、そういった思いがあるのかもしれない。
するとその時、上から視線を感じた。ん？と思い見上げてみると、すぐ近くに建てられた鳥居の上にカカシ先生が座っている。
そして爽やかに「やあ、諸君おはよう！今日は人生という道に迷ってな」と言い放つ先生に苦笑するしかなかった。

◇

「いきなりだが、お前達を中忍選抜試験に推薦しちゃったから」
カカシ先生の言葉に三者三様第七班の子達が目を丸くする。中忍試験がどういうものかすでに知っていたようで、ナルト君は嬉しそうに騒ぎ始めた。
「推薦は強制じゃない。受験するかしないかを決めるのはお前達の自由だ……といっても、受ける気はあるようだな」
カカシ先生がくるりと私達の顔を見渡す。
ナルト君やサスケ君は愚問とは言え、サクラちゃんもやる気に満ちた顔をしていた。波の国の任務で彼女が一番チャクラコントロールが上手くその応用技を提案していた辺り、それが自信に繋がっているのかもしれない。
「サクラちゃんも受験する？」
念のためそう聞けば、サクラちゃんは頷く。
「……受かるかどうかは分からないけど、私だって成長しているもの。どこまでやれるか試してみたいわ」
「――そっか」
中忍試験がどんなものかすでに知っている身としては非常に止めたいが止められない。
ふとカカシ先生を見れば、咎めるようにじとっと睨まれた。部下の覚悟に水を差すなってところだろう。
「お前らに受験する意思があるようだから先に言うが、この試験はスリーマンセルでしか受けられない」

「ん？ちょっと待ってばよ。俺達フォーマンセルだから……」
「お前らの内、一人は別班に移動してもらう」
そんな先生の言葉に一瞬ナルト君達に緊張が走る。
そりゃあそうだよね。見ず知らずのチームに入れだなんて初受験のこの子達には荷が重すぎる。
そして茶番だと思いながらも手を挙げた。
「私が別班に移動するよ。良いですよね？カカシ先生」
「ああ、構わん。それと、ホタルが別の班に行ったとしても俺の部下であることは変わりない。しっかりとやれよ」
「はい。ご期待に添えるよう頑張ります」
特に何の打ち合わせもしていないが、爽やかに言い返すカカシ先生に白々しく思う。この人、こういうところが本当に掴めないんだよなあ……。
「ちょっとタンマ！ホタルってばそれで良いのかよ！せっかく第七班で頑張ってきたのに……！」
「そ、そうよ！そんなこといきなり言われたって納得できないわ！その、試験の仕組み上、仕方のないことだと思うけど」
そして「本当にホタルはそれで良いの!?」と焦ったようにナルト君達が詰め寄る。
それに思わずぽかんとしてしまった。
二人とも決して薄情ではないが、ナルト君はサクラちゃんが、サクラちゃんはサスケ君が班にいれば、まあ良いと思っていた。けれどこうやって引き止めてくれるのは嬉しいものがある。
訝しげな目で見ているサスケ君はさておき、班分けされた当初あんなにもばらばらだった第七班がこうもまとまっていたことに感慨深くなってしまった。
「ありがとう。でも私は大丈夫。それに、もしかしたらチーム同士で協力し合えるかもしれないでしょ？本当は少し不安だけど、班は違っていても皆で中忍試験を受けられるから心強いんだ」
何だか申し訳なさも感じながらそう言えば、二人はどこかしゅんとした様子でうつむく。

私は決して中忍試験を受験するわけではない。
けれど第七班のこの子達を、何か企みを持っている他里の忍や内部に潜むスパイから守れるかもしれないと思うと、任務への取り組み方も変わってくる。
カカシ先生を見れば「そうだな」と頷いた。
「今後任務をこなす上で急造チームを作ることがある。ホタルが班を一時的に抜けることもあるし、この中忍試験で合格者が複数出た場合、スリーマンセルになるよう他の下忍達と受験することもある」
その言葉にナルト君達が顔を上げる。
「後にも先にもこういったことには慣れておいた方が良い。中忍試験は危険だがその分得るものも大きいだろう。試験後ホタルに成長した姿を見せてやれ」
「ホタルもな」と言う先生に、私も同意するように第七班の三人に笑みを見せた。
カカシ先生はいざという時にこういうフォローを入れてくれるから有難い。
まだきちんと納得はしていないものの、ナルト君やサクラちゃんの顔を見るに少しばかり気持ちが浮上したようだ。
そしてちらりとサスケ君に視線を向ける。
彼もナルト君達のように納得していない顔をしているけれど、どこか不信感のあるその表情が気になった。

◇

カカシ先生からの連絡も終わり、各自解散後。サスケ君が一人になったところを見計らって、後ろから彼に近づいて行った。
「……何の用だ」
やっぱりばれていたのか、くるりと振り返って溜め息をつかれる。
そんなサスケ君に苦笑しながら駆け足で隣に並んだ。

「いや、たまたま帰り道が同じでね。それにさっきのサスケ君の様子を見て何かあるのかなと思って」
そういえばこうやってサスケ君と二人きりで話すのはあまりない。というか、サバイバル演習で４人で鈴を取りに行こうと持ち掛けた時以来かもしれなかった。
（そもそも私、サスケ君によく思われていないんだよね……）
ナルト君やサクラちゃんには割と甘いと思うのだが、サスケ君は私に対して些か厳しい。
今も「何だこいつ？」という表情をしているため、サスケ君の中の私の印象がどうなっているのか怖くて聞けなかった。
すると彼はしばらく黙り込んだ後、ぼそりと言う。
「お前、カカシとグルなんだろ。あんな下手な芝居うちやがって」
その言葉にぎくりとする。
え、もしかして潜入任務のこと知ってる……？
「お前が中忍試験を別チームで受験するのは、あらかじめ決められてたんだろ。じゃなきゃ試験直前にこんなことを決めるのはおかしい」
「あ、ああ。なるほど……」
「大体、カカシをちらちら見過ぎなんだよ」
やれやれといった様子で肩をすくめるサスケ君に安堵する。どうやら潜入任務のことはばれていないらしい。
それと同時に以前カカシ先生に「顔に出やすいんだから気を付けなさい」と言われたことを思い出した。気を付けなきゃな……。
「ごめん。実はカカシ先生から事前に相談されてたんだ。中忍試験は別班で参加しないかって」
「それならわざわざあの場で芝居しなくても良かっただろ」
「あそこで相談されたら絶対にナルト君達に止められてたでしょ？それなら私から行くって言った方がまだ皆も納得するんじゃないかな」
後者に関しては完全な推測であるけど、あの場でカカシ先生が名指しするよりも私が進んで「チームを移動する」と言った方がマシだろう。
それに、私が他人の指示で班移動した場合、残された第七班の子達

に罪悪感を与えてしまうかもしれない。
適度に脚色を加えつつ返せばサスケ君はまたしても、ぐぐっと眉間に皺を寄せた。
「……ナルトはともかくサクラはそこまでガキじゃないだろ。それに、お前は一体何なんだ？」
「何、とは……」
「チームをまとめようとしたかと思えば、そうやって勝手に俺らを決めつけて誤魔化し調子の良いことを言う」
そう言われて、思わず立ち尽くしてしまった。
サスケ君は裏で起こっているやり取りを知らない。
中忍試験の潜入任務や内部にスパイが隠れているかもしれないのを知らないため、私とカカシ先生が独断で決めたことを不快に感じているのだ。
けれど、それだけじゃない。私はサスケ君に『第七班の子達を子供扱いしている』と暗に見透かされてしまったような感覚がしていた。
「この狸野郎」
「た、たぬき野郎!?」
するとサスケ君は立ち止まり、半目で睨んできた。
そして不貞腐れたように吐かれた言葉に目を丸くする。狸野郎って。
それから彼は大きく息を吐いた。
「……お前があいつらのことを思ってるのは分かるがな」
「ごめんね、本当に。今度から皆にきちんと相談するよ」
そう謝ればサスケ君はふいと顔をそらす。
ナルト君やサクラちゃんに対しても思ったけれど、彼も不器用ながら第七班のことを大事にしているのだろう。
（良い班だな）
明日から中忍試験が始まる。
彼らが子供だからとかではなく、大切な仲間として何者にも邪魔されず、ただ試験に臨んでほしいと心から思った。